

亜細亜大学

学術文化紀要

ISSN 2436-9411 (オンライン)

第39号(2021)

[論 文]

- 日本語の歌詞における地名の分析 石 塚 隆 男 1
堀 玄
- 非業の死をめぐって 奥 井 智 之 53
—— 宗教社会学的考察 ——
- 許可求め表現の使い分け 小 竹 直 子 71
—— 「シテモイイ」と「サセテモラッテモイイ」の
違いに注目して ——
- スペイン語の再音節化についてのパイロットスタディ 高 澤 美由紀 91

[研究ノート]

- アンドレス・ベリョ『カステイーリャ語文法』
日本語訳 (5) 土 屋 亮 107
- 亜細亜大学「総合学術文化学会」規程集 131
-

総合学術文化学会

2022年1月刊行PDF版

Journal of the Society for General Academic and Cultural Research

No. 39 2021

CONTENTS

[Articles]

- Analysis of Place Names in Japanese Lyrics *Takao Ishizuka* 1
Gen Hori
- On Violent Death *Tomoyuki Okui* 53
— A Study from the Perspective of Sociology of Religion —
- Proper Use of Japanese Expressions Requesting Permission *Naoko Kotake* 71
— Focusing on the Differences between “Shite-moi” and
“Sasete-Moratte-moi” —
- Resyllabifications in Spanish *Miyuki Takasawa* 91
— A Pilot Study —

[Research Note]

- Translation in Japanese of Andrés Bello's
Gramática de la lengua castellana: Part 5 *Ryo Tsuchiya* 107
- Rules and Guidelines of the Society
for General Academic and Cultural Research 131

The Society for General Academic and Cultural Research
ASIA UNIVERSITY
TOKYO, JAPAN

亜細亜大学

学術文化紀要

第 39 号

2021 年

総合学術文化学会

日本語の歌詞における地名の分析

石塚 隆男 堀 玄

Analysis of Place Names in Japanese Lyrics

Takao Ishizuka Gen Hori

Abstract

This paper presents a statistical analysis of Japanese song lyrics, focusing on place names, using a database consisting of about 90,000 songs (Database A) and a database consisting of about 260,000 songs (Database B). As a result, the authors found that the most frequent place names in Japanese song lyrics were “Tokyo” and “Japan,” regardless of the era. In addition, the authors developed the following seven categories for analysis: 1) the number of place names in lyrics, 2) the percentage of foreign place names in lyrics, 3) the decrease in the diversity of place names in lyrics, 4) the existence of collocations of place names in lyrics, 5) the relationship between the position of appearance and place names in lyrics, 6) the relationship between the position of appearance and titles in lyrics, and 7) the relationship between the frequency of appearance of place names and phonology. In this study, using the seven criteria, working hypotheses on the relationship between the frequency of occurrence of place names and phonology will be established and tested.

1 はじめに

人間の思考・判断や予見力を補い、適切な判断や意思決定を行うためには、対象に関する網羅的なデータ収集に基づくデータサイエンスによる分析や可視化が不可欠である。今日ではインターネットの普及に伴い、データの電子化や IoT 機器からのデータの自動取得が進み、多くの分野で従来なら不可能に近かった分析や活用が可能になっている。巨大な非構造的

データを扱うビッグデータ解析もそのひとつであるが、人間の知的生産活動が情報発生源の場合、自然言語により記録されたテキストデータを対象とする自然言語処理の技術が必要となる。膨大なテキストデータは質的データであり、前処理的なコード化から研究目的に応じたコード化までを効率的かつ正確に行うには自然言語処理や機械学習の手法が効果的である。大規模で構造的に等質なテキストデータセットはコーパスとよばれ、言語研究はもとより個別の対象領域の分析や機械学習アルゴリズムの開発・改善に活用されている。

日本語の楽曲の歌詞は各時代の社会的・文化的背景を反映した巨大なコーパスであり、以前から重要な分析対象と考えられてきた。特に近年、計算機と形態素解析技術の進展を背景として、統計的・計量的な手法で歌謡曲の歌詞を分析する研究が増えつつある。歌謡曲の歌詞を計量国語学な手法で分析した先行研究としては、伊藤雅光（1997～2001）による松任谷由美の歌詞の分析、細谷舞・鈴木崇史（2010）による女性シンガーソングライター 10 名の 116 曲の歌詞の分析、棚田輝嘉・山内博之（2012）によるフォークソング 147 曲とニューミュージック 94 曲の歌詞の比較分析、富永愛（2015）による「いきものがかり」の歌詞の分析などが挙げられる。小林佳織・狩野恵里奈・鈴木崇史（2013）は、1977 年から 2011 年の過去 35 年間にわたる女性グループによる楽曲（34 組 439 曲）について主成分分析とランダムフォレストを適用し探索的に分析を行っている。研究手法が単語の頻度を中心としたテキストマイニングからデータサイエンスや人工知能へと変わりつつある中で、歌詞を対象に機械学習を適用した研究報告も散見される。機械学習自体を目的化するのではなく、十分なデータや背景知識をもとに対象を観察し、洞察と分析を重ね、特徴や法則性を明らかにしていくことが有用な人工知能を開発する立場からも近道であろう。歌詞から自然や生態系の変化を知る試みとして、農研機構の片山直樹らのチームは、『童謡・唱歌索引』に収録された 1872 年から 1945 年までに創られた童謡や唱歌、約 12,550 曲の冒頭 1 節のテキストデータを収集し、分

析した結果、全体の4分の1の曲に自然や生き物が含まれていたことを報告している（朝日新聞（2020））。著者らによるこれまでの研究としては、清水淳・堀玄（2012）による季節を主題とする歌謡曲341曲の歌詞の分析、堀玄・齋藤大輔・嵯峨山茂樹（2013）による確率モデルに基づく自動作詞法の研究が挙げられる。2015年12月26日にNHK総合テレビで放送された「データなび」では、上記の自動作詞法を用いて紅白歌合戦の各年代の楽曲を平均した楽曲が製作された。

本稿では、より大規模な歌詞コーパスを用いて、複数のアーティスト、複数の作詞家、複数のジャンルにわたる横断的な分析を行い、先行研究のような小規模な歌詞コーパスからは得ることが難しい知見を得ることを目的とする。特に本稿では、大規模な歌詞コーパスを利用し、歌詞に現れる固有表現のひとつである「地名」に注目し分析を行う。地名は具体的な場所を表す固有名詞であり、自然言語処理では固有表現（named entity）に分類される。一方、作詞家およびリスナーの立場から見ると、地名は、一語に多くのイメージやエピソードを内包し、郷愁やノスタルジーに訴えるキーワードとして、歌謡曲の歌詞の固有表現の中でも重要な位置を占めると考えられる。次節以降では、コーパス駆動的（corpus-driven）な立場から、約9万～26万曲の日本語の歌謡曲の歌詞データに対して形態素解析を行い、結果から地名を抽出し、年代別に集計し考察することにより、歌謡曲の歌詞に現れる地名がもつ特徴を明らかにする。

2 歌詞とは何か

歌詞は歌の重要な構成要素のひとつである。歌を創るということは自分一人で楽しむのではなく、不特定多数の人に聴かせる、さらには歌えるかどうかは別として歌ってもらうことを前提としている点で、詩の創作と大きく異なる。ル・ボンは『群衆心理』の中で「断言が群衆を魅了する」「反復すれば嘘も本当になる」「幻想に感染する群衆」と述べているが（武田砂鉄（2021））、流行歌はまさにこの「断言・反復・感染」を狙ったもので

あり、歌詞の中でメタファーを用いた断言や反復が多用されている。そこで、本節では歌詞の成り立ち、世の中にある歌の数、歌詞の構造、歌詞中に地名を用いる意義について述べる。

2.1 歌詞の成り立ち

最古の歌が何であるかは定かではないが、わが国では祭祀や祭礼の際に巫女がふしをつけて祈りや祝詞を唱えたのが歌を含む芸能の始まりと言われている（沖浦和光（2009））。神に奉納する歌謡である神楽歌が最も古いとされ、奈良・平安時代には雅楽により旋律を伴った神楽歌が神事の際に奉納されている。民間では、祈願の際の祝詞に抑揚をつけた謡物^{うたいもの}が日本各地に伝わる民謡の起源のひとつとされている（日本大百科全書）。宮廷の神楽歌は和歌と同様に 31 文字の韻律にしたがった歌詞であり、和歌を編纂した『万葉集』には人間の喜怒哀楽が「雑歌」「相聞歌」「挽歌」として編纂されていることから和歌に日本の歌の原点を見ることができる。『万葉集』に収録された約半数近くの歌が「詠み人知らず」であることから奈良時代には和歌の創作がかなり大衆化していたことがうかがわれる。しかし、和歌が旋律をつけて歌として表現されるようになるのは平安時代以降に現れた遊女や白拍子からであろう。歌詞に命を吹き込み、喜怒哀楽の感情や祈り、情景を感情移入し歌として表現できるのがアーティストであることは今も昔も変わらない。近代から現代に至る日本の歌は上代から中世の宮廷文化と民衆文化の影響を少なからず受けているといえよう。

歌詞は韻律をもつだけでなく、メロディとともに歌われ聴かれる著作物であり、音楽性に重点が置かれている。すなわち、耳から入るだけで主題の情景やイメージが浮かぶように意味よりもノリやリズム、響きを考慮し、詞が選択もしくは創造されているのが歌詞である。かつては歌詞を先に創り、後からメロディをつけていく「詞先」が主流であったが、1980 年代以降、歌謡曲はメロディを先に創り、メロディに詞を合せていく「曲先」あるいは「メロ先」が主流になっている（田中俊（2019））。おそらく、「曲

先」の方が「詞先」よりもメロディが主体の音楽作品にあった制作手法と考えられる。このように歌詞とは言語により表現され（＝言説、ディスクール）、しかもメロディに符合し、既存の歌詞の模倣でないという厳しい制約条件を満たさなければならない。ミシェル・フーコーは言説を生産するためには無限定の言語表現ではなく、「希少性」を高める、すなわち、「希少化」が必要であると述べている（内田隆三（2020））。作詞家は、歌詞の表現において、なぜそれではいけないのか、逆に、なぜそれ以外ではいけなかったのか、を問うことから、作詞のプロセスは希少化に相当する。

一般に、小説家や詩人は自分で自由にテーマを決め、作品を創作し、上梓するが、歌謡曲の世界ではある特定のアーティストの所属事務所やレコード会社からの依頼に基づき、作詞が行われる。小説や詩は作家の個人的な作品であるが、歌詞は楽曲の企画からマーケティングに至るまでのプロジェクトチームの成果物とみることができる。あるメロディをある歌手が歌っても全くヒットしなかったが、歌唱力がある別の歌手に合せ歌詞を書き直した結果、大ヒットにつながった事例（阿久悠（2009））から、歌詞が曲やアーティストの魅力を引き出す重要な役割を担っていることがわかる。以上のことから、歌詞の創作とは作詞家の感性の赴くままに言葉を並べるのではなく、テーマとの整合性やアーティストの新たな魅力の発掘も考慮し、無限に存在する言葉の中からメロディに最も合う言葉を選択あるいは創出し、希少化していく高度な知的生産活動である。

2.2 歌はいくつあるか

世の中にいくつ歌があるかは日本国内に限っても想像がつかないが、書籍の新刊が毎日約 200 冊刊行と言われていることから、歌詞とメロディを伴う新譜の楽曲数をその 10% と見積もっても年間 7000 曲が生まれていることになろう。

図 1 に日本レコード協会に登録された演歌・歌謡曲・ニューミュージックのシングルとアルバムの新規商品数の年別推移を示す。

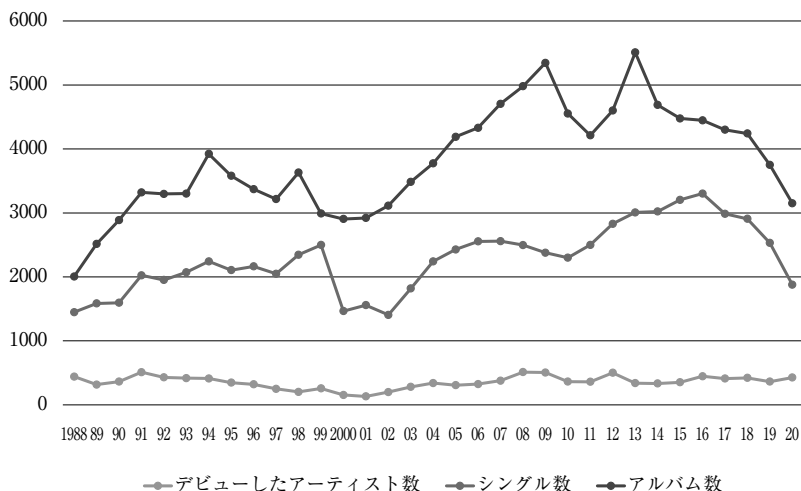


図1 演歌・歌謡曲・ニューミュージックのシングル、アルバムのレコード、CDの新規商品数の年別推移

出所：一般社団法人 日本レコード協会ウェブページの新譜数の統計情報を元に作成

図1よりCDシングルの新規商品数はほぼ2000件台で推移しており、ネットから曲単位での購入や動画を無料視聴できる昨今の状況を反映し、2016年以降、商品としてのCDの公刊は減少傾向にあることがわかる。CDアルバムには1枚に10曲前後収録されていることから演歌や歌謡曲に限っても年間数千の規模のオリジナル曲が生まれていると推察される。年間のデビューしたアーティスト数は400～500組の範囲で推移しており、2010年代中頃までのシングル、アルバムの微増傾向に影響を与えていると考えられる。シングル、アルバムの商品数が大きく減少した時期は2000～2001年、2009～2011年であり、2期間とも商品数はV字型に回復していることから商品化の時機は景気や世の中の気分左右されることをうかがわせる。

作詞家、作曲家、出版社等からの信託により著作権管理を行う日本音楽著作権協会（JASRAC）の2020年度事業報告書によれば、内国作品の作品データベースへの登録件数は年間2677件である。

以上のことから歌の数の正確な数字は不明であるが、年間 5000 のオリジナル曲が新たに創作されると 1980 年代から 2020 年までの 40 年間で 20 万曲に上ることから広く歌を収集すると約 20 万～30 万曲の規模になると予想される。

2.3 歌詞の構造

本稿では、曲名（タイトル）、アーティスト、作詞家、作曲家、歌詞、リリース年月日、等の情報が公表されている楽曲を分析対象とする。わが国最大の歌詞検索サービスである「歌ネット」(<https://www.uta-net.com>)には、2021 年 8 月現在で約 301,000 曲について、上述の情報が公表されている（歌ネットを運営する株式会社ページワンのサイトから引用）。登録された楽曲のジャンルは、J-POP、歌謡曲、演歌、アニメソング、童謡・唱歌など多岐に渡る。歌ネットには、曲名と歌詞が同じでアーティストが異なる曲も独立した曲として登録されている。こうした曲の多くはカバー曲であり、あるアーティストの曲の作詞家がシンガーソングライターとして自分でもその曲を歌いリリースする場合もある。歌詞の中の単語の集計を行う際にはこうした重複に注意する必要がある。

歌詞のジャンルには感情を描く一般的叙情タイプ、ストーリーを描く物語タイプ、言葉自体や表記にこだわる言葉遊びタイプの 3 つがあるが（上田起士（2019），p.137）、これらの集合は重なっており、歌詞を厳密に分類できるものではない。聴き手が歌を聴きながら内容を理解できるよう一般的叙情タイプや物語タイプの歌詞は「起承転結」や「序破急」等の構成で書かれることが多い。歌詞の中には、一番、二番、三番と明確に分かれている歌詞もあれば、一番、二番の境が明瞭ではなく、サビの繰り返しやサビの次に大サビが来る歌詞もある。特定の地名が二番の歌詞に出現するケースもある。そこで本稿では、ある歌の歌詞の冒頭から末尾までの全フレーズを歌詞データとする。作詞の観点から、歌詞は複数のフレーズからなる A メロ、B メロ、サビ等のブロックをさらに束ねたコーラスにより構

成されている。私たちは、歌を聴き、あるいは歌詞を読むことにより、これらのブロックを認識することができるが、歌詞のテキストデータからブロックを認識するのが困難な場合もあるため、本稿では地名がどのブロックに出現したかは追跡しない。

歌詞の1行には1〜3個程度のフレーズがスペースにより区切られて書かれている。「曲先」の場合、メロディに合せフレーズの音数が決まるが、通常、各フレーズは音数で約10文字前後、「てにをは」等の機能語を除いた内容語で3〜5語程度で構成されている。音数が10文字前後であることは、人間が一度聴いただけで直後に再生できる記憶容量が 7 ± 2 であるとする米国の認知心理学者である George A. Miller (1956) のマジカルナンバー説にはほぼ一致する。各フレーズが、3〜5語の意味のある単語により情報の塊=チャンクを構成していることは、Nelson Cowan (2000) の 4 ± 1 が短期記憶の限界であるとする説に符合する。フレーズを音として記憶するか、チャンクとして記憶するかは同等と考えられる。歌詞における1フレーズの長さが経験的にほぼ一定の範囲であることはこのように脳科学の見地からも傍証があることがわかる。

2.4 歌詞中に地名を用いる意義

地名とは場所を表す固有名詞であり、社会で共有された公的な名称である。さらに、知名度のある地名そのものがブランドである。商品名に「北海道〇〇」「瀬戸内の〇〇」「富士山麓の〇〇〇」等、地名を冠した商品は地域ブランドと呼ばれている。既に述べたように、作詞家は自由・無限定に言葉を並べ歌詞を創作するのではなく、メロディやアーティストの制約の中でリズムや響きを考慮し、絶妙な決め打ちにより地名を選択していると考えられる。歌詞は聴き手に伝わるのが求められるので、町おこしやご当地ソングなどで地名をブランディングすることが目的でない限り、知名度の低い地名=ブランド力のない地名は歌詞に用いられない。また、歌謡曲や演歌には叙情や恋愛をテーマにした歌が多く、テーマに相応しい地

名としてブランド力のある地名が選択される傾向がある。歌詞には既存の作品の真似ではないオリジナリティが求められるため、歌い古された地名を用いるよりも新たに地名を開拓した方が新鮮であり、安全である。たとえば、タイトルに川の名前、路線名、半島、観光名所などの地名を含んだ演歌は毎年何曲も創作され、おそらくネタが尽きることはない。時代とともに街の風景が一変するため、歌詞に地名を含む歌に出てくる情景はやがて過去のものになる可能性もある。しかし、『箱根八里の半次郎』で2000年に演歌歌手としてデビューした氷川きよしは、現代では見かけない渡世人を主人公にした歌を何曲もリリースしており、時代の変化を超越している。私たちにとって、地名は地図上の単なる場所の名称ではない。その典型的な使い方が換喩であり、歌詞では「銀座」「六本木」等の歓楽街、「横浜」「神戸」等の港町に見ることができる。換喩は短縮形による言い換えに相当し、その地名から想起されるイメージについて言葉を尽くさずに伝えることができる。また、日本の地名でもたとえば、「ヒロシマ」「ナガサキ」「ヨコハマ」「フクシマ」「ニッポン」「ギンザ」等のように歌詞の中で意図的に漢字表記ではなく、カタカナ表記が用いられることがある。歌詞コーパス全体の中で「空港」や「駅」「停車場」等、場所を表す名詞を用いても地名を含まない曲の方が圧倒的に多いのは特定の地名に限定する必然性がないことを示している。

作詞家が特定の地名をアイテムとして歌詞中に用いる理由として、

- (1) 地名の場所が歌の舞台やテーマである
- (2) 聴き手に具体的な親近感や臨場感を与え、歌の世界に引き込む
- (3) 歌の二番、三番の歌詞で異なる地名を用いることで歌詞の展開を可能にする
- (4) メロディとの整合性や語感から適切な地名を選択する
- (5) 地名のブランド価値を活用する
- (6) 地理的な名称や呼称を離れ、拠って立つシンボルや象徴として利用する

(7) 地名が隠喩（メタファー）となり、歌の背景に関するストーリーを提供する

等が考えられる。多くの歌でこれらの理由が複数該当すると考えられる。(5)の一例であるご当地ソングは地域ブランドの一環として創られ、キャンペーンにより地元の一体感を促進するとともに歌手にとって地方のファンを獲得することにつながる。(6)は、「東京」、「日本」、「ニッポン」等に見られる。

(7)は(5)のブランドに近いが、具体的な地名を用いることで背後の意味や地名にまつわるエピソードを歌詞に書かずに聴き手に想起させることができる。『天城越え』（歌：石川さゆり（1986））は川端康成（1926）『伊豆の踊子』や松本清張（1959）『天城越え』に因んでいる。『風の盆恋歌』（歌：石川さゆり（1989））は、高橋治の同名の小説をモチーフになかにし礼が作詞した。「羽田」は羽田空港ができる以前から羽田という地名であるが、多くの人にとって「羽田」といえば、羽田空港が想起される。たとえば、『土曜の夜は羽田に来るの』（作詞：荒井由実、歌：ハイ・ファイ・セット（1976））には歌のタイトルと歌詞に「羽田」が現れる。

以上のように、地名は修辞学や記号論、ブランド論に至るまで幅広く研究の対象になり、奥が深い。一方、歌詞に具体的な地名を用いることにより聴き手にローカルな歌と受け取られる可能性もある。おそらく、作詞家は具体的な場所をテーマに歌詞をつくるか、あるいは頭の中には特定の場所や地名はあるが、具体的な場所に縛られずに歌詞をつくるか、最初から決めていると考えられる。したがって、地名を含む歌がヒットしなかったとしても、歌詞、メロディ、アーティスト、あるいはプロモーションのいずれに問題があったのかは判然としないだろう。本稿では、地名は歌詞の中で使うべくして使われたと考え、ファクトデータとしての歌詞を分析の対象としている。そこで、地名に関する統計分析を行うにあたり、次節で述べる作業仮説を検討する。

3 作業仮説

歌詞コーパスを対象に地名の出現状況を分析するにあたり、以下の仮説を設定する。

仮説 1. 歌詞に地名を含む歌謡曲は私たちが認知しているよりも多い

歌詞に「新宿」を含む歌で筆者が想起できたのは『新宿の女』『涙恋』『新宿港町』『新宿育ち』『新宿ブルース』の 5 件であり、「東京」を含む歌で想起できたのは 8 件であった。今回の歌詞データベースについて予備的な検索を実施した結果、「新宿」、「東京」の出現頻度はそれぞれ 145 件、1,221 件であった。そこで、人間の感覚と実際の件数の差はどこから来るのか。さらに、歌詞に地名を含む歌はどのくらいあるのかについて概算により見積もってみよう。

一般に物理的な刺激量 S と感覚量 R の間には Weber-Fechner の法則： $R = K \ln S$ の関係があることが知られている。ここで、 K は比例定数、 $\ln$ は自然対数である。「新宿」の例では、 $S = 145$ より $\ln S = 4.98$ であり、 $R = 5$ であるから $K \div 1.00$ となる。「東京」の場合、 $\ln 1221 = 7.11$ であることから上述の結果は、Weber-Fechner の法則にほぼ従うと考えられる。

地名の出現頻度の分布が Zipf の法則にしたがう場合、順位 $\times$ 頻度 = 一定の関係を満たすので、東京が第 1 位ならば、新宿はおよそ第 8 位になる。

歌詞の中の延べ地名数 N 、異なり地名数 V 、順位 1 の頻度 f とする。

V/f は、異なり地名数を最高頻度で除した結果であり、1 頻度当たりの平均異なり語数を表す。

Zipf の法則は、頻度と順位が反比例の関係にあることを示しているので、順位 1～頻度 1 の順位までの頻度を合計すると、

$$f + f/2 + f/3 + f/4 + \cdots + f/f = f(1 + 1/2 + 1/3 + 1/4 + \cdots + 1/f) \quad (2.1)$$

で近似できる。ただし、式 (2.1) では、各順位の頻度を 1 で数えているので V/f を乗じて補正する必要がある。式 (2.1) の調和級数 $\sum (1/k)$ の f

項までの部分和は式 (2.2) の積分により下限を求めることができる。

$$\sum_{k=1}^f \frac{1}{k} > \int_1^{f+1} \frac{1}{x} dx = \ln(f+1) \quad (2.2)$$

式 (2.2) を用い、歌詞の中の延べ地名数 N は、式 (2.3) により近似計算できる。

$$N \doteq f \cdot \ln(f+1) \cdot V/f = V \cdot \ln(f+1) \quad (2.3)$$

今回の歌詞データベースを対象に予備的な調査を実施した結果、異なり地名数： $V=2,020$ であった。その結果、延べ地名数： $N=2020 \cdot \ln(1221+1)=14,359$ となった。以上の考察より、歌詞に地名を含む歌は私たちが知覚している以上に大きいことがわかる。「歌ネット」を運営する株式会社ページワンのサイトによれば、歌詞数：約 301,000 曲、アーティスト数：約 30,400 (2021 年 6 月末時点) と記載されていることから比較的知名度の低いアーティストが圧倒的に多く、彼らの曲に地名が多く出現している可能性がある。

仮説 2. 外国の地名は日本の歌謡曲の歌詞に時代によらず一定の割合で出現する

出入国管理統計によれば、日本人の出国者数は 2015 年から増加傾向にあり、2019 年には 2 千万人の大台を超え、過去最高を記録した。テレビやインターネットにより海外の情報を入手できる現代にあって、実際に海外に渡航することに価値を見出している人が日本人の 6 人に 1 人存在していることになる。日本人の海外への憧れに一役買ってきたのが歌詞に外国の地名を含む歌謡曲である。外国の地名はブランドであり、その歌の流行により地名のブランド力が増す。多くの日本人にとって行ったことがない地名が歌の歌詞に登場することによりその土地がどのような場所かわかり、親近感がわく。作詞家がその異郷の地を訪れずに作詞したというエピソードが伝わっている曲もあるので、作詞にはその場所の詳細な情報よりは直

感や感性、インスピレーションの方が重要と考えられる。

仮説 3. 地方が個性をなくし日本が均質化するに伴い、地名の多様性は減少している

再開発や人口減少により都市は少しずつ表情を変えており、結果的に歌詞における地名の出現頻度もトレンドを反映し変化していくと考えられる。いわゆる「ファスト風土化」により町の個性がなくなり均質化が進む中で、地名の出現頻度にも何らかの影響が現れていると考えられる。

仮説 4. 歌詞に登場する地名にはその地名固有の共起語が存在する

地名は歌詞の舞台設定の大道具であるが、地名だけでは十分に状況が伝わらない場合、自然現象、時期、具体的な場所、人工物などの小道具を併用することで聴き手はより具体的なイメージをもつことができる。歌詞に高頻度で用いられる地名にはこうした小道具の単語が共起し、その地名を特徴づけている。

仮説 5. 地名が歌詞のフレーズの中のどの位置に出現するかは地名により異なる

1 フレーズは 10 音前後で 3 つ程度の内容語（名詞、動詞、形容詞など）により構成されるが、たとえば、「津軽」という地名は津軽海峡、津軽平野、津軽娘など後に名詞が来ることが多く、フレーズの末尾に来ることは少ないと思われる。一方、「日本海」はフレーズの最後に置かれることが多いと思われ、地名がフレーズのどの位置に出現するかは何らかの傾向があると考えられる。

なお、本稿ではフレーズの分析に用いた「歌ネット」の歌詞表記にしたがい、フレーズを歌詞の各 1 行を構成する全角スペースで区切られた各文字列と定義しているが、利用する歌詞コーパスによってはフレーズ間が全角スペースではなく、半角スペースで区切られている。英文を含む歌詞で

は英単語が半角スペースで分かち書きされているのでこうしたコーパスを利用する場合には、フレーズの認識に恣意性が入ることは避けられない。

仮説 6. 歌詞の中で地名が出現する位置は、その地名をタイトルに含むか否かで異なる

地名をタイトルに含む曲はその地名が歌のテーマの舞台である。地名がテーマの曲は地名が歌詞の A メロに出現するか、サビに出現することが多いと思われる。一方、歌詞のタイトルに含まれない地名は B メロをはじめ、随所に出現すると思われる。歌詞データから A メロ、B メロ、サビを認識することは困難であるが、地名が歌詞の文字列全体のどのあたりに出現したかは調べることができる。

仮説 7. 出現頻度が高い地名と低い地名では読みの音韻の分布に違いがある

近年の楽曲制作は「曲先」が主流であり、曲やメロディが先に創られ、それに合せて歌詞があてはめられる。地名は聴き手が歌を聴いた時に地名としてはっきり認識できる必要がある。たとえば、「東京」や「新宿」は明瞭に聴こえ、「目黒」はこもって聴こえる。「羽田」と「成田」ならば、「羽田」の方が明瞭に聴こえる。作詞家が歌詞の中で明瞭に発話しやすい地名を選択しているかどうかは不明であるが、歌詞中の地名の出現頻度の差には地名と歌のテーマとの相性以外に名称の音韻の影響もあるのではないかと考えられる。

歌詞に登場する地名については以上のような仮説が考えられる。従来、比較的小規模の歌詞データをもとに地名の出現頻度を中心とした研究はいくつか存在するが、大規模歌詞コーパスを利用し、地名の特徴を抽出する研究は見あたらない。そこで、次節では、これらの仮説を検証する方法について述べる。

4 研究方法

4.1 分析対象とする歌詞データ

歌詞は著作物であり、商品として発売された音楽作品は日本音楽著作権協会（JASRAC）により管理されているため、オープンデータとしてまとまった歌詞コーパスは存在しない。そこで、指定した曲の歌詞を検索表示できる歌詞検索サービスを活用し、歌詞コーパスを作成することが考えられる。

本稿は、日本語の歌詞に現れる地名を分析し特徴を明らかにすることを目的としているため、登録されている曲が歌謡曲、演歌、J-POP などの主要な歌のジャンルを網羅し、戦後から現在に至るまでリリースされた音楽作品の歌詞が数多く登録されている歌詞検索サービスが望ましい。ウェブ上には、歌詞検索サービスのサイトがいくつか存在するが、中には『歌謡曲』『演歌』『昭和の歌』のようにジャンルや年代が限定されている、または過去のある時点から新譜の登録が停止しているサイトもある。比較検討した結果、登録曲数の規模と現在に至るまでの網羅性から「うたまっぷ」と「歌ネット」の2つの歌詞検索サービスサイトを利用し、歌詞コーパスを作成するのが妥当と判断された。「うたまっぷ」や「歌ネット」などの歌詞検索サービスから歌詞を保存するには、歌詞は html ファイルに記載されているため、html ファイルを保存し、ID No.、曲名、アーティスト名、発売年月日、作詞家、作曲家、並びに歌詞のテキスト抽出を行う。歌詞は20～30行で書かれており、各行は2～3個のフレーズで構成されているが、表計算ソフトで管理しやすいように歌詞の全行を全角スペース区切りで連結し、他の属性データとともに各曲を1曲1レコードとして保存した。

本稿の研究がスタートしたのは2014年であり、「うたまっぷ」に、2014年8月20日の時点で登録されていた152,838曲の歌詞のテキストデータを基礎データとして収集した。年代別の分析を行うため、上記の152,838曲のうち、「CD ジャーナル」その他のデータを利用して発売年月日を特定できた89,649曲の歌詞を歌詞コーパス A とした。「うたまっぷ」に歌詞

が登録されている楽曲のうち、CDの生産が開始される以前に発売された楽曲に関しては、網羅的な発売年月日の特定は困難であった。

研究が長期化する中で、「歌ネット」からも歌詞検索を行い、2020年7月15日の時点で登録されていた309,971曲の歌詞のテキストデータを基礎データとして収集した。「歌ネット」には、ひとつの曲を別のアーティストがカバーした曲まで登録されており、曲名、作詞家、作曲家が同一であるからカバー曲の歌詞データは当然オリジナル曲と等しい。地名に関する集計を行う上でカバー曲を独立した曲としてカウントすることを避けるため、表計算ソフトの重複削除機能を用い、カバー曲を削除し、257,652曲の歌詞を歌詞コーパスBとした。

歌詞コーパスAと歌詞コーパスBは、情報源並びに収集時期が異なるので比較は行えない。本稿では分析の目的に応じてこれらの歌詞コーパスを使い分けることにした。

「うたまっぷ」と「歌ネット」はどちらも随時、新譜データが登録され、データベースに登録された総曲数は日々増加している。そこで、表1に示す10名のアーティスト名の完全一致により検索を行い、各歌詞検索サービスの検索曲数を比較することにした。

表1 アーティスト別、歌詞検索サービス別の検索曲数
(検索年月日：2021年9月1日)

アーティスト名	うたまっぷ	歌ネット
五木ひろし	141	428
氷川きよし	417	539
松田聖子	334	536
AKB48	245	618
嵐	346	415
SMAP	354	361
スピッツ	246	248
aiko	245	251
今井美樹	225	245
竹内まりや	158	191

表1の結果から10名のアーティスト全員について「歌ネット」の方が検索曲数が多いことがわかる。五木ひろしの「うたまっぷ」の検索曲数が極端に少ない理由として、データを遡って登録していないことが考えられる。さらに、「うたまっぷ」で“AKB48”を前方一致により検索すると725件ヒットすることから歌詞検索サービスサイトによりアーティスト名の表記のゆれが存在することがわかる。

4.2 集計方法

まず、歌詞コーパス A の 89,649 曲の歌詞の全テキストデータに対して形態素解析を行った。形態素解析は日本語のテキストデータを単語（形態素）に分割する処理である。形態素解析には、奈良先端科学技術大学院大学で開発された「ChaSen（茶筌）」を使用した。次に、形態素解析の結果から品詞が「名詞—固有名詞—地域」となる語彙を全て抽出した。これらの語彙が分析対象の 89,649 曲の歌詞に含まれる地名である。これらと、各楽曲の発売年月日のデータから、歌詞に現れる上位の地名、歌詞に地名を含む曲の全楽曲に占める比率、歌詞に現れる国内の地名と海外の地名の比率を、年代別に集計した。

歌詞コーパス B の 257,652 曲の歌詞の全テキストデータに対しては、データ件数が歌詞コーパス A よりも大きいため、「ChaSen（茶筌）」よりも高速で形態素解析が行える「MeCab（和布蕪）」を使用した。歌詞コーパス A と同様に、歌詞コーパス B から形態素解析の結果から品詞が「名詞、固有名詞、地域」となる語彙を全て抽出した。

5 結果

5.1 歌詞に地名を含む楽曲の割合

歌詞コーパス A を用い、年代別に全曲数と地名を含む曲数を集計した。歌詞に地名を含む楽曲の割合は、表2の通りであり、全期間を通じて4%強でほぼ一定している。

1984年以前は「うたまっぷ」に登録された曲数が少ないため、集計対象から除外している。また、2014年途中時点での集計のため、2010～2014年の曲数は2005～2009年を下回っている。2000年代以降、曲数が大幅に増加している理由として、「うたまっぷ」を管理運営する有限会社インターライズのウェブページの著作権マークに2001年と明記されていることから、事業開始時点から網羅的に新譜の登録を始めたと推察される。

表2 歌詞に地名を含む楽曲の割合（歌詞コーパス A）

期 間	全曲数	地名を含む曲数	割 合
1985年～1989年	2,156	91	4.22%
1990年～1994年	6,531	281	4.30%
1995年～1999年	9,738	388	3.98%
2000年～2004年	18,279	842	4.61%
2005年～2009年	26,353	1,192	4.52%
2010年～2014年	26,090	1,163	4.46%
計	89,147	3,957	4.44%

歌詞コーパス B についても同様の集計を行った結果を表3に示す。

表3 歌詞に地名を含む楽曲の割合（歌詞コーパス B）

期 間	全曲数	地名を含む曲数	割 合
1964年～1984年	242	14	5.79%
1985年～1989年	2,142	106	4.95%
1990年～1994年	11,095	660	5.95%
1995年～1999年	18,979	1,261	6.64%
2000年～2004年	29,367	2,003	6.82%
2005年～2009年	50,055	3,368	6.73%
2010年～2014年	64,294	4,093	6.37%
2015～2019年	74,758	4,872	6.52%
2020年(1/1～7/15)	6,720	449	6.68%
計	257,652	16,826	6.53%

歌詞コーパス B では、地名を含む楽曲の割合が6%台で推移しており、歌詞コーパス A よりも約2%程度上回っている。「歌ネット」の運営会社

ページワンは「うたまっぷ」と同様、2001 年から歌詞検索サービスを開始している。「歌ネット」には中学校・高等学校の校歌 582 曲や都道府県、市、区などの市町村歌も登録されており、これらには地名を含むものが多いことも影響していると考えられる。より根本的な問題として、楽曲の発売年月日が CD の発売年月日であることが挙げられる。アーティストは昔の持ち歌を CD アルバムに収録し、販売する例も少なくなく、楽曲の正確なりリリース年月日ではないケースが見られる。さらに、2つの形態素解析システムのアルゴリズムや辞書の違いの可能性も考えられる。しかし、どちらのコーパスにおいても時期によらず、ほぼ一定の割合で歌詞に地名を含む歌が存在することが明らかになった。

作業仮説 1 において、Zipf の法則にしたがうと仮定すると、第 1 位である「東京」を含む曲数と歌詞コーパス中の異なり地名数から延べ地名数を 14,359 件と見積もったが、歌詞コーパス B では 257,652 曲のうち、地名を含む曲は 16,826 曲であった。ひとつの楽曲の歌詞の中に複数の地名をもつ場合があるので延べ地名数と地名を含む曲数は単純に比較できないが、日本語の歌詞について言えば、地名の頻度と順位の関係はおおよそ Zipf の法則に従うと考えられる。

作業仮説 2 において、海外の地名を含む楽曲が一定の割合で存在する、という仮説を立てた。歌詞コーパス A について、表 1 の 6 つの期間における海外の地名の割合を集計した結果を表 4 と図 2 に示す。

地名を含む曲の中で海外の地名を含む曲の割合は、30%前後で推移している。したがって、作業仮説 2 に関しては、地名を含む楽曲のほぼ 3 曲に 1 曲は海外の地名を含んでいることがわかる。

次に歌詞コーパス B を用い、地名を含む歌を 50 曲以上発表している作詞家 29 人について歌詞に地名を用いる割合を集計した結果を表 5 に示す。

表 5 よりシンガーソングライターも何人か含まれているが、地名を含む歌を作詞する割合が高いのは演歌の作詞者であることがわかる。割合が 30%以上の作詞家はご当地ソングの作詞など歌詞に地名を積極的に用いて

表 4 期間別の地名を含む曲に対する海外の地名を含む曲の割合（歌詞コーパス A）

期 間	海外の地名の割合
1985 年～1989 年	32.8%
1990 年～1994 年	30.7%
1995 年～1999 年	29.0%
2000 年～2004 年	24.3%
2005 年～2009 年	27.9%
2010 年～2014 年	30.8%

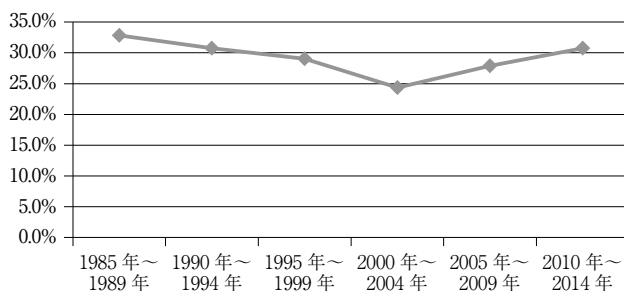


図 2 海外の地名を含む曲の割合の推移（歌詞コーパス A）

いることがうかがえる。著名な作詞家が少なくとも 20 曲に 1 曲程度は地名を含む歌を作詞していることや地名を多用する作詞家の 9 割以上は男性作詞家であることがわかる。既に物故者も少なからずおり、作詞活動は長年の経験や実績がものを言う世界であるといえよう。

5.2 歌詞に頻出する上位の地名

歌詞コーパス A の歌詞に含まれる地名を頻度の大きい順に集計した結果を表 6 に示す。

表 6 の地名を日本国内と外国地域に分け、地名の順位の推移を図 3、図 4 に示す。横軸は各期間の階級値、縦軸は順位を表す。

表 6 並びに図 3、図 4 から以下の各点が明らかとなった。

(1) 6 期間のすべてについて上位 30 位内に出現した地名は、「東京」「日本」「渋谷」「大阪」「湘南」「横浜」「アメリカ」「ハワイ」「フランス」の

表 5 作詞家が地名を用いる歌の割合（歌詞コーパス B）

作詞家	地名なしの曲数	地名を含む曲数	総計	割合
仁井谷俊也	368	182	550	33.1%
星野哲郎	274	160	434	36.9%
秋元康	2,454	152	2,606	5.8%
木下龍太郎	171	115	286	40.2%
水木れいじ	242	114	356	32.0%
つんく	1,127	103	1,230	8.4%
池田充男	164	98	262	37.4%
たかたかし	386	95	481	19.8%
松井由利夫	162	94	256	36.7%
麻こよみ	456	94	550	17.1%
吉幾三	146	87	233	37.3%
吉岡治	212	85	297	28.6%
喜多條忠	189	83	272	30.5%
横山剣	162	79	241	32.8%
荒木とよひさ	677	79	756	10.4%
たきのえいじ	260	74	334	22.2%
松本隆	772	74	846	8.7%
さだまさし	436	69	505	13.7%
下地亜記子	134	65	199	32.7%
佐伯孝夫	128	64	192	33.3%
石本美由起	154	62	216	28.7%
もず唱平	68	55	123	44.7%
志賀大介	117	55	172	32.0%
前山田健一	207	53	260	20.4%
阿久悠	933	51	984	5.2%
桑田佳祐	285	51	336	15.2%
山本正之	87	51	138	37.0%
あべりょう	75	50	125	40.0%
宮藤官九郎	78	50	128	39.1%

表6 歌詞に頻出する上位の地名（歌詞コーパス A）

1985 年～1989 年 全 2,156 曲		1990 年～1994 年 全 6,531 曲		1995 年～1999 年 全 9,738 曲	
東京	15	東京	63	東京	83
日本	6	日本	27	日本	50
横浜	5	アメリカ	17	渋谷	26
ギリシャ	4	大阪	10	ハワイ	14
アメリカ	4	横浜	10	アメリカ	12
大阪	4	沖縄	9	アジア	11
渋谷	3	ロンドン	6	新宿	11
ハワイ	3	公園通り	6	フランス	9
富士	3	フランス	6	大阪	8
鎌倉	3	ニッポン	6	ベルリン	8
フランス	3	ハワイ	6	湘南	8
江の島	3	湘南	6	横浜	7
銀座	3	ニューヨーク	6	上海	7
ニューヨーク	3	ヨコハマ	5	ニューヨーク	6
湘南	2	チャイナ	5	鎌倉	6
津軽	2	渋谷	5	神戸	6
北京	2	御堂筋	4	成田	5
六本木	2	ペルシャ	4	横須賀	5
リバプール	2	神戸	4	津軽	5
ロシア	2	ジャマイカ	4	太平洋	5
浅草	2	地中海	4	江戸	5
カリブ	2	アラビア	4	銀座	5
北新地	2	ロシア	4	ロンドン	5
博多	2	上海	4	道頓堀	5
ボストン	2	北新地	4	御堂筋	5
カイロ	2	心斎橋	3	日本海	4
イスタンブール	2	銀座	3	アラビア	4
アンダルシア	2	目黒	3	歌舞伎町	4
すすきの	2	セーヌ	3	北京	4
京都	2	祇園	3	長崎	4

表6 歌詞に頻出する上位の地名（続）（歌詞コーパス A）

2000 年～2004 年 全 18,279 曲		2005 年～2009 年 全 26,353 曲		2010 年～2014 年 全 26,090 曲	
東京	188	東京	244	東京	175
日本	148	日本	179	日本	152
渋谷	44	渋谷	54	渋谷	50
横浜	29	アメリカ	35	アメリカ	32
アメリカ	28	大阪	31	大阪	29
大阪	24	湘南	28	新宿	21
新宿	21	沖縄	25	フランス	20
沖縄	18	横浜	22	アジア	19
原宿	17	新宿	22	ニッポン	18
ロンドン	17	江戸	21	沖縄	18
ニッポン	14	アジア	19	湘南	15
江戸	14	ニッポン	17	ダラス	13
アジア	14	九州	17	ハワイ	13
フランス	14	京都	16	博多	12
横須賀	12	六本木	15	富士	12
京都	12	名古屋	14	ブラジル	12
ニューヨーク	12	北海道	14	江戸	12
富士	12	フランス	14	アフリカ	11
湘南	12	ジャパン	13	道頓堀	11
北海道	11	ハワイ	13	ハリウッド	11
ジャパン	11	ニューヨーク	13	ロンドン	11
銀座	10	ロンドン	13	ローマ	10
ジャマイカ	10	イタリア	12	関西	10
神奈川	9	ナポリ	12	イタリア	10
ハワイ	9	銀座	12	リオ	10
六本木	8	ハリウッド	11	ジャパン	10
佐賀	8	太平洋	11	九州	10
ブラジル	8	原宿	11	ジャマイカ	10
琉球	8	ジャマイカ	11	横浜	10
青山	8	カリブ	10	原宿	10

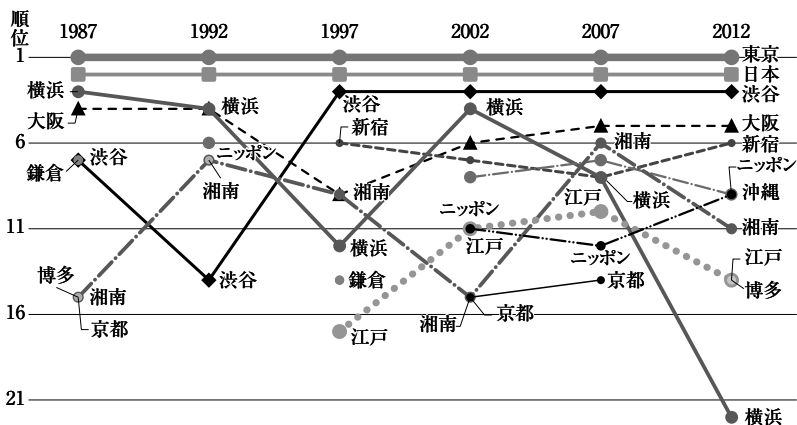


図3 日本の地名を含む曲数の6期の順位の推移

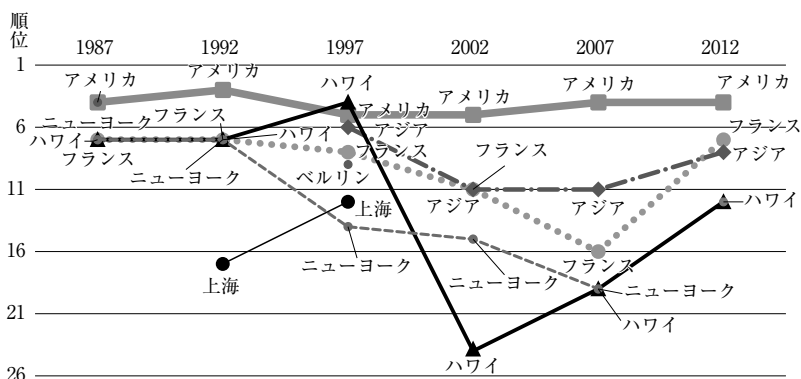


図4 外国の地名を含む曲数の6期の順位の推移

9つであり、コーパス A の中で頻度 2 以上の地名 76 個の約 12%を占めている。

(2) 6 期間の中で出現回数が 1 回の地名が 34 (約 45%)、同 2 回の地名が 19 (約 25%) であり、2 回以下の地名が 70%を占めている。たとえば、「ギリシャ」(1985 年～1989 年, 4 曲)、「公園通り」(1990 年～1994 年, 6 曲)、「ベルリン」(1995 年～1999 年, 8 曲)、などがある。ある地名が何らかの理由により一時的な流行やブームとなり、その地名を歌詞に含む楽曲が創ら

れるが、社会においてその地名が話題に上らなくなるにつれ、歌も創られなくなることがわかる。

(3) 各期とも第1位は「東京」であり、3位の地名を3倍以上引き離して出現している。「東京」や「日本」は、日本人にとって地理的な場所の名称ではなく、聴き手の注目を集め、一体感を共有するためのシンボルであり、流行やブームによらず、歌詞の重要なアイテムになっていることがわかる。

(4) 各期とも第2位は「日本」であり、「ニッポン」「ジャパン」を含めると2010～2014年には第1位の「東京」を上回る出現頻度を示している。これは、2013年に東京オリンピック2020の開催が決定したことを受けたバンドワゴン効果と考えられる。

(5) 海外の地名の中では「アメリカ」が最も多く、各期とも3～5位の出現頻度で推移している。「アメリカ」が若者文化の発祥地として時代を超えて歌の重要なアイテムになっていることがうかがえる。2018年に話題となった『U.S.A.』（歌：DA PUMP）の歌詞にも「アメリカ」が現れるが、これは1992年にイタリア人歌手が発表した曲のカバー曲である。日本では1997年と2007年にもCDが発売されているのでDA PUMPによる掘起こしは三度目の正直に相当する。振付やダンスのユニークさなど視覚的な面だけでなく、かつてのアメリカを彷彿とさせる日本語の歌詞が今回の売上に貢献したと考えられる。

(6) 各期の歌謡曲に出現した地名の上位30の中で海外の地名（国名や地域名も含む）はほぼ10件前後で推移している。「フランス」や「ハワイ」は時代を超えて歌詞に高頻度で登場しており、ブランドになっていることがうかがえる。「アジア」は1995年代以降、上位にランクインするようになったが、1996年の『アジアの純真』（歌：PUFFY）や1997年のアジア通貨危機により「アジア」がブレイクしたと考えられる。一方、「ニューヨーク」は1990年代以降、順位を下げている。

(7) 「江戸」は第3期（1995～1999）以降、各期に21～10位の頻度で推

移している。「江戸」は現代でも江戸川、江戸橋、小江戸（埼玉県川越市）など地名や呼称として使われている。1999年に地下鉄都営12号線の愛称が「大江戸線」となり、2000年に正式名称になったことが追い風になっていると考えられる。「花のお江戸」「江戸っ子」「火事と喧嘩は江戸の華」などは歌詞のフレーズにも数多く登場している。粋や情緒といったノスタルジーも「江戸」が今なお用いられる所以といえよう。

(8)「渋谷」は第1期（1985年～1989年）が7位、第2期（1990年～1994年）に第16位であるが、第8位に「公園通り」がランクインし、第3期以降、第3位を維持している。1990年台後半の「渋谷系」の流行が要因として考えられるが、それ以前から渋谷は再開発が続き東京で絶えず変貌途上にある街であり、1960年代から音楽を職業にする人たちの仕事や生活の場であったことが楽曲のモチーフになってきたと考えられる。

5.3 地名の多様性の検証

作業仮説3では、歌詞に登場する地名の多様性が減少している、との仮説を立てた。本節では出現頻度が1～30位までの地名の分布の多様性の尺度として、Shannon-Weaver Index、Simpson Index、並びに、タイプ・トークン比 (V/N) の3つの指標を用い、6つの期間の推移を調べる。最初の2つの指標は一極集中の場合に0となり、離散一様分布の場合、最大値をとる。3つ目のタイプ・トークン比とは、抽象的な概念＝タイプ＝延べ語数 N に対する具体的な対象＝トークン＝異なり語数 V の比であり、 N 個のすべてが異なっていれば、 $V = N$ より1、 N 個のすべてが同一ならば、 $1/N$ をとる。異なり地名数で評価すると、ロングテール部分の大多数を占める1件の地名の数が多様性に大きく関わることになる。本稿では、地名の種類の多さではなく頻度が上位の地名のバリエーションを評価するため、各期間の異なり地名数ではなく、地名の頻度の累積割合が3%を超える地名数を異なり地名数 V とした。したがって、 V/N は一般的な意味でのタイプ・トークン比ではないが、同じ手順で計算された値どうしの比

較は可能である。

本稿で用いた各指標の計算式を以下に示す。

$$\text{Shannon - Weaver Index} = - \sum_{i=1}^{30} p_i \ln p_i$$

p_i : i 番目の地名の曲数 / 30 個の地名の全曲数

$$\text{Simpson Index} = 1 - \sum_{i=1}^{30} p_i^2$$

タイプ・トークン比 (V/N) = 上位 3% までの異なり地名数 V / 地名を含む延べ曲数 N

多様性指数の範囲は、 $0 \leq \text{Shannon-Weaver Index} \leq \ln 30 \div 3.401$ 、 $0 \leq \text{Simpson Index} \leq 1 - 1/30 = 0.967$ となる。各期間別多様性指数の推移を図 5 に示す。

各期間のタイプ・トークン比の推移を図 6 に示す。

図 5 より多様性尺度は、1985～1989 年の期間をピークに減少傾向にあったが、2010～2014 年にはわずかながら上昇に転じている。図 6 のタイプ・トークン比も同様の傾向を示している。2010～2014 年は 2005～2009 年と比較し、日本の地名の出現頻度が減少した一方、海外の地名の頻度が増加

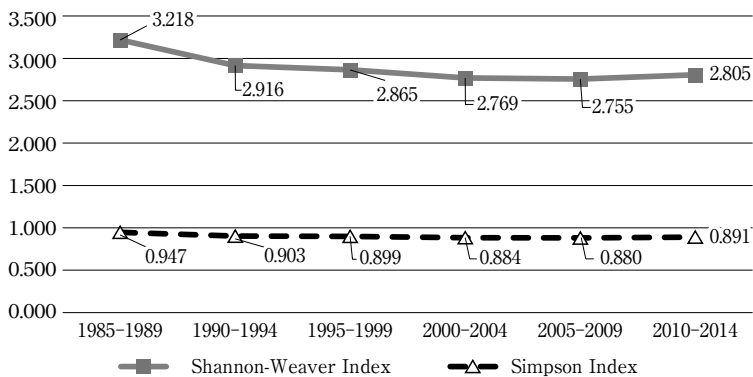


図 5 各期間の歌謡曲の歌詞に出現した上位 30 位までの地名の多様度指数の推移

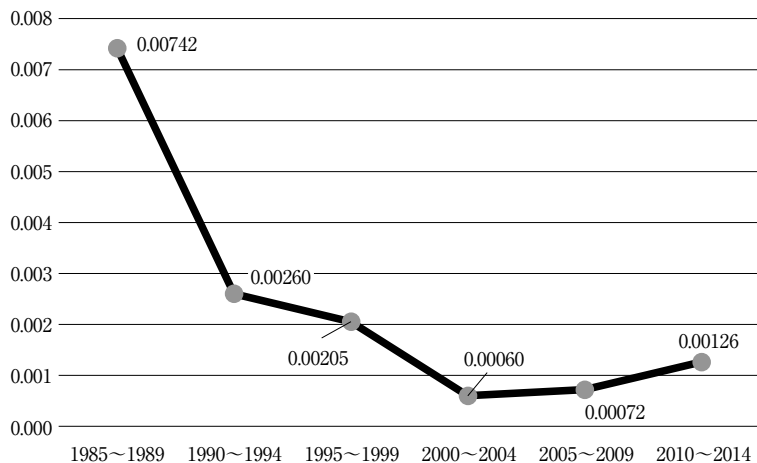


図6 上位3%の異なり地名のタイプ・トークン比の推移

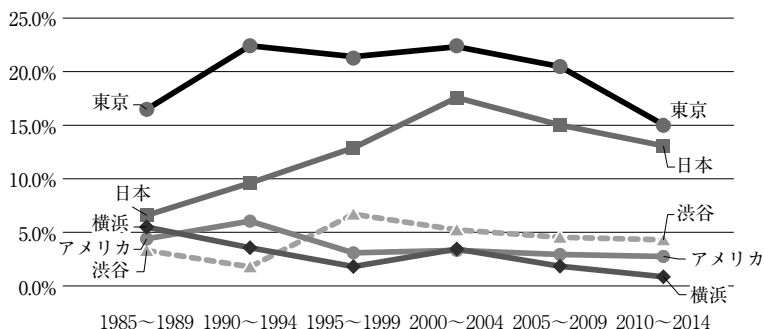


図7 出現頻度が高い地名の構成比率の推移

した結果、多様性が増加したと考えられる。図7に、6つの期間において地名を含む曲線に対する頻度が高い地名の構成比率の推移を示す。

図7より、上位1～3位を占める「東京」「日本」「渋谷」の構成比率が2000年以降、減少していることがわかる。1990年代以降、日本は「失われた20年」の中で製造業は国内生産から海外に生産拠点を移し、全国的に産業の空洞化や工場の売却が進んだ。郊外の製造業の跡地にショッピングモールをはじめとする商業施設や大型店舗ができ、地方の個性がなくな

り、日本中で均質化が進んだ。こうした社会の変化が歌の歌詞に現れているかどうかは確認できなかったが、1985～1989年のバブル期をピークに地名の多様性は減少していることが確認された。

5.4 地名の共起語の分析

作業仮説4では、歌詞中で用いられる地名にはその地名固有の共起語が存在する、という仮説を立てた。たとえば、「津軽」や「日本海」ならば「雪」は欠かせないだろうし、昼間の「新宿」では歌にならない。そこで、高頻度の地名について、自然現象、時期、場所、人工物に関する共起語を集計した。自然現象は、風、雨、雪、空など天候に関するものから月、星、太陽などの天体に関するものまで存在し、表現も多様である。たとえば、「雨」には「時雨」、「こぬか雨」など「雨」のつく単語だけでなく、「どしゃぶり」、「さみだれ」なども歌に出てくるため、これらを「雨」として集計する必要がある。そこで、『日本語語彙大系』を用い、風、雨、雪などの語彙の下位概念が歌詞コーパスBの歌詞に含まれるかどうかを集計した。表7に、自然現象、時期、場所、人工物に属する単語と地名との共起率が10%以上、すなわち、その地名を含む10曲に1曲はその共起語を伴うものについて集計した結果を示す。

共起率が30%以上の組合せの枠内を塗りつぶした結果、以下の各点が明らかになった。

(1) 自然現象の中では、「長崎：雨」「湘南：風・波」「日本海：風・雪」「津軽：風・雪」が該当した。これらの地名は3割以上、こうした自然現象を伴って用いられる。「原宿」や「鎌倉」が「風」と共起する割合が高いのは意外であった。「風」といっても「風薫る季節」のような表現もありうる。

(2) 時期に関する共起語では、「夜」「今」「春」「夏」「冬」の共起率が高い。「夜」は「夜の街」すなわち、歓楽街が舞台の歌が多いことがわかる。「今」は多くの地名と共起しており、主人公が対峙しているまさに「今」

表7 歌詞に出現する地名の共起語の割合（共起率 10%以上を表示）（歌詞コーパス B）

共起語	歌詞に高頻度で出現する日本国内の地名														
	東京	渋谷	新宿	銀座	六本木	原宿	赤坂	湘南	鎌倉	富士	日本海	津軽	北海道	札幌	日本
(1) 自然現象に関する共起語															
風	19%	17%	22%	23%	20%	34%	12%	46%	30%	30%	40%	41%	14%	20%	21%
雨	13%	11%	17%	16%				12%	17%	10%	14%			21%	
雪										16%	30%	53%		23%	
空	25%	17%	17%	16%	13%	20%		17%	20%	37%	15%	24%	14%	23%	18%
月			10%	14%				12%	11%	16%					
星	10%							14%		12%					
太陽								17%		11%					
水															
波								31%	11%	12%	26%	12%			
(2) 時期に関する共起語															
朝		11%	10%			16%		11%					12%		
夜	25%	25%	37%	39%	38%	18%	40%	32%	26%	19%	11%	28%	14%	25%	13%
今	31%	33%	23%	15%	31%	25%	30%	43%	43%	29%	16%	14%	24%	16%	37%
今夜		11%	12%		14%		14%	12%				12%	10%		
今日	21%	23%	24%	18%	20%	20%	20%	22%	20%	26%		12%	16%	13%	24%
明日	18%	15%	14%	13%		13%		17%	15%	17%	15%	17%	20%		22%
昔				12%	11%					13%	10%				
未来	10%						10%	15%		12%					16%
春				11%						16%	19%	41%			
夏								43%	26%						
冬											12%	30%		13%	
(3) 場所に関する共起語															
街	34%	28%	33%	26%	31%	41%	24%	20%	17%	20%		11%	22%	31%	14%
町										14%	14%			16%	
道	11%	11%				13%		13%	13%	16%			12%	15%	13%
駅			14%									11%			
橋														11%	
川															
砂								15%	11%						
海		10%						43%	30%	17%	37%	34%	12%		16%
(4) 人工物に関する共起語															
酒			17%	13%			24%			10%	15%	25%	10%	11%	
花	13%		15%	23%					17%	31%	17%	34%	14%	23%	13%
ネオン			12%	18%	11%										

を描いている歌詞が多いことがわかる。季節では「秋」と地名の組合せが10%に満たなかったので表示されていない。秋には紅葉など風情はあるが、「冬」や「春」の方が歌になりやすいと考えられる。

(3) 場所に関する共起語では、「街」、「駅」、「海」の共起率が高い。「駅」では「上野」が30%を超え、「新宿」が14%の共起率であった。どちらもターミナル駅に因んだ物語型の歌詞がいくつかあると考えられる。

(4) 人工物に関する共起語では、「花」以外で30%以上になった地名はなかった。「花のお江戸」や「江戸の花」のフレーズを含む歌詞は複数存在することから「江戸：花」は想定したとおりである。「花」ではなく、「華」を用いている歌詞もあるが、今回は集計していない。「酒」では「赤坂」が25%の共起率で最も高く、「ネオン」では「道頓堀」「銀座」の順であった。

(5) この他、身体に関する共起語で共起率が30%以上となったのは「津軽・胸」、人称に関する共起語では「あなた」が多くの地名で共起率が30%以上となり、「渋谷：君」、「湘南：俺」、「上野：俺」が30%以上となった。男女に関する共起語で共起率が30%以上の組合せは「浪花：男」、「六本木・浪花・博多・京都、日本海：女」、「恋」（多数の地名と共起）、感情に関する共起語では「夢」「心」が多数と地名と共起している。「涙」は「浪花」と「日本海」で共起率が高いことがわかった。

地名との共起語の分析の結果、地名から想起される定番ともいえる共起語は確かに明らかになったが、共起率はせいぜい40%台であり、高い共起率を予想していた地名との組合せが意外に低い事例や逆のケースもあった。つまり、同じ地名でも個々の作詞家はそれぞれ個性的なとらえ方をし、言葉や表現の推敲を重ね、多様な歌詞を生みだしていると考えられる。

5.5 フレーズ内の地名の位置に関する分析

仮説5の、地名が歌詞のフレーズの先頭に来るのか末尾に来るのかは地

名によって差がある、を検証する。地名を含むフレーズに何らかのパターンがあるのかを探ることが目的である。本節では、作業仮説の節で述べたように歌詞の1行1行を構成し、全角スペースで区切られ、10音前後で3つ程度の内容語からなる文字列をフレーズととらえることにする。

「新宿」を含む歌詞のフレーズの例を以下に示す。

- (1) 新宿はみなと町 (『新宿・みなと町』(歌：森進一))
- (2) 夜の新宿 (『なみだ恋』(歌：八代亜紀))
- (3) 俺とおまえも新宿育ち (『新宿そだち』(歌：大木英夫&津山洋子))

これらの例に示すように、フレーズの長さや音数は異なるが、フレーズ内の「新宿」の位置はそれぞれ先頭、末尾、中ほど、と認識できる。そこで、歌詞コーパスBを用い MeCab により形態素解析を行い地名を抽出した後、地名を含むフレーズを再構成し、各フレーズの文字列の先頭位置、中ほどの位置、末尾の位置のどこに地名が用いられているかを識別し、地名単位に集計を行った。なお、「東京、東京、大東京」(『大東京音頭』歌：橋幸夫)のようにサビの部分で1フレーズに同じ地名が複数回繰り返される場合がある。本節では、地名がフレーズの先頭から複数回繰り返される場合は先頭位置としてカウントすることにした。ひとつの曲の中にサビの繰り返しなどで地名を含むフレーズが複数回出現する場合があるので曲名とフレーズの重複削除を行った。図8に、出現頻度が1位から30位までの地名について、フレーズ内の位置別の割合を集計した結果を示す。地名を含むフレーズをカウントしているので1地名1曲でカウントした表6の30位までの地名にないものも含まれている。

「津軽」「日本海」「オホーツク」「アメリカ」「祇園」「山手」はフレーズがこれらの単語から始まる、すなわち、後に別の単語につながる可能性が高い地名である。「日本海」と「オホーツク」は20%以上がフレーズの末尾にも使われている。末尾の位置の割合が最も高いのは「ニューヨーク」で、「～ニューヨーク」というフレーズで使われることが多いことを示している。中ほどの位置の割合が最も高いのは「江戸」であり、「花のお江

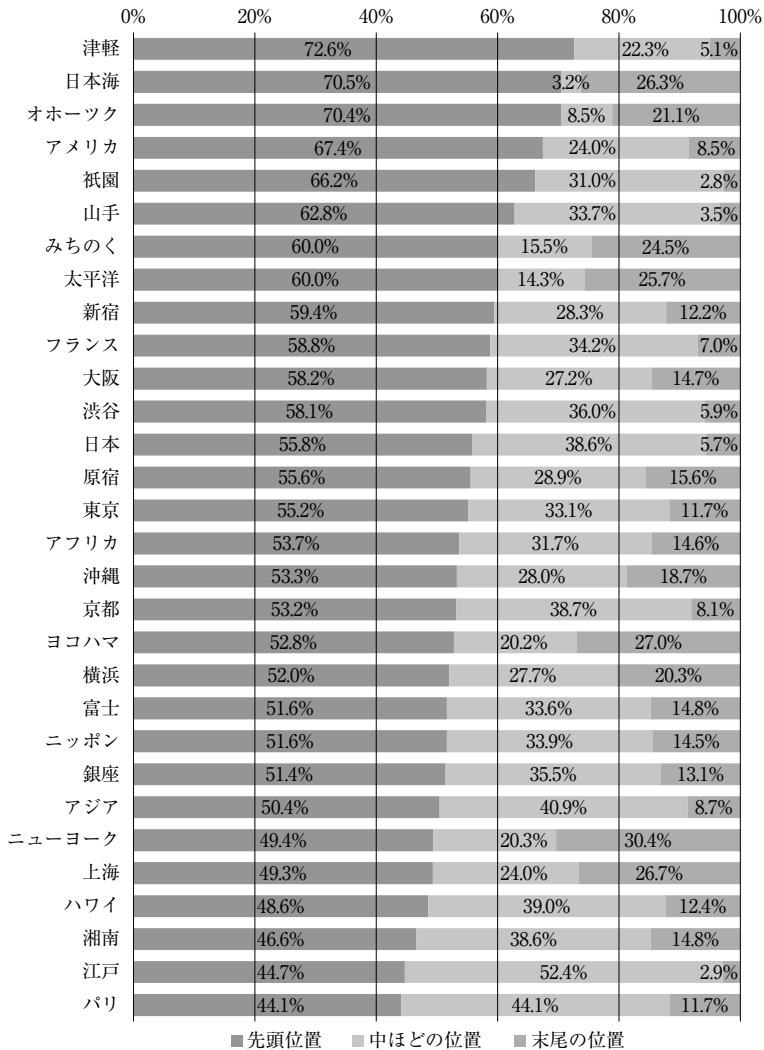


図8 フレーズ内の地名の位置別フレーズ数の割合 (歌詞コーパス B)

戸の～」「火事と喧嘩は江戸の花」等のフレーズが多用されていることからわかる。「ヨコハマ」と「横浜」ではカタカナ表記の方が末尾に置かれる割合が6.3ポイント高く、「日本」と「ニッポン」でもカタカナ表記

の方が末尾に置かれる割合が高い。多くの場合、日本の地名のカタカナ表記は外国を意識した地名の記号化、シンボル化であり、漢字表記は本来の地名の場所を特定する書き方である。たとえば、「日本のどこかに私を待ってる人がいる」（『いい日旅立ち』）、「日本の未来は Wow × 4」（『LOVE マシン』）にあるように、歌詞の中の「日本」を「ニホン」と発音する場合と「ニッポン」と発音する場合がある。同様の例は、歌詞の中で「時間」と書いて「とき」、「宇宙」と書いて「そら」と発音させるなどにも見られ、作詞家は歌詞の表記と読みの音にもこだわりを見せていることがうかがえる。

5.6 歌詞の中の地名の位置と歌詞のタイトルとの関係の分析

仮説 6 は、地名が歌詞に登場する位置はその地名をタイトルに含むか否かに関係する、である。地名をタイトルに含む歌はその地名が歌のテーマであるから地名がサビや大サビに出現すると考えられる。本稿では各楽曲の歌詞をすべて分析の対象とし、1 番の歌詞だけを抽出していないため歌詞の構造である A メロ、B メロ、サビの部分特定することは行わない。3 番まである歌詞にはサビが 3 回出現するが、歌詞の後半から末尾にタイトルにある地名が登場する確率は高いと考えられる。

そこで本稿では、歌詞の文字列の中で地名が先頭から何文字目に現れたかを調べ、歌詞の文字長で除することによりパーセントを地名の位置データとした。歌詞の冒頭に地名が出現すれば、0%、歌詞の末尾に出現すれば 100% となる。サビに地名が含まれている場合など、ひとつの歌詞の中に同じ地名が複数回出現するので歌詞の文字列において各曲について地名の初出位置と最終出現位置の 2 つを抽出し、地名単位に集計した。したがって、ある地名が歌詞に 1 回だけ出現した場合、初出位置と最終出現位置は等しくなる。

図 9 に、地名をタイトルに含む曲の場合、地名単位に平均初出位置を横軸に、最終出現位置を縦軸にとった散布図を示す。図 10 は、地名をタイ

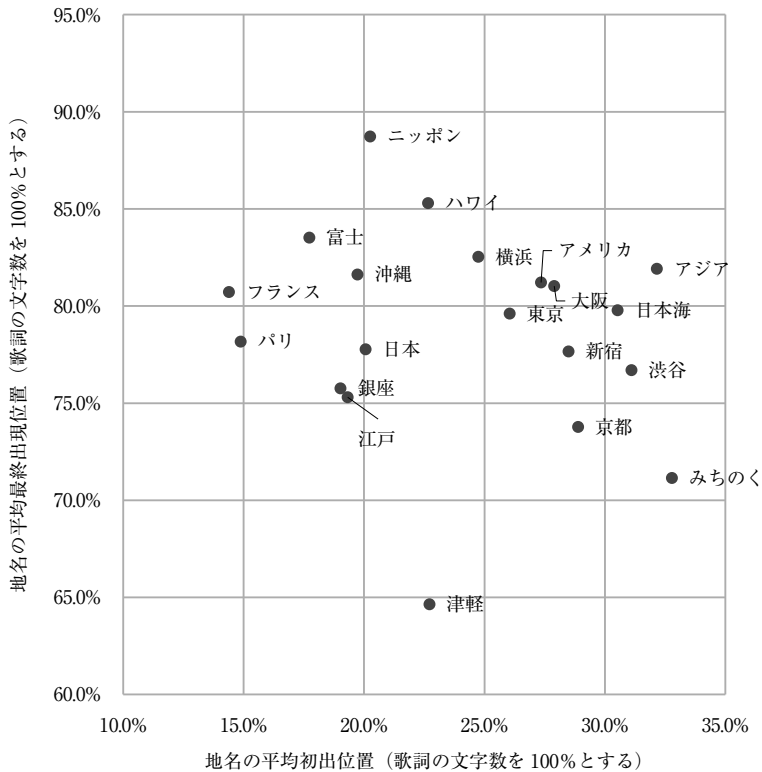


図9 地名が歌詞中に初出する位置と最終出現位置の関係【タイトルに当該地名を含む場合】

トルに含まない曲の場合である。

図9では初出位置が15～33%に分布し、最終出現位置が65～90%に分布しているのに対し、図10では初出位置が30～45%に分布し、最終出現位置が40～60%に分布している。このことから、地名をタイトルに含む曲の場合、地名の初出位置がおおむね25%以降は1番の歌詞のサビ部分または2番の歌詞に地名が出現し、最終出現位置が3番のサビまたは大サビである80%付近であると考えられる。地名がタイトルに含まれない場合、歌詞全文の中盤あたりに初出も最終も集中している。

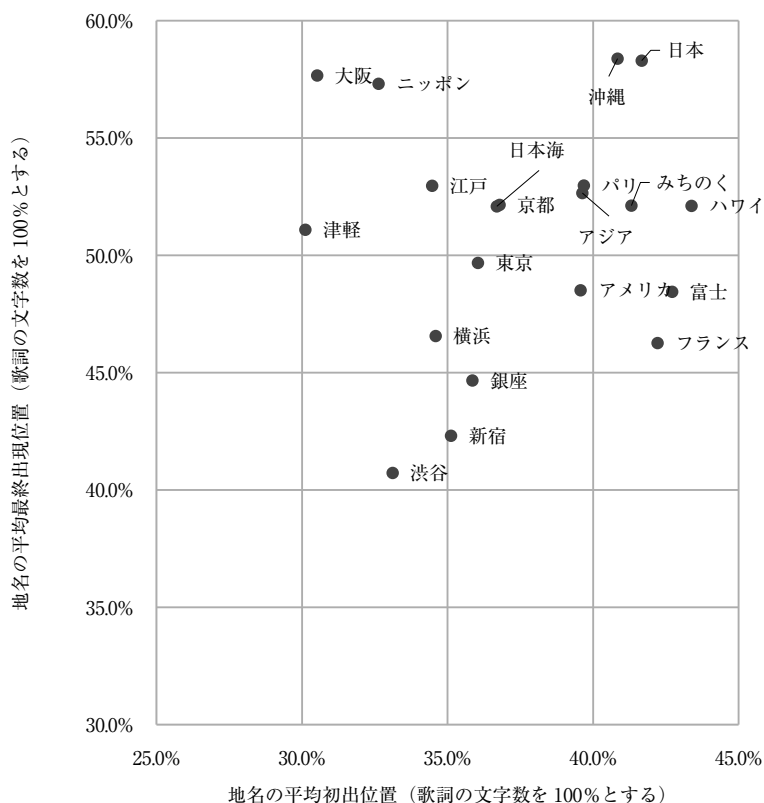


図 10 地名が歌詞中に初出する位置と最終出現位置の関係【タイトルに当該地名を含まない場合】

ある地名をタイトルに含むか否かで平均初出位置と平均最終出現位置の座標点はどう変化するかを調べた。表 8 は、各地名について図 9 の座標点と図 10 の座標点のユークリッド距離を計算し、大きい順に並べた結果である。表 7 より、地名がタイトルに含まれるか否かで歌詞中の出現位置が最も大きく変化した地名は「フランス」であり、以下、「富士」、「ハワイ」と続く。一方、タイトルに含む、含まれないで歌詞中の出現位置の変位が最も小さかったのは「津軽」であり、以下、「みちのく」、「京都」と続く。これらの地名は名前だけで聴き手を歌の舞台に引き込む力がある地名であ

表 8 地名をタイトルに含む／含まないによる地名の平均初出位置と平均最終出現位置の変位の大きい順の地名リスト

地名	変位の 大きさ	順位
フランス	0.443	1
富士	0.431	2
ハワイ	0.391	3
横浜	0.373	4
渋谷	0.360	5
新宿	0.360	6
銀座	0.354	7
パリ	0.354	8
アメリカ	0.349	9
ニッポン	0.338	10
東京	0.315	11
沖縄	0.314	12
アジア	0.302	13
日本	0.291	14
日本海	0.284	15
江戸	0.270	16
大阪	0.235	17
京都	0.230	18
みちのく	0.208	19
津軽	0.154	20

り、歌詞中の場所を選ばずに使える地名であると考えられる。

このように、歌詞中の地名の位置から地名の特性を可視化できることが明らかとなった。

5.7 地名の音韻の分析

本稿では、地名が楽曲の歌詞の中でどのように用いられているのか、出現頻度を中心にいくつかの仮説について大規模歌詞コーパスを用い、検証してきた。仮説 7 は、歌詞に高頻度で使われる地名とそうでない地名の差

は地名の読みの音韻にある、とするものである。「東京」や「日本」の頻度が高い理由として日本の首都であることや愛国心を持ち出すことはできるが、このような個別の理由以外に上位に来る地名に共通の理由はないのであろうか。そこで本節では、地名を含む曲数の頻度が5以上の474個の地名について、読みの音韻を調べることにした。頻度の順位が1位から50位まで（以下、上位50件とよぶ）と425位から474位（以下、下位50件とよぶ）の2つの地名の群に分けて読みの音韻の分析を行った。

図11は、地名の読みの先頭の文字が50音のどの行にあるかを集計した結果である。上位50件、下位50件、いずれの地名の群も、「あ行」で始まる地名が最も多いことがわかる。上位50件の分布と下位50件の分布は、「は行」が前者は6件に対し、後者は0件、「ま行」が前者は2件に対し、後者は7件の違いがあることがわかる。「は行」は「あ行」と発声時の口の形が近く、聴き取りやすい。一方、「ま行」の子音 /m/ は鼻音であり、発声時の口の形も異なり、聴き取りにくい。このように、上位50件と下位50件の50件の分布が大きく異なることから、歌に高頻度で出現する地名には発声の明瞭性や語感が作用していると考えられる。なお、上位100件と下位100件の分布を比較すると50件の場合の分布ほど大きな差はなかった。

474件の地名の先頭1文字の読みの分布を図12に示す。歌詞に出現する地名の中で「あ行」で始まる地名が多い理由として、日本の地名は「あ行」で始まる地名が多い可能性が考えられる。そこで、日本全国の市町村コード5桁に対応する1924の市町村名の読みの先頭1文字を調べ、集計した結果が図13である。「あ」行で始まる市町村は「あ」行が最も多く、396件、次いで「か行」の310件である。図11、図12と図13を比較すると、歌詞に出現する地名の読みの先頭1文字の分布は全国の市町村の読みの先頭1文字の分布と一致していないことがわかる。以上の点から歌詞には発話しやすく、聴き手に明瞭に伝わる地名が選択されている可能性がある。

次に地名の読みの母音に注目し、分析を行う。地名をローマ字表記に変

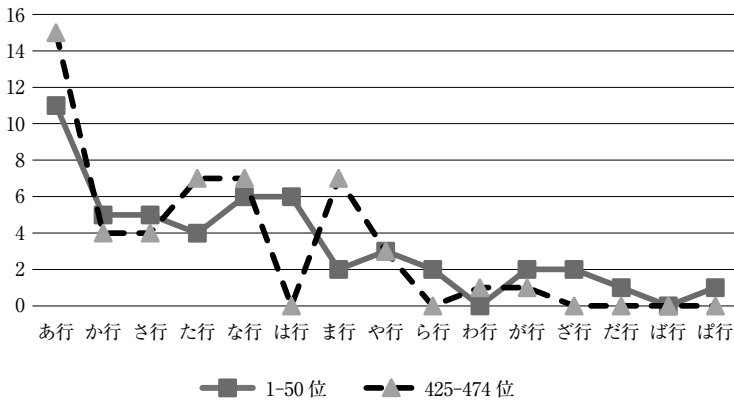


図 11 地名の先頭文字の音の分布 1—50 位と 425—474 位の比較

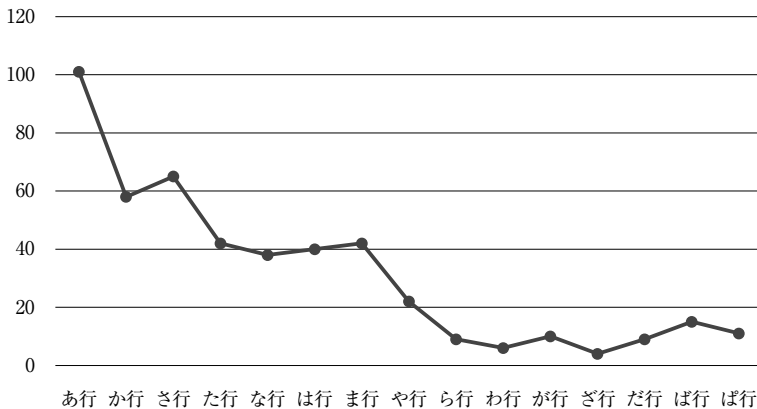


図 12 歌詞に出現する地名 1～474 位までの先頭 1 文字の 50 音の分布

換し、a-i-u-e-o 以外のアルファベットを削除し、母音列を作成した。母音列の先頭から順番に 2 文字ずつとり、バイグラム (bigram、2 文字のペア) を生成し、上位 50 件と下位 50 件の地名群のそれぞれについて、バイグラムの 1 文字目と 2 文字目の遷移表を作成し、比較を行った。表 9 に上位 50 件の地名の読みの母音のバイグラムについて、1 文字目の /a/i/u/e/o/ から 2 文字目の /a/i/u/e/o/ に遷移する確率分布の

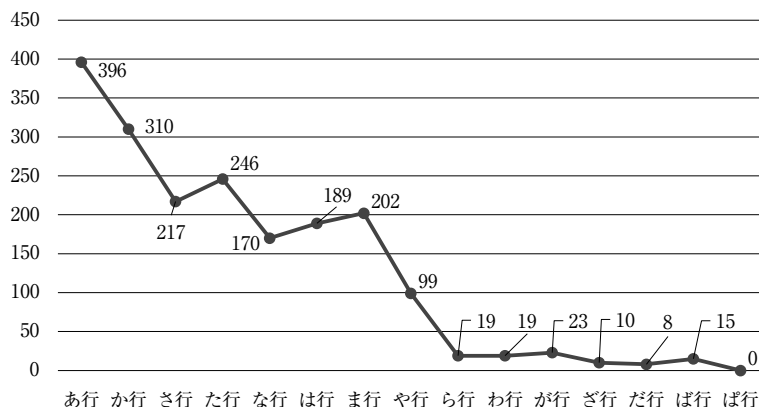


図 13 全国市区町村名の先頭 1 文字の 50 音の分布

表を示す。表 10 は下位 50 件の場合である。表 9 では /ea/ が 0.00 に対し、表 10 では 0.03 であることがわかる。母音のバイグラム /ea/ を含む地名には「梅田」「羽田」「江差」「ネバダ」などがあり、いずれも上位 50 位には入っていない。表 9 の遷移確率から表 10 の遷移確率を引いた結果を表 11 に示す。

表 11 で、上位 50 件の遷移確率が下位 50 件の遷移確率を上回ったセルの背景を色付きで表示した。これより、上位 50 件の地名には母音の「o」を含む地名が多く、下位 50 件の地名には「o」を含む地名が少ないことがわかる。「東京」「日本」も「o」を含んでいる。また、下位 50 件の地名は

表 9 出現頻度が 1—50 位の地名の母音バイグラムの遷移確率行列

		母音バイグラムの 2 文字目					計
		a	i	u	e	o	
母音バイ グラムの 1 文字目	a	0.16	0.09	0.05	0.01	0.02	0.33
	i	0.08	0.01	0.02	0.01	0.08	0.18
	u	0.06	0.03	0.06	0.01	0.05	0.20
	e	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.03
	o	0.05	0.03	0.13	0.00	0.07	0.27
計		0.34	0.17	0.25	0.03	0.22	1.00

表 10 出現頻度が 1—50 位の地名の母音バイグラムの遷移確率行列

		母音バイグラムの 2 文字目					計
		a	i	u	e	o	
母音バイ グラムの 1 文字目	a	0.12	0.10	0.05	0.04	0.04	0.35
	i	0.09	0.06	0.02	0.01	0.02	0.19
	u	0.05	0.06	0.06	0.01	0.05	0.23
	e	0.03	0.01	0.02	0.00	0.00	0.06
	o	0.03	0.02	0.07	0.00	0.05	0.17
計		0.32	0.25	0.22	0.06	0.15	1.00

表 11 表 9 から表 10 を差し引いた結果

	a	i	u	e	o
a	0.0393	-0.0115	0.0024	-0.0313	-0.0230
i	-0.0123	-0.0472	-0.0071	0.0004	0.0591
u	0.0107	-0.0385	-0.0052	0.0004	0.0024
e	-0.0317	0.0087	-0.0159	0.0000	0.0083
o	0.0183	0.0012	0.0536	0.0000	0.0190

「i」や「e」を上位 50 件の地名よりも多く含んでいることがわかる。

以上、地名の読みが歌詞における地名の出現頻度に関する可能性を示唆する結果が得られた。

6 考察

『ブリタニカ国際大百科事典』で「地名」を調べると、土地につけられた固有名詞を指し、居住地名、行政地名、自然地名などであり、名称においては、固有名詞の部分のほかに、街道、川、海、山、滝、といった普通名詞の部分を含むものがある、と説明されている。本稿では形態素解析ツールである ChaSen と MeCab により地名を抽出しており、日本海、太平洋、富士山なども地名として抽出されている。

歌の歌詞に地名を用いる効用として、抽象的で一般的な名称は記憶に残りにくい、具体的なものは既にある記憶と関連づけられて記憶され、地

名から歌が想起され、歌から地名のイメージが復元される点を挙げることができる。私たちは5W1Hの中でもとりわけ場所の情報がわかると安心することが多い。地名に限らないが、最初に提示された印象的な情報により土台となるフレームが形成される現象はアンカリング効果とよばれている。作詞家が歌詞に地名を用いることはシグナリング効果と解釈できる。具体的な地名を歌詞で用いることによりこのような効果が期待できる反面、特定の地名と紐づくことで汎用性がなくなり、その地名を知らない人には関心をもってもらえない可能性もある。歌詞の中で地名を用いる目的は、地名のブランドを利用するか、またはご当地ソングにより地名のブランディングを行うかのどちらかに大別できる。

歌詞に頻出する上位の地名について以下に考察を行う。

6.1 全期間を通じ、東京が第1位であることについて

日本の地名の中で歌詞に登場する曲数が最も多いのが「東京」であり、しかも年代別に期間を分けても「東京」が各期で第3位の地名の3倍以上の頻度でトップであることは実際に集計を行うまで予想できなかった事実である。そこで「東京」を歌詞に含む楽曲がなぜ、それほど多く生まれるのか考察する。

数ある地名がある中で「東京」をモチーフに歌詞を書いてみたいという作詞家が最も多い理由として、東京が歌の切り口を沢山もっている点が挙げられる。他の地名の場合、京都なら古都や寺院、横浜や神戸なら港、というように固定的なイメージが定着しており、これらの地名を含む歌はご当地ソングとして観光に一役買っている。これに対し、「東京」を含む歌の多くは旅行者や訪問客の視点で観光スポットを紹介するのではなく、生活者である当事者の視点で出会いや別れなどの人間の営みを表現している。「東京」には歓楽街やデートスポットが多数あり、風景や表情が多彩であるなど「懐の深さ」がある。東京に憧れる地方の若者は大勢おり休暇などに東京を訪れる。これと比較して首都圏に住む人々が大阪やUSJを訪れ

るケースが少ないのは首都圏で充足しているためではないかと考えられる。こうして、多くの人が東京を目指し、上京するため、人口が多い分、さまざまな切り口から「東京」を舞台にした歌が創作されていくと考えられる。既に相当数の歌が存在する中で、今さら「東京」の歌を創る意味があるのだろうか。聴き手は過去の歌をすべて検索し比較しているわけではないので、歌詞における「東京」ブランドは東京が変化し続ける限り、有効であろう。しかし、曲名や歌詞に「東京」を使えば売れるわけではなく、作詞家の比類なき感性と表現力がものを言うのは今も昔も変わらない。

朝日新聞（2021）は、曲名に「東京」を含む歌謡曲 60 のリストを読者に示し、今こそ聴きたい歌のアンケート調査を実施し、得票数の高かった上位 16 曲（複数回答）のランキングを紹介している。それによれば、第 1 位『東京砂漠』（1976）（35.6%）、第 2 位『ウナ・セラ・ディ東京』（1964）（30.2%）、第 3 位『東京ららばい』（1978）（27.2%）であった。第 4 位『ラブユー東京』以降も昭和 20 年代～50 年代の歌謡曲が大半を占め、第 15 位にランクインした『東京 VICTORY』が最も新しく 2014 年の曲であった。アンケートに熱心に回答した朝日新聞の読者の多くは 50 代以上と推察される。朝日新聞（2021）は「東京」の歌を総括し「自由も空虚さもいとし日常」という記事見出しをつけている。

このランキングの上位 1～4 位の楽曲の歌詞の共通点として、①女性が主人公、②サビで曲名を反復、③「東京」「私（わたし、あたし）」「しあわせ（幸せ、俵せ）」を含む、3 点を挙げることができる。さらに、「愛（ラブ）」「涙」「あなた」の 3 つの単語が 4 曲中 3 曲に含まれている。「東京」以外の具体的な場所は、『東京ららばい』に出てくる「東京湾（ベイ）」「山の手通り」「タワー」の 3 つ以外にはなく、「東京」だけで主題には必要十分なのだろう。歌に描かれているのはいずれも東京という雑踏の風景と切なさの中で気丈に健気に生き抜こうとする女性である。聴き手は、かつての自分を思い出し懐かしさに浸る、あるいは都会の陰を追体験すると考えられる（TABI LABO（2015））。

上位1~4位の歌のメロディは短調である。1位から16位までの16曲中、長調の曲は第5位『東京ブギウギ』、第7位『東京五輪音頭』、第10位『東京キッド』、第15位『東京 VICTORY』の4曲であり、短調の楽曲が圧倒的に多い。一般に、短調の楽曲は「陰」のイメージでとらえられることが多く、上位4曲の旋律は該当する。一方、第6位「俺ら東京さ行くだ」や第12位「東京音頭」は短調でも明るい曲であり、それほど単純ではないことがわかる。

人びとが sad music に惹かれる理由について、Liila Taruffi, Stefan Koelsch (2014) は年齢、性別、国籍以外の個人データは収集しないで sad music と happy music を聴いた後で起こる感情の変化に関するオンラインアンケート調査を行い、772名から寄せられた回答を分析し報告している。それによれば、sad music を聴くと余計衰しくなるのではなく、むしろ、感情が安定し、想像や共感が増し、聴き手の現実の生活を忘れられるという真逆の効果があるとしている。

6.2 全期間を通じ、「日本」が第2位であることについて

歌詞に「日本」が出てくる歌謡曲として筆者が想起できるのは『いい日旅立ち』『夏に抱かれて』『LOVE マシン』のわずか3曲であるが、歌詞に「日本」を含む歌の数は本稿の研究に用いたデータで4桁の数字に昇る。歌謡曲の中で「東京」が歌の主人公の舞台であるのに対し、「日本」は地理的な意味ではなく、アイデンティティとして、あるいは外国や世界との対比で用いられることが多いと考えられる。

「日本の○○」で歌詞検索すると、「どこかに」「未来は」「祭り」「夏」「伝統」「心」「誇り」等が続くことから、全期間を通じ「日本」が地名の第2位（国名では第1位）である理由として考えられるのは、「日本も捨てたものではない」、「日本が好き」等の日本に対する好感を歌詞に織り込んだ歌が多いためではないかと考えられる。歌謡曲はエンターテインメント商品であるから、日本に対する恨みつらみを吐露した歌をつくっても日本人

の気分を害するだけで日本では売れない。そうかといって、「日本」を前面に出し、街宣車のようにあからさまに愛国心を煽る歌も敬遠される。押しつけがましくない形で「日本」を歌詞に忍ばせることで聴き手は抵抗感なく聴け、晴れやかな気分になる。こうした術を作詞家は心得ていると推察される。

6.3 3位以下の変動について

第1位の「東京」と第2位の「日本」は3位以下を大きく引き離しており安定している。ある地名の出現頻度はその地名を含むヒット曲の影響により上昇するだろうか。柳の下のだジョウを狙おうと、多くの作詞家がその地名を含む歌詞を書くことがないとはいえない。筆者は第3位である「渋谷」を歌詞に含む歌をひとつも知らないが、「渋谷」は計四期にわたり、第3位を維持している。もともと、歌詞に地名を含む歌謡曲は約4%と少なく、演歌歌手を除くメジャーなアーティストの曲で地名を含む曲はきわめて少ない。したがって、ある地名の高い出現頻度は大多数が知名度の低いアーティストの曲によるものと考えられる。そこで考えられるのは、その時々勢いがある地名は衆目の一致するところとなり、歌のモチーフ（題材）になりやすい点である。一種の「共時性（シンクロニシティ）」が起きた結果、特定の地名を含む曲が増えると考えられる。

では、「渋谷」の勢いとは何か。もともと東急が開発してきた渋谷が若者文化を発信する街に変貌したきっかけになったのは1964年の東京オリンピック開催に伴う道路の拡張整備と1973年の渋谷パルコの開店といわれている（渡辺裕也（2017））。1970年に渋谷公会堂が竣工し、さらにパルコができたことで代々木公園に至る坂が「渋谷公園通り」と命名された。今回用いた歌詞コーパスで1990年～1994年の地名を集計すると「渋谷」が第16位に対し「公園通り」が第8位にランクインしている背景には、ちょうどこの時期、「渋谷系」とよばれるポップミュージックが渋谷から始まり、そこから生まれたいくつかの曲の中で「公園通り」が用いられた

と考えられる。「渋谷系」は1990年代後半に絶頂期を迎え、その後衰退するが、音楽都市としての渋谷の勢いはとどまることを知らず、現在に至っている。牧村憲一他(2017)は、谷と坂から成る渋谷の地形こそが日本のポップ、ロック音楽の母体である、と述べている。

渋谷は音楽産業の産業集積が息づいている街である。渋谷には音楽を愛好する多くの若者が集まり、2005年から毎年、渋谷音楽祭が開催されていることからわかるように日本で最もエネルギッシュな街といえよう。このように「渋谷」が四期連続で第3位であるのは、一時的な流行ではなく、音楽文化を発信する街で育った若者がプロの作詞家になり、共時的に「渋谷」を発信し続けてきた結果であると考えられる。

6.4 分析方法について

大量の歌詞データから地名を抽出する方法として、本稿では日本語文章の形態素解析ツールとして知られている ChaSen と MeCab を用いたが、文章データから地名を抽出するために必要な技術について考察を行う。

文章中から地名を抽出するためには、意味をもつ最小の単位である形態素に分割する必要がある。さらに各形態素について辞書を用い、品詞を特定する。辞書にない単語は地名として認識されないが、地名の辞書を充実させると地名ではない単語を地名として認識する可能性が高くなる。特に人名の苗字には地名であるものが多い。たとえば、「ソウル」や「タイ」等の同音異義語が存在する単語は形態素解析により名詞であることは判別できても地名か別の意味かの判断はできない。辞書の充実は必要であるが、歌詞に登場する地名はポピュラーなものが大半なのでほとんど知られていないローカルな地名まで網羅的に辞書に登録する必要はないと考えられる。

MeCab は単語の属性を「名詞、固有名詞、地域」を指定することにより地名の抽出を可能にしているが、辞書に未登録語や多義語の変換精度に問題がある。MeCab が「地域」の誤変換を起こす例を以下に示す。

- (1) 1文字の漢字の単語：(例) 米、露、仏 を地域の名称と認識する。

(2) カタカナ語を分解し、地域として認識する。

(例) リマ インド、タフネス、ミサंगा、ニュートリノ、ハロウィーン

(3) 地名として用いていないものが抽出される。(例) あけぼの、えびす、はなみずき、やかた、アツツ

形態素解析を行わずに、特定の文字列を含むかどうかをプログラムで調べるのは容易であるが、たとえば「京都」を抽出すると「東京都」も抽出されてしまうことから、地名の抽出では形態素解析が重要であり、同音異義語に対応するためには構文解析や意味解析も行う必要がある。本研究では歌詞データがテキストファイルにより入手可能であることと、10万件を超える曲の歌詞から人間が目視で地名を抽出することは非効率であることから既に定評のある形態素解析ツールを使用した。歌詞の中で地名が場所の固有名詞ではなく、単なる音韻として用いられている場合や最近ではラップのように地名を延々と並べた歌詞も存在する中で膨大な曲から全体的な傾向を把握するのに自然言語処理技術は不可欠であるといえよう。

7 おわりに

本稿は、日本語の歌詞に現れる地名について大規模歌詞コーパスを利用し、いくつかの仮説の検証を行った。本稿の分析を通じて得られた全体的な傾向に関する知見は以下の通りである。

- (1) 歌詞に頻出する地名の上位2位は、全期間を通じて「東京」が1位、「日本」が2位で不動である。
- (2) 地名を含む楽曲の割合は4%強で、年代によらずほぼ一定である。
- (3) 歌詞に現れる地名に占める海外の地名の割合は30%前後で年代によらずほぼ一定である。
- (4) 歌詞に現れる地名にはよく用いられる共起語のパターンがある。
- (5) フレーズ内の地名の位置は地名によりパターンがある。
- (6) 地名をタイトルに含むかどうかで、歌詞中の地名の出現位置が大きく異なる地名が存在する。

(7) 地名の読みの音韻が地名の出現頻度に影響を与えている可能性がある。

歌謡曲の日本語の歌詞は日本人に馴染みが深いものが多い反面、個人が知っている歌から日本語の歌詞全体の傾向や法則性をつかむことはよほどの音楽通でなければ難しい。今回、歌詞検索サービスを活用し、10万曲を超える歌詞コーパスのテキストデータをもとに歌詞における地名の使われ方の分析を行い、上述のように従来は明らかでなかった特性を発見することができた。今回の分析は歌詞コーパスに閉じており、リズム、メロディ、アーティスト、作詞家、作曲家などの音楽著作物固有の情報やジャンル情報、楽曲の再生回数やCD売上といった楽曲の外部属性のデータを用いていないため、たとえば、地名を含む楽曲のヒットする、しないを判別することはできないが、地名と共起語の関係から定番のフレーズの確認や独創的なフレーズの創作には役立つと思われる。

本稿は大規模歌詞コーパスをマクロ的、すなわち統計的に分析を行ったものであり、特定の地名や作詞家、アーティスト等に関する楽曲をミクロ的な視点から分析することは行っていない。コーパス全体の統計的な分析結果が私たちの直感と合わない場合もあり、網羅的な歌詞コーパスがあれば、絞り込み検索を行うことによりこうした事例研究が可能になろう。また、本稿では歌詞コーパスの統計的分析を行ったが、正確な発売／リリース年の情報をフォローできない楽曲もあり、社会や文化の時代背景や変化をとらえるには至っていない。

歌詞における地名は聴き手を歌の世界に引き込む重要なアイテムのひとつであるが、地名の果たす役割はテーマやブランド、あるいはシンボルとしての利用から言葉遊びまで多岐にわたり、本稿ではそれらを識別するまでには至らなかった。また、本稿ではAメロ、Bメロ、サビなど歌詞の意味的な構造を同定することも行わなかった。歌詞検索サービスサイトでは1番の歌詞と2番の歌詞の間隔を2行あけるなどして表示しており、フレーズの音数や空行の数など形式情報を用いれば、より精緻な歌詞分析が

可能になろう。しかし、こうした分析にはそれなりの労力や計算の負荷を要するので意義を考えた上で実施する必要があるだろう。たとえば、人工知能による自動作詞・作曲は既に研究が進んでおり、より人間の作詞に近づけるために本稿で得られた知見を活用することが考えられる。

人間や社会の営みのエビデンスとして歌詞コーパスは重要な情報源であり、人工知能や自然言語処理の高度化に資するだけでなく、人文・社会・企業経営・マーケティングなど多方面での活用が期待される。

謝 辞

本研究では、日本語の形態素解析ツールとして ChaSen 並びに MeCab を使用させていただきました。地名の共起語を分類するために NTT コミュニケーション科学基礎研究所が監修した『日本語語彙大系』の語彙データベースを使用させていただきました。歌詞データベースとして、歌詞検索サービスである「うたまっぷ」並びに「歌ネット」を活用させていただきました。日本語歌詞における地名の出現状況について、これらのツールや情報源により幾ばくかの知見を得ることができましたことを心から感謝申し上げます。

参考文献

- 阿久 悠 (2009) 『作詞入門：阿久式ヒット・ソングの技法』 岩波書店, 240p.
- 朝日新聞 (2020) 「歌えば広がる原風景 童謡の歌詞 4 分の 1 に山、桜、蛍……農研機構 1.3 万曲を分析」 2020 年 6 月 17 日, 夕刊, p.1
- 朝日新聞 (2021) 「今こそ！聴きたい「東京」の歌」 2021 年 10 月 2 日, 朝日新聞 be, p.2
- 伊藤雅光 (2002) 『計量言語学入門』 大修館書店, 285p.
- 伊藤雅光 (1997～2001) 「ユーミンの言語学 (1) ～ (46)」 『日本語学』 16 (4) ～20 (8), 明治書院
- 内田隆三 (2020) 『ミシェル・フーコー [増補改訂]』 講談社, 304p.
- 上田起士 (2019) 『よくわかる作詞の教科書』 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス, 152p.
- 「うたまっぷ」 <http://www.utamap.com> 2014 年 8 月 20 日アクセス

- NTT コミュニケーション科学基礎研究所 監修・池原 悟 編集 (1999)『日本語彙大系 CD-ROM 版』岩波書店
- 沖浦和光 (2009)『なぜ人は歌い、踊り、演じるのか 「芸能」の起源について考える』<https://www.jinken.ne.jp/be/meet/okiura/okiura2.html>, 2021 年 9 月 1 日確認
- 株式会社ページワン：<https://www.pageone.co.jp/utanet/> 2021 年 9 月 1 日確認
- 小林佳織・狩野恵里奈・鈴木崇史 (2013)「女性グループの歌詞の計量テキスト分析」言語処理学会 第 19 回年次大会 発表論文集 (2013 年 3 月), pp.338-341 「CD ジャーナル」<http://www.cdjournal.com/> 音楽出版社
- 清水淳・堀玄 (2012)「季節を主題とする歌謡曲の歌詞の計量分析」計量国語学会 56 回大会予稿集, pp.1-6
- 出入国在留管理庁：https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_nyukan.html 2021 年 9 月 1 日確認
- George A. Miller (1956) “The Magical Number Seven, Plus or Minus Two: Some Limits on our Capacity for Processing Information”, *Psychological Review*, 63, 81-97.
- TABI LABO (2015)「なぜ、人は「悲しい音楽」に惹かれるのか？ アジアと欧米で理由が違った！」<https://tabi-labo.com/170619/sad-music> 2021 年 10 月 1 日確認
- 武田砂鉄 (2021)『NHK 100 分 de 名著 ル・ボン 群衆心理』NHK 出版, 97p.
- 田中俊 (2019)『思いどおりに作詞ができる本』リットーミュージック, 160p.
- Nelson Cowan (2000) “The magical number 4 in short-term memory: A reconsideration of mental storage capacity”, *BEHAVIORAL AND BRAIN SCIENCES*, 24, 87-18
- 棚田輝嘉・山内博之 (2012)「ニューミュージックの歌詞の分析—フォークソング的特徴の喪失」, 実践國文學, 81, pp.1-23
- 「ChaSen (茶筌)」<http://chasen-legacy.osdn.jp/>
- 「データなび (データが生んだ紅白 The 平均ソング, 日本人がなぜか気持ち良くなる歌をデータで探るスペシャル)」, NHK 総合テレビ, 2015 年 12 月 26 日 21:00~21:55 放送, 番組 URL <http://www.nhk.or.jp/d-navi/kouhaku/>
- 富永愛 (2015)「いきものがかり・水野良樹と山下穂尊の歌詞に関する文体的特徴分析」, 日本文學, 111, pp.235-252
- 日本音楽著作権協会 (2021)『2020 年度事業報告書』https://www.jasrac.or.jp/profile/disclose/pdf/2020/2020_report_03.pdf
- 日本大百科全書 (ニッポニカ)：<https://kotobank.jp/word/日本民謡-1574367>

2021 年 9 月 1 日確認

日本レコード協会「新譜数の推移」: <https://www.riaj.or.jp/f/data/others/sp.html> 2021 年 9 月 18 日確認

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典「地名」の解説: <https://kotobank.jp/word/地名-96578>

細谷舞・鈴木崇史 (2010) 「女性シンガーソングライターの歌詞の探索的分析」, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, 15, pp.195-202

堀玄・齋藤・嵯峨山 (2013) 「形態素リスト上の経路探索による自動作詞」計量国語学会 57 回大会予稿集, pp.31-36

牧村 憲一・藤井 丈司・柴 那典 (2017) 『渋谷音楽図鑑』太田出版, 282p.

Liila Taruffi, Stefan Koelsch (2014) The Paradox of Music-Evoked Sadness: An Online Survey. PLOS ONE 9 (10) : e110490. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0110490>

渡辺裕也 (2017) 「未来世紀シブヤ 2017 音楽都市シブヤ、50 年の歴史と変遷～『渋谷音楽図鑑』著者、牧村憲一と渋谷の街を歩きながら確かめる、都市の生成変化」<https://www.fuze.dj/2017/09/makimura-san-shibuya.html> 2021 年 9 月 1 日確認

非業の死をめぐる

— 宗教社会学的考察 —

奥 井 智 之

On Violent Death

— A Study from the Perspective of Sociology of Religion —

Tomoyuki Okui

Abstract

The author of this article recently published a book called *Sociology of Religion* (printed by the University of Tokyo Press). Due to certain limitations, the subject of ‘violent death’ could not be covered sufficiently within the book. Only specific death — unnatural, unfortunate and accidental death — is called ‘violent death’. This paper seeks to further explore and discuss the topic of ‘violent death’. Who decides that a particular individual (or group) has experienced a ‘violent death’? In many cases, this is categorized and determined by the collective common sense of people. This paper hypothesizes that the existence of a ‘mourning community’ made up of people behind that particular individual’s death helps provide this common sense. Taking this point of view into consideration, the following cases are analyzed here: Houdai Yamazaki (a wandering poet who died in Kamakura), Sadao Maruyama (an actor who died in Hiroshima due to the atomic bomb), Kamakura Gongorō Kagemasa (a legendary samurai and individual often associated with the development of Kamakura) and the war dead of the Aizu clan (who were exposed to the wild after they died in the Battle of Aizu). We now live in a world of globalization and individualization. Like many other types of communities, the ‘mourning community’ is also forced to collapse. The conclusion of this paper is that ‘violent death’ may be becoming an ordinary type of death for us.

無名の文士

わたしが東京から鎌倉に移り住んだのは、35年以上も前である。鎌倉に移り住んだのは諸般の事情によるものであって、積極的にそこを選んだわけではない。それでも住んでいるうちに、鎌倉暮らしが気に入って（市内での二度の転居を経て）いまに至っている。かつては鎌倉在住者として、「鎌倉文士」のことが人々の口に上った時代もあった。しかしいまは、「鎌倉文士」はほとんど死語と化している。元々「鎌倉文士」という曖昧な言葉に、厳密な定義のあろうはずはない。しかしそれは、概ね次のように理解されている。一般に「鎌倉文士」とは、①明治22（1889）年の横須賀線開通を契機として（東京と鎌倉の行き来が便利になったことを背景に）、②東京から鎌倉に移り住んだ文学者のことを言う。とりわけ③大正12（1923）年の関東大震災を経て（関東大震災では東京のみならず、鎌倉も大きな被害を受けたが）、昭和に入ってから文学者の鎌倉移住が本格化した。

かつて「鎌倉文士」として名が通っていたのは、以下のような面々である。大佛次郎、川端康成、久米正雄、小林秀雄、里見弴、高見順、永井龍男、林房雄、深田久彌、吉野秀雄、吉屋信子……（五十音順）。かれらの作品が今日、どれだけの読者を得ているのかは定かではない。しかしかれらが、いずれも文学界の著名人^{ビッグネーム}であることは間違いない。かれらは皆、一時鎌倉で暮らしていた。そして死後も、その多くが鎌倉で眠っている。もっともここで、これらの著名な「鎌倉文士」を取り上げようというのではない。ここで取り上げたいのは、二人の無名の「鎌倉文士」である（そのうちの一人は文学者ではないし、鎌倉で暮らしてもいないが）。その一人は山崎方代^{ほうだい}——山梨県出身の放浪歌人であり、晩年の13年間を鎌倉市手広^{てひろ}の民家の一角で暮らしした——であり、いま一人は丸山定夫——広島で被爆し、終戦の翌日に亡くなった俳優にして、鎌倉市の妙隆寺の墓地に記念碑がある——である。

山崎方代（1914-85年）は故郷を離れたのち、定職に就かず、生涯独身で、各地を遍歴した。風体は「着の身着の儘^{まま}」で、酒と煙草を手放さなかった。

歌人としてのかれは、有力な結社に属さず、独特の（非定型で文語・口語混淆体の）歌を詠んだ。方代について語る際には、視覚障害の問題を逸するわけにはいかない。すなわちかれは、太平洋戦争従軍中に右目を負傷（失明）し、戦後は左目の視覚障害（白内障・緑内障）にも苦しんだ。かれは生涯を通じて、肉親や知人の世話になっている。晩年に鎌倉に住み着くことになったのも、その一例であり、知人の中華料理屋の店主が自宅の一角に建ててくれた一間だけの小屋が、方代の「終の棲家」になった。かれは鎌倉暮らしの末に、肺がんで病死した。葬儀は二回、つまりは鎌倉の瑞泉寺で仮葬が、次いで故郷の菩提寺（甲府市右左口の円楽寺）で本葬が営まれた。この菩提寺に方代自身が建立した実家の墓が、かれの墓所になっている。

丸山定夫（1901-45年）は第二次世界大戦前の新劇俳優（築地小劇場の中核的なメンバーの一人）であり、当時「新劇の團十郎」とも称された。第二次世界大戦下において丸山は、仲間の演劇人たちとともに移動演劇集団・桜隊を組織する。そして桜隊のメンバーとともに、広島滞在中に原爆投下に遭遇する。丸山が避難先（厳島）で原爆症に苦しみながら亡くなったのは、10日後であった。丸山の遺骨は実妹と内妻Uの手元に分骨され、それぞれ京都の知恩院と鎌倉の妙隆寺に埋蔵された。20年後妙隆寺の丸山の墓は、事実上無縁墓となっていた（墓標は朽ち果て、花や香も絶えていた）。それが新聞で報じられたことが機縁となり、かつての演劇仲間によって「丸山碑建設の会」が立ち上げられた。その会が昭和41（1966）年に建立したのが、現在も妙隆寺の墓地に立つ「丸山定夫之碑」である。この碑によって丸山定夫が鎌倉に眠っていることが、広く知られるようになった。

一般にニュースは、①グローバルなメディアによって報道されるグローバルなニュースと②ローカルなメディアによって報道されるローカルなニュースに大別される。わたしは鎌倉在住なので、鎌倉周辺でしか流れないニュースに接することも多い。本稿で取り上げた山崎方代と丸山定夫もまた、そのようなニュースのなかで接する名前である。たとえば方代忌はい

までも、9月の第一土曜日に瑞泉寺で行われている。それに関するニュースが、その前後にそれとなく耳に入ってくる。丸山を偲ぶ会が目下、鎌倉で定期的に行われているかどうかは分からない。しかし少し前までは、そのような会が碑前で催されたというニュースをよく目にした。いったい人々が、これらの無名の「鎌倉文士」の死を記憶に留めようとするのはなぜか。おそらくそれは、山崎や丸山の死が「非業の死」であることと無関係ではないであろう。本稿では宗教社会学の立場から、この「非業の死」を問題にしたいと思う。

鎌倉権五郎

今回のコロナ禍がもたらした副産物の一つは、オンラインでの（ネットを媒介とする）人々の活動の幅が大きく広がったことである。それとともに人々のオフラインの（ネットを媒介としない）生活の範囲が大きく狭まったことも、今回のコロナ禍のもたらした副産物の一つであった。要するに人々は、感染回避のために自分の居住地周辺に行動範囲を限定することになった。それによって人々は、自分の居住地に改めて目を向けることになった。わたしは運動不足の解消のために、居住地周辺の半径10キロメートルほどの範囲をよく歩くようになった。「散歩」は文字通り、明確な目的のないそぞろ歩きである。しかしわたしの場合、「散歩」にも何か主題を設けたい性質である。鎌倉近辺では古い集落ごとに、「御霊神社」と名の付く神社がある。コロナ禍のなかでわたしは、この「御霊神社」を順番に巡ることにした。興味深いことにそこには、共通の人物——鎌倉権五郎——が祀られていた。

まずもって鎌倉権五郎は、歴史上の人物である。かれは本来、鎌倉景正もしくは平景正という（権五郎は通称であり、名は景政とも書く）。景正は平安後期の武将で、坂東平氏の一つである相模平氏の一族である鎌倉党（あるいは鎌倉氏）の頭目である。坂東平氏の始祖である桓武天皇と景正がどうつながるかについては、三つの系図がある。それをここで、一々紹介し

てもしかたがない。ここでは鎌倉党が相模国鎌倉郡の周辺に盤踞した武士団であり、それが景正の代に大いに発展を遂げたらしいことを、史実として確認すれば十分である。具体的には景正（1069年-没年未詳）が、①少年時代に後三年の役（1083-87年）に出陣し奮戦したこと、②長治年間（1104-06年）に相模国高座郡大庭御厨（現在の藤沢市周辺）を開発し、永久5（1117）年にそれを伊勢神宮に寄進したことが記録されている。もっとも景正について、何が「史実」であるかは必ずしも判然としない。

というのも景正は、伝説上の人物でもあるからである。景正をめぐる最も有名な逸話は、後三年の役に出陣したときのものである。合戦中に景正は、右目を射られてしまう。矢は首を貫いて、兜の鉢付の板にまで達していたという。景正は相手を射返し、倒した上で、本陣に帰り、仰向けに倒れる。三浦為継が景正の顔を踏んで矢を抜こうとしたところ、景正は刀を抜いて為継を突こうとする。為継が驚いて「何をするのか」と言うと、景正は「弓矢に当たって死ぬのは武士の本分であるが、生きながら顔を踏まれるのは恥辱である」と言う。そこで為継は、膝をかがめ、顔を押さえて、矢を抜いたという逸話がそれである。わたしの散歩圏内にある村岡御霊神社には、これに関わる伝説がある。後三年の役に出陣する前に景正は、その神社に戦勝を祈願した。帰陣後景正は、そこに戦勝を報告した。その際かれが、お礼の印に兜を埋め（兜山）、そこに松を植えた（兜松）という伝説がそれである。

これとは別に茨城県の牛久には、景正の墓（正確には、墓と称する石碑）がある。牛久の伝説によれば景正は、後三年の役からの帰陣中にそこで敵手（鳥海弥三郎保則）と鉢合わせをし、右目を射られる。しかし景正は、そのまま戦い続け、敵手を斬り倒す。その後景正は、馬に揺られながら朦朧状態になり、川に転落死したという。いったい景正は、本当に後三年の役から鎌倉に帰陣したのであろうか。かれが後三年の役で深手を負ったことからすれば、その戦役で討死していたとしても少しも不思議はない。しかしここで、そのことを詮索するつもりはない。とりあえずたしかなこと

は、鎌倉権五郎景正が若くして戦役に出陣し、右目に深手を負ったという伝説のあることである。その伝説には若き武将としての景正に対する、人々のアンビヴァレント（両面的）な感情——讃仰の念とともに憐憫の念——が映し出されている。とりわけかれが、合戦で右目を射られたことはわたしの興味を引く。

柳田國男は「一目小僧」という論文で、隻眼の人物が神格化される傾向のあったことを書いている（同様の傾向は隻脚の人物にも認められる、と柳田は言う。しかし議論が煩雑になるので、ここでは割愛する）。柳田はそこで、自説の論証のために種々の事例を引いている。そのなかには片目を失った上で、人々の崇敬を集めた鎌倉権五郎景正の伝説も含まれている。なぜ人々は、隻眼の人物を神格化するようになったのか。それに対する柳田の解答は、はなはだ大胆にして奇抜なものである。柳田はこう説く。大昔には祭りのたびに、神主を生贄いけにえとする風習があった。ある時代からそれが、神主の片目を潰す風習に略式化した、と。つまりは隻眼の人物を神格化するのは、古代の人身供犠くさぎの名残であるというのである。この柳田の所説が正鵠を射ているかどうかについて、わたしは即断できない。ただし「隻眼の人物が神格化される傾向がある」という柳田の説そのものには、十分な説得力がある。

トマスの公理

ここでいったん本題から離れ、本稿の理論的立場を表明させていただく。ご覧のように本稿では、伝説（という曖昧模糊としたもの）をも研究対象としている。その際次のことが、理論的に問われてしかるべきであろう。いったいなぜ、伝説が学問的な研究対象になりうるのか。わたしは最近、『宗教社会学——神、それは社会である』を上梓した。広告文風に言えば同書は、「宗教の論理は社会の論理である」との立場から①宗教を一つの自己言及的な（self-referential）システムとして解釈するとともに、②政治・経済・学問・芸術・スポーツなどの根底に息づく宗教の論理をヴィヴィッド

に描き出すことを目的にしていた。そのうちここでは、①について議論を多少敷衍してみようと思う。たとえば特定の山や木や川や水や石が、「聖なるもの」であるのはなぜか。それについては同語反復的^{トートロジカル}に、こう言うのはかない。人々がそれらの山や木や川や水や石を、「聖なるもの」とするからである。

要するに宗教は、「神」を「神」として信奉するシステムであるというのがわたしの立場である。自己言及性はそれ自体、哲学用語である。したがって同じことを、社会学的な文脈で表現するという工夫はあってよい。その際有用なのは、「トマスの公理」(Thomas theorem)」という概念ではないかとわたしは思う。「トマスの公理」は1世紀ほど前に、アメリカの社会学者 W.I. トマスが提示した着想に由来する概念である(のちにマートンが、その着想を「トマスの公理」と命名した)。トマスは『アメリカの子ども』(D.S. トマスとの共著、1928年)で、こう書いた。「人々がリアルと思ったことが、結果としてリアルになりがちである」。トマスはそこで、ある危険な囚人 A を例にとっている。A は路上で、独り言を言う習慣をもつ複数の人々を殺害する凶行に及んだという。かれらの唇の動きから「(自分が) 汚い言葉を投げかけられた」と、A は思ったというのである。

おそらくかれらは、小声で「くそっ! (Damn!)」とでもつぶやいたのであろう。それを A が——自分がそう言われたと——誤解したことから、その不幸な事件が起こったというのである。この場合 A の思考の内容は、反事實的(counterfactual)である。しかしそれは、行為を通して現実化している。ということでトマスは、「人々がリアルと思ったことが、結果としてリアルになりがちである」と説く。これに示唆を得てマートンが、「予言の自己成就」という概念を提示したことは社会学史の常識である。マートンはそこで、銀行の取り付け騒ぎを例にとっている。たとえば「B 行が危ない!」という噂が、人々の間で広まったとしよう。そして人々が、こぞって預金の引き出しに走ったとしよう。この場合元々の噂がウソやガセやデマであっても、実際に B 行が倒産に追い込まれるリスクがある。お

そらく株式市場では、このような「予言の自己成就」が日々起こっているのであろうと思う。

「トマスの公理」では人々の反事実的認識が、かれらの行為を通して現実化することが問題化されている。わたしはそれを、(その本質を汲み取るかたちで) こう言い換えてはどうかと提案している。「人々がリアルと思うことがリアルである」。こう表現することで当事者の世界観そのものを問題化しようというのが、わたしの言い換えの意図である。その上でわたしは、それを宗教的な言説の分析に適用することを提案している(『宗教社会学』)。たとえば「天国」と「地獄」は、宗教的な言説をかたちづくる重要な対概念である。その際「天国」と「地獄」を、^{はな}端から妄想と決めてかかるのは勝手である。しかし信者たちが、死後の世界の存在を認めていることもまた事実である。かれらにとってそれは、反事実的なバーチャル・リアリティ—— もう一つの現実—— にほかならない。のみならずそこでは、奥井版のトマスの公理(「人々がリアルと思うことがリアルである」)が働いている。

いったいなぜ、伝説は学問的な研究対象となりうるのか。とりあえずここでは、それにこう答えておきたい。人々は伝説を、もう一つの現実として受け入れてきた。その意味ではそこに、何らかの現実が映し出されている可能性がある、と。念のために言えば伝説は、何も古典的な伝説とは限らない。すなわち伝説は、いまでもわたしたちの周囲で量産されている。このような現代的な伝説もまた今日、立派な社会学の題材となる(民俗学者や人類学者が今日、現代的な事象を問題化する傾向にあることはこれと対応している)。本稿の題材で言えば鎌倉権五郎が伝説上の人物であるのと同じく、山崎方代や丸山定夫もまた伝説上の人物である。実際山崎や丸山の生涯も、真偽が定かでない伝説によって彩られている。おそらくそれらの伝説にも、何らかの現実が映し出されているのであろう。さて以上が、本稿に関わる理論的立場の表明である。その上でいま一度、伝説の世界へ足を踏み入れたい。

御霊信仰

わたしの散歩圏内にある複数の御霊神社に、鎌倉権五郎が祀られていることについてはさきに書いた。いったいなぜ、そこに鎌倉権五郎が祀られているのか。この問題を解く際に一つの理論的補助線を提供してくれるのが、宗教学者エリアーデの『永遠回帰の神話』である。エリアーデはそこで、神々・英雄・祖先などによる「天地創造 (Creation)」の行為が儀礼的に反復されること——「永遠回帰 (eternal return)」——に宗教的行為の本質を見いだしている。この理論を援用すれば鎌倉権五郎は、まさに「鎌倉」の伝説的な開発者にあたる。したがってかれが、鎌倉周辺の神社に祀られていたとしても何の不思議もない。しかしわたしは、かれを祀っているのが御霊神社であることに関心をもつ。はたして御霊神社とは、いかなる性格をもつ神社か。「御霊神社」と名の付く神社は、各地に存在する。一般にそれは、特定の人物の「御霊」を鎮撫するために創建された神社と理解されている。

かつては人々の間で、次のような信仰が広く行われていた。すなわち各種の災厄（災害・飢饉・疫病など）は、非業の死を遂げた者たちの「怨霊」の祟りである。かれらの「怨霊」を——「御霊」として——祀ることで、その祟りを免れなければならない。このような信仰のことを一般に、御霊信仰と言う。御霊信仰の対象としてよく知られているのは、菅原道真と平将門と崇徳上皇の三者である。まず菅原道真は、讒言によって大宰府に左遷され、そこで客死する。次いで平将門は、関東で挙兵し、「新皇」を自称し、朝敵となる。その後将門は、朝廷軍との戦いで敗死する。最後に崇徳上皇は、権力争い（保元の乱）に敗れ、讃岐に流され、そこで亡くなる。興味深いことにかれらは、非業の死ののちに皆——「御霊」として——人々の崇敬の対象となっていく。ちなみに道真は各地の天満宮に、将門は東京の神田神社（神田明神）などに、崇徳上皇は京都の白峯神宮に、それぞれ祀られている。

御霊神社と名の付く神社も、全国各地にある。そのなかで最も由緒のあ

るのは、奈良市薬師院町の御霊神社であろう。そこには主神として、聖武天皇の皇女にして光仁天皇（白壁王）の皇后であった井上内親王と、かの女の子である他戸皇子が祀られている。立後の二年後井上皇后は、「天皇を呪詛した」との疑いで皇后を廃される。その際さきに立太子されていた他戸皇子も、同じく皇太子を廃される。やがて幽閉先で、二人はともに急死する。その後新都（平安京）で、天変地異が相次ぐ。人々はそれを、井上内親王と他戸皇子の「怨霊」の仕業ではないかと解釈する。そこで桓武天皇（他戸皇子の異母兄）は、旧都（平城宮）に二人の「御霊」を慰めるための神社を造立する。二人の「御霊」は一種の守護神として、次第に奈良周辺の人々の崇敬を集めるようになる。簡単に言えばそれが、奈良の御霊神社の由緒である。わたしたしはそこに、典型的な御霊信仰の論理を見いだすことができる。

鎌倉周辺の御霊神社に主神として、鎌倉権五郎が祀られているのはなぜか。柳田國男は「一目小僧」で、「五郎」と名の付く人物が「御霊」として祀られる傾向のあったことを書いている。すなわち人々の間で、「御霊」と「五郎」の取り違えがあったというのである。あながちこれを、俗説として切り捨てるわけにもいかない。たとえば曾我兄弟が御霊信仰の対象であるのは、弟が「五郎」であることと無関係ではないかもしれない。それと同じく鎌倉権五郎も、名が「権五郎」であることで人々から敬愛されているのかもしれない。その上で鎌倉権五郎が隻眼であることは、かれが「御霊」として祀られていることと無関係ではないであろう。鎌倉周辺ではかれが、後三年の役で討死したということにはなっていない。しかし実際には、そこで討死したと見るほうがよほど合理的である。のみならずかれの死後、鎌倉党が——清和源氏が台頭するなか——鎌倉周辺で没落していくのは事実である。

要するに鎌倉権五郎を「御霊」として祀ることの背景には、かれが「非業の死」を遂げたという暗黙の前提があったのではあるまいか。それがいわば、本稿の理論的予想である。本稿の冒頭でわたしは、二人の文士を取

り上げた。それについてもここで、一言付言しておこう。二人のうち丸山定夫の死が、「非業の死」であることは議論の余地がない（たとえば新藤兼人監督の『さくら隊散る』は、そのことを再認識させてくれる）。山崎方代は藤沢の病院で、友人たちに囲まれてなくなったと言う。その限りではそれは、「非業の死」とは見なしがたい。しかしかれの死を、一つの客死としてとらえることもできなくはない。というのもかれは、若くして故郷を離れ、長い放浪生活の末に鎌倉に居つき、そこで亡くなったからである。この間にかれが、戦傷を負い、隻眼になったことはさきに書いた。人々がことさらにかれの死を悼むことの背景には、そのような事情も与って力があると思われる。

弔いのコミュニティ

そもそも「非業の死」とは、いかなる死のカテゴリーにあたるのか。「非業」は元々、「前世の善因によらない」という意味をもつ仏語である。つまりは「天寿（善因による寿命）を全うしない死」が、「非業の死」である。この場合自然死（いわゆる老衰）以外の死は、すべて「非業の死」に含まれかねない。いや自然死にも何らかの病因が見いだせるとすれば、すべての死が「非業の死」ということになるだろう。もっとも実際には、特定の死——とりわけ無残な（violent）、不幸な（unfortunate）、不慮の（accidental）死——だけが「非業の死」と見なされている。この場合「非業の死」とそうでない死を分かつ一線を引くのは、いったいだれか。結局のところそれを引くのは、人々の共通感覚以外にはないとわたしは思う。つまりはAの死が「非業の死」であるのは、人々がそれを「非業の死」と見なすからである。わたしたちはここでもまた、自己言及的な論理構造を見いだすことができる。

たとえば山崎方代や丸山定夫の死を——「非業の死」として——人々が悼むのは、弔いの一つのかたちである。残念ながら山崎方代の方代忌は、文学忌（文学者の忌日）として十分に認知されていない。しかし太宰治の

桜桃忌や三島由紀夫の憂国忌であれば、だれもが知っている。同様に8月6日に、固有名詞として丸山定夫のことを思い出す人々は少ない。しかし広島原爆犠牲者の慰霊は、今日でもさまざまなかたちで行われている。なぜ人々は、「非業の死」を遂げた者たちの弔いへと突き動かされるのか。つまりは肉親でも何でもない、まさに縁もゆかりもない人物の弔いへと駆り立てられるのか。わたしにはそれは、宗教社会学が取り組むべき課題の一つであるように思われる。そのアリアドネの糸（解決の糸口）は案外、「社会」という概念そのもののなかに潜んでいるかもしれない。というのもわたしたちは、まさに縁もゆかりもない人々との間で「社会」をかたちづくるからである。

「社会 (society)」は本来、「仲間」に由来する言葉である。たとえば（社員数が十万人を超えるような）大会社において、社員の全員が相互に顔見知りであることは想定しがたい。実際にはそこでは、社員は日々出たり入ったりして入れ替わっている。それでもかれらは、「自分たちは仲間である」とのコミュニティ意識をもっている。社会学的にはそこに、「会社 (company)」という名の社会の存在を確認しうる。「国民 (nation)」が一つの社会であるのも、基本的にはこれ同じである。たとえば日本の北端の人々と南端の人々が、日常的にコミュニケーションをとっているとは想定しにくい。それでもかれらが、「自分たちは仲間である」とのコミュニティ意識をもちうるのはなぜか。端的に言えばそれは、かれが共通の言語をもち、貨幣を使い、法律に従い、宰相を戴き、放送を聞いているからである。アメリカの政治学者 B. アンダーソンはこれを、「想像のコミュニティ」と呼んだ。

何も「国民」だけが、「想像のコミュニティ」であるわけではない。むしろそれは、社会の一般的な属性と見なければならない。社会はまさに、目に見えず (invisible)、声も聞こえず (inaudible)、手の届かない (unreachable) 存在である。にもかかわらず「社会」が存立しうるのは、人々が——想像力によって——「仲間」の存在を想定しているからである。つまりは社会とは、「仲間」を「仲間」として信奉するシステムである。それ

は宗教が、「神」を「神」として信奉するシステムであることと対応している。そのような着想の下にデュルケームは、「神、それは社会である」という命題を提示している。厳密に言えばデュルケームは、そう明示的に語ってはいない。しかし実質的には、それとほとんど同じことを述べている。ここでは社会システムと宗教システムの類同性を指摘した上で、次のことを確認しておきたい。社会はそれ自体、「想像のコミュニティ」として存立している。

「非業の死」の追悼に話を戻せばそこでは、死者を中心に「弔いのコミュニティ」が構築されている。この場合追悼者が、元々死者と面識があったかどうかは問題ではない。死者と縁があるかどうかは、あくまでも追悼者自身の判断に委ねられているからである。「非業の死」は多くの人々にとって、容易に納得しえないものである。そして多くの人々が納得できないほど、「弔いのコミュニティ」は大規模になる傾向がある。ユダヤ系社会学者のバウマンは『コミュニティ』で、偶像(idols)の周囲に観客(あるいはファン)のコミュニティが形成されることに着目する。その際バウマンは、(ダイアナ妃の「非業の死」を念頭において)早世した偶像が生み出す「弔いのコミュニティ」についても書いている。そのコミュニティが一過的・利他的なものにすぎないことを指摘した上でバウマンは、冷笑的にこう言う。忘却からもう一度死者を呼び戻すかどうかは、観客次第である。

生のリスク

ギリシア神話によればアンティゴネは、テバイ王オイディプスとオイディプスの母にして妻でもあるイオカステの娘である(オイディプスが母と結ばれることになった経緯については、ここでは省略する)。その後オイディプスは、摂政クレオン——イオカステの弟にしてアンティゴネの叔父——によって追放される。オイディプスの跡目をめぐってエテオクレスとポリュネイケス——ともにオイディプスの息子にしてアンティゴネの兄弟——

の間で争いが起き、クレオンはエテオクレスの側につく。エテオクレスとポリュネイセスが一騎打ちの末にともに亡くなったところから、アンティゴネの物語は始まる。すなわちクレオンは、二人のうちエテオクレスの遺骸は丁重に葬る。しかしポリュネイセスの遺骸については、その埋葬を禁じ、野ざらしにする。ポリュネイセスの妹であるアンティゴネは、このクレオンの禁令を犯す。すなわちかの女は、兄の遺骸に土を振りかけ、埋葬の代わりにする。

たちまちかの女は、見張りに捕えられ、クレオンの前に引き出される。かの女はクレオンに、こう言う。わたしは「人間の法」ではなく、「神々の掟」に従っただけである。そこには法令との対比において、人間の倫理の何であるかが鮮明に表現されている。つまりは自分の肉親が亡くなった場合、その遺骸を丁重に葬ることは遺族の責務であるとかの女は説く。このような倫理のことをとりあえず、弔いの倫理と呼ぶことにしよう。アンティゴネの物語ではそれは、家族関係の倫理として表現されている。しかし実際には、弔いの倫理は家族関係の範囲を超える可能性をもっている。たとえば会津戦争ののち、新政府軍（官軍）は会津藩（賊軍）の戦死者の遺骸の埋葬を禁じ、野ざらしにしたとの伝説がある。最近見つかった史料では、必ずしもそれが真実とも言えないらしい。その上で人々が、このような——アンティゴネの物語の日本版とも言うべき——伝説を語り継いできたことは興味深い。

明らかにそこでは、弔いの倫理が家族関係の範囲を超えて働いている。というよりも「非業の死」が人々の間で問題になるとき、家族関係の制約はほとんど意味をもたない。すなわち人々は、「非業の死」を遂げた者たちを——かれらが家族のメンバーであろうとなかろうと——懇ろに弔わなければならないと思う。そしてそこに、「弔いのコミュニティ」が生まれる。社会学的に見ればそれが、まさに「非業の死」の存立機制である。いったいなぜ、「非業の死」が多くの人々の心を突き動かすのか。究極的にはそれは、次のことを人々が自覚しているからであろう。「自分も遅かれ早か

れ死を運命づけられている」。その意味では「弔いのコミュニティ」とは、ともに「死を運命づけられた」者たちのコミュニティである。この場合「非業の死」を遂げた者たちを粗略に扱うことは、倫理的に許されない。というのもそれは、自らも死に際して他者から粗略に扱われることを意味するからである。

わたしたちの社会は今日、グローバル化＝個人化の一途を辿っている。個人化（individualization）は最近の社会学の用語で、これまで個人を包摂してきたローカルな集団——家族、地域、職場など——が解体し、個人がばらばらに全体社会を構成するようになる傾向をさす。グローバル化のなかでは国家もまた、一つのローカルな集団に転落する。かくして人々は、きわめて不安定にして無秩序な状態におかれてきているというのが最近の社会学の所見である。そこでは当然、人心は荒れ、倫理も廃れる。というのもローカルな集団こそが、ここで言う人心や倫理の基盤をかたちづけてきたからである。ここでは話を、葬儀に絞ろう。葬儀が年々簡素化していることは、だれの目にも明らかである。今日では家族葬（近親者だけの葬儀）が、葬儀の標準的な形態になりつつある。それどころか葬儀を行わず、火葬だけで済ませること（直葬と呼ばれる）も、そう珍しい話ではなくなってきた。

「非業の死」は今日、わたしたち自身の運命であるのかもしれない。ドイツの社会学者U. ベックは30年以上も前に、わたしたちが日常的に生リスクにさらされていることを指摘した（『リスク社会』）。ベックの言う生リスクは、死のリスクと言い換えても大差がない。ベックはそこで、こう説く。わたしたちは今日、生リスクに個人的に対応しなければならない。そこには生リスクが、社会のグローバル化＝個人化の副産物であることが端的に示されている。さて今回のコロナ禍は、いまだに総括的評価を行いうる段階に達していない。しかし現状において、わたしたちがそれから得た一つの教訓があるように思われる。わたしたちは生リスクに、集団的にしか対応できないことがそれである。経済学的に見れば「非業の

死」を悼むことは、一円の価値も生み出しはしない。しかしそれは、社会が——社会として——存立していく上でなくてはならない役割を果たしているのである。

コロナ禍の下で鎌倉近辺の御霊神社を訪ねるうちに、気になったことがある。主だった御霊神社の鳥居の近辺に、タブ（楠）の木が植わっていることである。タブの木には靈魂が宿る（「タブ」は「タマ（魂）」から来ている）ということが、しばしば指摘される。もちろんそれは、デュルケームの言う集団表象にすぎない。つまりは人々の間で、そのような信仰が受け継がれてきただけの話である。それにしても人々が、それらのタブの木を「聖なるもの」として崇敬してきたことは間違いない。おそらく人々は、そこに鎌倉権五郎の「御霊」が宿るとでも信じていたのであろう。——鎌倉権五郎が歌舞伎の『暫』の主人公の役名として固定するのは、明治以降であるという。かれはそこで、悪霊を追い払う役割を見事に演じている。かつて鎌倉周辺の人々が、かれに期待した役割もそれと同じであろう。残念ながらいま、御霊神社のタブの木が人々から崇敬されているとは必ずしも見えなかった。

参考文献（映像資料を含む）

- 田澤拓也『無用の達人 山崎方代』角川書店、2003年
特別展「山崎方代の歌」図録、鎌倉文学館、2014年
菅井幸雄『俳優・丸山定夫の世界』未来社、1989年
江津萩枝『鎌倉妙隆寺にある丸山定夫之碑の由来と碑の会の歩み』自費出版、1991年
江見水蔭『日本勇者物語』アルス、1928年
「牛久の昔話」編集委員会『伝承口碑 鎌倉権五郎景政』牛久市立図書館、1992年
柳田國男『一目小僧その他』角川書店（角川ソフィア文庫）、2013年
奥井智之『宗教社会学』東京大学出版会、2021年
W.I. Thomas and D.S. Thomas, *The Child in America: Behavior Problems and*

Programs, Knopf, 1928.

- R. K. マートン（森東吾ほか訳）『社会理論と社会構造』みすず書房、1961 年
- M. エリアーデ（堀一郎訳）『永遠回帰の神話』未来社、1964 年
- 新藤兼人監督『さくら隊散る』近代映画協会・五百羅漢寺、1988 年
- E. デュルケーム（山崎亮訳）『宗教生活の基本形態』上・下、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2014 年
- B. アンダーソン（白石隆・白石さや訳）『定本 想像の共同体』書籍工房早山、2007 年
- Z. バウマン（奥井智之訳）『コミュニティ』筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2017 年
- ソボクレス（福田恆存訳）『オイディプス王・アンティゴネ』新潮社（新潮文庫）、1984 年
- U. ベック（東廉・伊藤美登里訳）『危険社会』法政大学出版局、1998 年
- 山形健介『タブノキ』法政大学出版局、2014 年

許可求め表現の使い分け

——「シテモイイ」と「サセテモラッテモイイ」の違いに注目して——

小 竹 直 子

Proper Use of Japanese Expressions Requesting Permission

—— Focusing on the Differences between “Shite-moi” and “Sasete-Moratte-moi” ——

Naoko Kotake

Abstract

This paper focuses on the phrase “sasete-moratte-moi-desuka? (Would you mind if I do it?)”, which is a politer expression for requesting permission than the phrase “shite-moi-desuka? (May I do it?)”. Previous studies have shown that the former expression was used to emphasize that the speaker would benefit from the addressee’s permission. However, it is not always clear what kind of permission the expression will be used for, making it difficult for non-native speakers to use it properly. Therefore, a questionnaire survey was conducted to clarify how native speakers of Japanese used these two expressions properly depending on the requirements of the situation. The survey results revealed that the more the speaker thought it would be difficult to get permission, the more the expression “sasete-moratte-moi-desuka?” was used.

In addition, a similar survey conducted with Japanese non-native learners of Japanese made it clear that they did not use different expressions depending on the kind of permission needed, as native Japanese speakers did.

1 はじめに

非日本語母語話者が許可¹⁾を求めようとする場面で、「させていただく」ではなく、「していただく」を使ってしまう誤りが見られる。

(1) 【休暇を1日とる場面】

非母語話者：どうか。あのう、1日だけ、休んでいただけませんか
しょうか。

母語話者：あ、それは張さんが休みが欲しいってことよね。

非母語話者：あー、はい。そうですね。

母語話者：あー、わかったわかった。

(蒙・中井 2020、p.116 一部改変、²⁾下線は筆者による)

蒙・中井(2020)は、中国人社員と日本人上司(実際には上司役を演じた劇団員)とのロールプレイにおける問題点を指摘しているため、ここでの非母語話者は中国語を母語とする人ということになる。王(2016)では、中国語を母語とする日本語学習者が、使役形を使うべきところで使えないという「(サ)セルの欠如」のパターンが使役文の誤用の中で最も多いと指摘されており、その原因として母語の影響や使役主体と動作主体の働きかけ関係をうまく把握できないことなどを挙げている。本稿の主眼は、このような誤用の原因と学習者の母語との関わりよりも、そもそも許可求めにおいて「(サ)セ」の使用が必須である場合はどんな場合かという点にある。というのも、同じように上司に許可をもらう場面でも、(2)のような場合には、「(サ)セ」を使わなくても、十分日本語として自然に感じられるからである。

(2) 部下：企画書の修正の件ですが、一つ質問してもよろしいですか？

上司：ああ、いいよ。何？

もちろん「質問させていただきませんか」と言っても、文法的に誤りであるとまでは言えないが、部下が上司に質問することの日常性から考えると、過度に丁寧な言い方のように感じられる。

では(1)の誤用は、「(サ)セルの欠如」ではなく、「ていただけませんか」と「てもよろしいですか」の混同と捉えるべきだろうか。否、そうとも言えない。(1)の非母語話者の発話を「1日だけ休んでもよろしいですか?」に置き換えてみると、意味は伝わるものの、休暇をとる許可を求めるという用件の重大性に鑑みて、やや乱暴な、あるいは唐突な表現に感じられる。やはり「(サ)セテモラウ」を使うべき場面であると言えるだろう。ただし、日本語学習者にとっての問題点は、「(サ)セテモラウ」を使った許可求め表現がうまく使えないことだけでなく、許可求め場面において、そもそもどんな場合に「(サ)セテモラウ」を使い、どんな場合に「テモイイ」を使うのが明らかでないことにもあるのではないかというのが本稿の問題提起である。

本稿にとって重要な示唆を与える研究がある。すなわち、迫田・蘇・張(2017a, 2017b)では、「今、週三日働いていますが、二日にしたいです。いいですか?」のような表現が中国人日本語学習者に多く見られると指摘されている。日本語でこのような「いいですか?」の使い方は、聞き手との関係によっては相手に不快感を与える恐れがある表現であるが、中国語では依頼の表現の終結部でよく使われるのだという。

本稿が注目したい点は、「二日アルバイトをしたいです。よろしいですか?」のような許可の求め方が、他の言語・文化では失礼にあたらない場合でも、日本語では失礼な印象を与えてしまう場合があるという事実である。そうであれば、「～してもいいですか」がどのような場面で失礼になるのか、そして、どのような場面で「～させていただいてもよろしいですか」などの「(サ)セ」を伴う表現を使うべきなのかという判断は、異なる文化的背景を持った学習者にとって難しいのではないかと推察される。

以上のような問題意識から、本稿では「シテモイイカ」と「サセテモラッテモイイカ」が許可求め場面でどのように使い分けられているのかを明らかにすることを目的としたい。

2 許可求め表現に関わりを持つ先行研究と残された問題

本稿は、「シテモイイカ」と「サセテモラッテモイイカ」がどちらも許可求め場面で使われ得ることを前提として、その使い分けを明らかにしようとしている。本来は、この二つの表現がどのような場面でどのように使われるかという実践的な問題について議論する前に、この二つの表現の共通点・相違点に関する理論的研究の蓄積に言及すべきところであるが、これらの表現を取り巻く問題は、「使役」、「依頼と許可求め」「～してもらってもいいか」による行為要求、待遇表現としての「～させていただく」など、多岐に渡り、それぞれに膨大な研究の積み重ねがある。本稿では、日本語教育への応用を目指して、できるだけ具体的な検討に多くの紙幅を使いたいと考え、ここでは許可求め表現の選択に直接関わる要素について指摘する研究と、場面別の使い分け実態を調査する方法に関する研究に絞って概観し、本研究の研究課題と研究方法を明らかにしていく。

2-1 許可求め表現の丁寧度を決定する要素

蒲谷・川口・坂本（1993）では、日本語教育への応用の観点から、ある言語行為が遂行される時に、そのための具体的表現がどのような要素を考慮してどのように決定されるかを客観的に示す必要性を唱え、「依頼」を例にその表現の生成方略を提案している。具体的には、「相手」と「用件」の二つの要素を設定し、レベル化して、その二つの要素レベルの組み合わせによって、どのような手段・表現で「依頼」が遂行されるかを記述している。蒲谷・川口・坂本（1998）では、「許可求め表現」にも言及されているが、残念ながら「シテモイイカ」と「サセテモラッテモイイカ」の使い分けについての記述はない。ただ「させていただいてもよろしいですか」は「してもよろしいですか」に比べて丁寧な許可求め表現であると述べるに留まっている。また、「いいですか」「よろしいですか」「よろしいでしょうか」などの敬語の程度については「用件レベル」とは直接関係がないと結論づけている³⁾。しかし本稿では、この点について、「シテモイ

イカ」と「サセテモラッテモイイカ」の使い分けを記述する際には「用件レベル」との関わりを再考すべきだと考える。その理由は後で述べるが、いずれにしても「相手レベル」と「用件レベル」という二つの観点は本稿にとって大変重要な示唆を与えるものである。

蒲谷(2007)では、「サセテモラッテモイイデスカ」について、「シテ」と同じことをわざわざ「サセテモラッテ」にすることで、「利益・恩恵」を自分が受けることを強調しようとする表現だと捉え、「許可求め強化型表現」と呼んでいる。蒲谷(2007)は、「利益・恩恵」のありかが自分にあるという点が「強化」されていると考え、それによって「丁寧さ」が生まれると述べている。確かに「シテモラッテモイイデスカ」も「サセテモラッテモイイデスカ」もどちらも疑問文である以上、相手に許可を下す決定権があることを意図した表現であることには変わりない。加えて蒲谷(2007)では、「シテモラッテモイイデスカ」という形式が「シテモラエマスカ」などと同様に依頼表現として機能する原理を説明することに主眼を置くため、相手の行動によって自分が恩恵を受けるという構造を成すことでより丁寧な表現になるという点が重要な意味を持つ⁴⁾。しかし、同じ許可求め表現を比較する場合には、「シテ」ではなく「サセテモラッテ」を使うことで自分の行動を決定する権利が相手にあることを強化していると捉えることがより重要性を持つのではないだろうか。何らかの行動をする際に、より相手にお伺いを立てる必要性を感じる用件と、そうでない用件によって、「シテ」と「サセテモラッテ」が使い分けられているとも考えられるからである。もちろん、恩恵性も強化されていると言えるが、決定権の強さも強化されていると捉えるべきではないかというのが本稿の見方である。

以上の先行研究では、許可求めにおける表現の丁寧さがどのような要素によって決定しているかを具体的に示している点で本稿の提起する問題に大いに示唆を与える。そして、「シテモイイカ」と「サセテモラッテモイイカ」が単に丁寧度の違いによって使い分けられているというだけでなく、

どのような用件で許可を求める際に「サセテモラッテモイイカ」が用いられるのかという観点からも使い分けを説明できる可能性を示している。ただし、日本語教育へ応用するためには、「相手レベル」と「用件レベル」を操作した場面を設定し、日本語母語話者がどちらの表現を選ぶかを検証してみる必要がある。次にその調査の手法について具体的に示している先行研究の中から本稿の問題への応用可能性を検討する。

2-2 場面別の使用表現調査

辻岡（2020）では、依頼場面における許可求め表現「シテモラッテモイイデスカ」の許容度を6つの場面ごとに調査し、許容度が高い場面と低い場面を比較することで、日本語母語話者がどのような要素を意識して「シテモラッテモイイデスカ」を使用するのかを明らかにしている。場面ごとの表現の使用傾向を見るという調査手法は、本稿が扱う問題にとっても有効だと考えられるが、辻岡（2020）では、依頼場面に使用される可能性のある表現全体を広く捉えようとしていることから、6つの場面における条件の操作が厳密ではない。辻岡（2020）自身が認めているところだが、「上下関係」「役割関係」「人間関係の継続性」の3つの基準を設けているものの、すべての組み合わせを検証することはできていない。一方、辻岡（2019）では、場面は2種類に限られているものの、相手の負担度の大きい依頼場面と負担度の小さい依頼場面での表現の選択傾向の違いを調べている。そして、モラウ系許可求め類、すなわち「～てもらってもいいですか」「～いただいてもいいですか」などの表現が相手にとって負担の大きい依頼をする際によく用いられることを明らかにしている。ただ、負担度が大きい小さいかの2場面を比較した結果であるため、どの程度相手にとって負担が大きければ許可求め表現を使うのかを検証するには至っていない。本稿が注目する「シテモイイカ」と「サセテモラッテモイイカ」に丁寧度の差があることは、既に2-1で述べたように、先行研究で明らかにされている。また、用件の内容が関わっていることもここまで概観して

きた先行研究から示唆される。そこで本稿では、同じ相手でも「用件レベル」の程度によって「シテ」と「サセテモラッテ」が使い分けられることを検証し、日本語教育への応用の観点から、具体的にどのような場面で「サセテモラッテ」が使われるのかを明らかにしたい。

3 許可求め場面における表現の使い分け調査の概要

本調査の目的は、許可求め場面で「シテモイイカ」と「サセテモラッテモイイカ」がどのように使い分けられるのかを明らかにすることである。具体的には、蒲谷・川口・坂本（1993）を参考に「相手レベル」と「用件レベル」を操作した許可求め場面を設定し、それぞれの場面で日本語母語話者が「シテモイイカ」と「サセテモラッテモイイカ」のどちらを選びやすいかを調査する。また、同時に同じ場面での非母語話者の回答傾向と比較するため、外国人留学生にも同様の調査を行う。具体的な調査方法や回答の選択肢の作成は、辻岡（2020, p.545）の調査方法を参考にした。「調査協力者」「調査時期」「調査方法」「要因設定」「回答選択肢」は以下のとおりである。

(1) 調査協力者：

調査 1) 亜細亜大学の同じ学部・学科に所属する大学学部 3 年生
46 名⁵⁾

性別：男性 8 名、女性 38 名

年齢：20 歳 19 名、21 歳 21 名、22 歳 6 名

調査 2) 亜細亜大学に所属する留学生別科生から学部 4 年生までの 28 名

性別：男性 7 名、女性 21 名

年齢：19 歳 1 名、20 歳 7 名、21 歳 9 名、22 歳 4 名、23 歳 1 名、24 歳 6 名

日本語レベル：日本語能力試験 N1 合格者 5 名、N2 合格

者 21 名、N3 合格者 2 名

国籍：ベトナム 16 名、中国 5 名、マレーシア 3 名、タイ
3 名、フィリピン 1 名

(2) 調査時期：2021 年 8 月 1 日—8 月 16 日

(3) 調査方法：

Google Forms を利用したオンラインでの「質問紙調査」で、「この調査は人に何かをお願いする場面で使う依頼表現の選択肢のうち、あなたならどの表現を使うかを答えてもらうものです。正解はありませんので、あなたがその場面で誰かに何かをお願いする場合、どの表現を最も使いそうだと思うか、一つ選んでください。どの選択肢も使いそうにないと思ったら、『いずれも使用しない』を選んでください」と指示した。なお、「シテ」と「(サ) セテ」の違いをなるべく意識させないように、ダミーの依頼場面を 8 つ含めた。その上で、ターゲット場面とダミー場面をランダム化して各 13 場面を含む 2 種類の調査フォームを作成し、調査協力者を二つのグループに分けて、回答してもらった。ターゲット場面とダミー場面は(4)で示す。

(4) 要因設定：

「相手レベル」として丁寧度を要求される相手かどうかの 2 段階を設け、それぞれに「用件レベル」として許可を求める際、当然許可が得られると見込まれる用件からなかなか許可が得られにくいと想定される用件まで、「用件の当然性の高さ⁶⁾」によって 8—0 の 9 段階を設定し、ターゲット場面を作成した。なお、具体的な用件のレベルの高低は、筆者自身で判断した。

〈丁寧度要求度 高レベル：先生〉

用件レベル 8：講義が終わって、教室を出る許可

用件レベル 7：教室のエアコンの温度を上げる許可

用件レベル 6：授業中、質問する許可

用件レベル5：授業中トイレに行く許可

用件レベル4：授業の後で先生の研究室に相談に行く許可

用件レベル3：就活のために授業を早退する許可

用件レベル2：先生との個人面談の日を自分の都合で変更する許可

用件レベル1：私用で先生の携帯電話を使う許可

用件レベル0：先生のご自宅におじゃまする許可

〈丁寧度要求度 低レベル：親しい友人〉

用件レベル8：相手の消しゴムを使う許可

用件レベル7：相手の講義ノートをコピーする許可

用件レベル6：週末の予定について後でLINEする許可

用件レベル5：相手を待たせてトイレに行く許可

用件レベル4：相手との約束を直前でキャンセルする許可

用件レベル3：グループワークの課題を分担する際、簡単な方を自分が担当する許可

用件レベル2：一人暮らしの友達の家で飲み会をする許可

用件レベル1：一人暮らしの友達の家に一晩泊まる許可

用件レベル0：一人暮らしの友達の家で2週間泊まる許可

以上の各9場面をターゲット場面とした。ダミー場面は蒲谷・川口・坂本（1993）の依頼場面の例を参考に以下の8つを作成した。

ダミー場面1：ゼミの先生に対して論文の添削を頼む場面

ダミー場面2：荷物で手がふさがっているため、エレベーターで初対面の目上の人に階数ボタンを押してもらうように頼む場面

ダミー場面3：電車の中で初対面の目上の人に対して席をつめて座るよう頼む場面

ダミー場面4：飲食店で注文したデザートがいつまで待っても出てこないため、持ってくるよう頼む場面

ダミー場面 5：インターネットで購入した DVD が破損していたため、電話で商品の交換を頼む場面

ダミー場面 6：コンビニで自分のエコバックに商品を入れるよう頼む場面

ダミー場面 7：コンビニで宅急便の送り状を書くとき、店員にペンを貸すよう頼む場面

ダミー場面 8：駅員に電車の忘れ物を探すよう頼む場面

(5) 回答選択肢：

ターゲット場面の回答の選択肢は以下のとおりである。相手が先生、すなわち丁寧度が要求される相手の場合は、「テモイイカ」「サセテモラッテモイイカ」それぞれに「いい／よろしい」「ですか／でしょうか」「もらって／いただいて」という丁寧度の高い待遇形式があるため、「いずれも使用しない」を含めた 6 つの選択肢が用意できるが、相手が親しい友人の場合は、それらの待遇形式が選ばれる可能性が考えにくいいため、「(サ)セ」を伴う様々な依頼・要求形式を選択肢に含めた。本調査では、「イイカ」で終わる許可求め型の表現を調査対象とするが、「シテ」ではなく「(サ)セ」を使う時点で相手に決定権があることを意識しているとも捉えられるため、許可求め型と分けて、「その他サセ」として集計する。

〈相手が先生の場合〉

- a. ～でもいいですか
- b. ～でもよろしいですか
- c. ～(さ)せてもらってもいいですか
- d. ～(さ)せていただいてもいいですか
- e. ～(さ)せていただいてもよろしいですか
- f. いずれも使用しない

〈相手が親しい友人の場合〉

- a. ～(さ)せて

- b. ～でもいい？
- c. ～（さ）せてもらってもいい？
- d. ～（さ）せてもらえない？
- e. ～（さ）せてくれる？
- f. いずれも使用しない

結果の分析を行う際には、用件レベル 8—6 を高、5—3 を中程度、2—0 を低として、回答傾向を比較する。

4 調査結果のまとめと考察

ここでは相手レベル別に日本人大学生と留学生の結果を示し、それらの結果からわかることを述べていく。そして、最後に結果を総合して、「シテモイイカ」と「サセテモラッテモイイカ」の使い分けについての本稿の考察を述べる。

表 1 相手レベル高条件の日本人大学生の結果

用件 レベル	8	7	6	5	4	3	2	1	0
サセテ	5 (21.7%)	5 (21.7%)	3 (13.0%)	4 (17.4%)	8 (34.8%)	20 (87.0%)	19 (82.6%)	17 (73.9%)	16 (69.6%)
シテ	13 (56.5%)	17 (73.9%)	20 (87.0%)	17 (73.9%)	10 (43.5%)	2 (8.7%)	1 (4.3%)	0 (0.0%)	6 (26.1%)
いずれ も使用 しない	5 (21.7%)	1 (4.3%)	0 (0.0%)	2 (8.7%)	5 (21.7%)	1 (4.3%)	3 (13.0%)	6 (26.1%)	1 (4.3%)

表 2 相手レベル高条件の外国人留学生の結果

用件 レベル	8	7	6	5	4	3	2	1	0
サセテ	8 (72.7%)	8 (47.1%)	4 (36.4%)	6 (54.5%)	11 (64.7%)	10 (90.9%)	9 (81.8%)	17 (100%)	10 (90.9%)
シテ	4 (36.4%)	8 (47.1%)	7 (63.6%)	5 (45.5%)	6 (35.3%)	1 (9.1%)	2 (18.2%)	0 (0.0%)	1 (9.1%)
いずれ も使用 しない	0 (0.0%)	1 (5.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
回答 総数	11	17	11	11	17	11	11	17	11

まず、相手レベルが高い場合、すなわち学生にとっての先生のように丁寧度が要求される相手の場合について、日本人大学生の結果を表1に、外国人留学生の結果を表2に示す。本調査の目的から、「いい」と「よろしい」などの待遇形式の違いは考慮せず、「サセテ」を伴う表現か、「シテ」を伴う表現かで回答数を分類している。

今回、3の(3)で述べたように調査フォームを2つに分けたため、一人の調査協力者がすべてのターゲット場面について回答したわけではない。日本人大学生の場合は、各調査フォームに同数(23名)の協力者が回答してくれたため、回答の総数が同じであるが、外国人留学生の場合は調査フォームによって協力者に差が出てしまった。そのため、回答数の総数が場面によって異なるため、それぞれの回答の全体における割合を比較することとする。

日本人大学生の結果を見ると、明らかに用件レベルが高い方から低い方へかけて、「サセテ」の選択割合が高くなる傾向が見られる。すなわち、相手の許可が当然得られると見込まれるような当然性の高い許可求めの場合は、「サセテモラッテモイイカ」よりも「シテモラッテモイイカ」が多く選ばれ、用件の当然性が低く、許可が得にくいと考えられる許可求めでは、「シテモイイカ」よりも「サセテモラッテモイイカ」が多く選ばれるという傾向が見られる。外国人留学生の場合も、おおそ同様の傾向が見られるのだが、用件レベルの度合いによる差は日本人学生よりも少ない。総じて、日本人学生よりも外国人留学生の方が「サセテモラッテモイイカ」の選択割合が高い。

以下の表3は、用件レベルを「低い」「中程度」「高い」の3段階で分けた時の日本人学生と外国人留学生の「サセテ」の平均使用率を表にしたものである。

表 3 平均サセテ使用率（相手レベル高条件）

	日本人学生	外国人留学生
用件レベル低い	75.3%	92.3%
用件レベル中程度	46.4%	69.2%
用件レベル高い	18.8%	51.2%

表 3 を見ると、相手が先生の場合は用件レベルによらず、日本人大学生よりも外国人留学生のほうが明らかに「サセテ」を伴う表現をより多く選んでいることがわかる。

次に、相手レベルが低い場合、すなわち丁寧度が要求されにくい親しい友人が相手の場合の結果に移る。表 4 に日本人大学生の結果を、表 5 に外国人留学生の結果を示す。

表 4 相手レベル低条件の日本人大学生の結果

用件 レベル	8	7	6	5	4	3	2	1	0
許可求 めサセ	5 (21.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	14 (60.9%)	9 (39.1%)	7 (30.4%)	1 (4.3%)	1 (4.3%)	7 (30.4%)
その他 サセ	3 (13.0%)	1 (4.3%)	11 (4.3%)	6 (26.1%)	5 (21.8%)	2 (8.7%)	9 (39.1%)	8 (34.8%)	12 (52.2%)
シテ	13 (56.5%)	14 (60.9%)	21 (91.3%)	3 (13.0%)	9 (39.1%)	13 (56.5%)	8 (34.8%)	13 (56.5%)	4 (17.4%)
いずれ も使用 しない	2 (8.7%)	8 (34.8%)	1 (4.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (4.3%)	5 (21.8%)	1 (4.3%)	0 (0.0%)

表5 相手レベル低条件の外国人留学生の結果

用件 レベル	8	7	6	5	4	3	2	1	0
許可求 め型 サセ	5 (29.4%)	1 (9.1%)	0 (0.0%)	2 (18.2%)	1 (9.1%)	3 (17.6%)	4 (23.5%)	2 (18.2%)	8 (47.1%)
その他 サセ	3 (17.6%)	2 (18.2%)	6 (35.3%)	3 (27.3%)	4 (36.4%)	8 (47.1%)	5 (29.4%)	4 (36.4%)	7 (41.2%)
シテ	7 (41.2%)	8 (72.7%)	7 (41.2%)	6 (54.5%)	6 (54.5%)	6 (35.3%)	7 (41.2%)	4 (36.4%)	2 (11.8%)
いずれ も使用 しない	2 (11.8%)	0 (0.0%)	4 (23.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (5.9%)	1 (9.1%)	0 (0.0%)
回答 総数	17	11	17	11	11	17	17	11	17

表6 平均サセ使用率（相手レベル低条件）

	日本人学生	外国人留学生
用件レベル低い	55.1%	66.7%
用件レベル中程度	62.3%	53.8%
用件レベル高い	11.6%	37.8%

日本人大学生の結果を見ると、相手レベルが低い場合は相手レベルが高い場合に比べて、場面による違いが大きく、用件の当然性が低くなるにつれて「許可求め型サセ」の使用割合が増加するという傾向はそれほどはっきりとしていない。ただ、用件レベル「低い」「中程度」「高い」の3段階で分けて、「その他サセ」を含めた「サセ」の使用割合を見ると、表6に示すとおり、用件の当然性が高い場面では「サセ」の使用割合が低いという傾向が見られる。外国人留学生も同じ傾向ではあるが、相手レベルが高い場合の結果と同様に、やはり日本人大学生よりも外国人留学生の方が用件の当然性が高い場合でも「サセ」を多く選ぶ傾向が見られる。

以上の結果から、用件レベルが「シテモイイカ」と「サセテモラッテモイイカ」の使い分けに影響を与えることは間違いないと言えるだろう。そして、特に丁寧度が要求される相手の場合には、許可が得られにくいと予

想される用件ほど「サセテモラッテモイイカ」がよく使用され、当然許可が得られると見込まれるような些細な用件ほど「シテモイイカ」がよく使用されるということがわかった。

日本語母語話者だけでなく非母語話者の外国人留学生においても基本的には同じ傾向が見られた。このことは今回の調査が選択式の回答形式だったことが影響していると考えられる。実際の産出場面では、「～させていだいてもよろしいでしょうか」と言うべきところを、「～してもらってもよろしいでしょうか」と言い間違ってしまうという誤用が起きるが、「サセテモラッテ」を使うことでより相手に配慮した丁寧度の高い表現になることは、今回の調査協力者ぐらゐの日本語レベル（日本語能力試験N2以上合格者が92.9%）がある人は十分に認識していると考えられる。

しかし特筆すべき点は、今回の調査から日本人大学生よりも外国人留学生のほうが、相手レベル低条件・用件レベル中程度の場合を除いて、総じて「サセテモラッテモイイカ」の使用割合が高かったこととである。特に先生に対しては、どのような用件でも5割以上の留学生が「サセテモラッテ」を使用していた。日本人大学生は用件の当然性が高い場面では2割弱しか「サセテモラッテ」を使用していないことから見ると、外国人留学生は日本人大学生に比べて「用件レベル」の影響を受けにくいと言える。すなわち、目上の人である先生に対してはより丁寧な表現である「サセテモラッテ」を使おうとする意識が高く、用件によって「シテ」と「サセテモラッテ」を使い分ける傾向は日本語母語話者ほど顕著ではないことがわかる。

また、相手が親しい友人の場合には、日本人大学生も外国人留学生も用件の当然性が低い場合と中程度で「サセテモラッテ」の使用率にはっきりした差が見られなかった。この原因について本稿の調査結果だけで確定的なことは言えないが、まずは用件の当然性の捉え方が20代の大学生と筆者ではズレがあった可能性は否定できない。たとえば、「友達の話義ノートをコピーさせてもらおう」という用件は、大学生にとっては筆者の予想以上に相手に遠慮すべき用件であり、「一人暮らしの友人の家に一晚泊まら

せてもらう」という用件は筆者の予想以上に気軽な用件であった可能性がある。これを明らかにするためには、別途用件レベルを測定してみる必要がある。ぜひ今後追調査を行いたい。また別の可能性としては、友人に対してはそもそも許可を求める行為を行わない場面が含まれていた可能性もある。「友人の家で飲み会をやる」という場面では、「やってもいい?」といった許可求めではなく、「やろうよ!」という提案型の表現を用いるというコメントも協力者の回答の中に見られた。学生が授業中トイレに行く許可を先生に求めるといった場面のよう、許可を与える側、与えられる側という役割が明確に認識されない場面が、親しい友人が相手の場合には多かったのかもしれない。以上のことは、今後の研究によって明らかにしていきたい。

5 まとめと日本語教育への示唆

本稿では、日本語教育への応用の観点から、「シテモイイカ」と「サセテモラッテモイイカ」が単に相手との上下関係や親疎関係で使い分けられるというだけでなく、許可を求めようとする用件の内容によって使い分けられる可能性を検討した。日本人大学生に対するアンケート調査によって、当然許可してもらえると期待できるような用件、たとえば「授業中に質問する許可を求める」用件では、「シテモイイカ」が使われやすいのに対して、許可が得にくいと思われるような用件、たとえば、「先生との個人面談の日程を自己都合で変更する許可を求める」といった用件では、「サセテモラッテモイイカ」が使われやすいという使い分け実態があることが明らかとなった。

また、同じ調査を外国人留学生にした場合にも基本的には同様の傾向が見られたが、用件の当然性による「サセテモラッテ」の使用率の差は日本人大学生のそれよりも小さかった。すなわち、外国人留学生の方が日本人大学生よりも、「サセテモラッテモイイカ」を用件の当然性によらず広く使っており、「シテモイイカ」の使用範囲が狭いことが示唆された。この

ことは、日本語教育において「サセテモラッテモイイカ」が丁寧な表現であることが強調されて教えられる一方で、「シテモイイカ」との使い分けが十分に教えられていないことの影響であると考えられる。相手が目上の場合でも、授業中質問したり、トイレに行ったりする場合のように用件が当然認められるべき行為であれば、日本語母語話者は「シテモイイカ」を使って許可を求める。もちろん「サセテモラッテモイイカ」を使ってもコミュニケーション上支障はないが、変に丁寧すぎる表現になることはもっと教えられても良いのではないだろうか。逆に、許可が得られにくい用件の場合に「シテモイイカ」を使って相手への配慮が欠ける印象を与えるとこの傾向は、今回の調査協力者においては見られなかった。むしろ日本語母語話者よりも外国人留学生の方が丁寧な表現を使う傾向が見られた。このことは一種の過剰適応と見られ、日本語で何か許可を求める際には相手に配慮した表現を使わなければならないという意識が日本語母語話者よりも強いのではないかと考えられる。

許可求め表現における「シテ」と「サセテ」の使い分けに用件の当然性の程度が関わっていることを明確にしたという意味で、本稿は日本語文法理論の構築にとって一定の貢献ができたと言える。しかし一方で日本語教育への貢献は限定的である。非母語話者が「サセテモラッテモイイカ」を使うべき場面で「シテモラッテモイイカ」を使ってしまう誤用は、丁寧な表現を使うべき時に使えないといった意味理解における問題ではなく、相手に対して配慮する表現手段を知っているにもかかわらず、実際には使えないという問題であることが本稿によって明らかとなった。このことは、消極的な意味ではあるが、本稿の貢献と言えるだろう。しかしでは、非母語話者は「サセテモラッテモイイカ」をなぜうまく使えないのか、どのように教えれば「シテモイイカ」を使ってしまう誤用を防げるのか、という大きな問題が残ることになる。本稿は、「サセテモラッテモイイカ」を「シテモイイカ」と比較することによって、前者がより相手に配慮すべき用件で使われることを明らかにしたが、非母語話者に対して「サセテモラッテ

モイイカ」を「シテモイイカ」と対比させて教えることで、上述のような誤用の防止に効果的な教育となるのかは明らかではない。効果的な教育方法の提言のためには、今後のさらなる研究を必要とする。

注

- 1) ここで「日本語学習者」という用語を使わず、「非日本語母語話者」と呼ぶのは、日本語を使って日本企業で働いているような日本語習熟度の人を「日本語学習者」と呼ぶのは失礼に感じられることと、現在も学習中であるかどうかを不問にするという二つの理由からである。後に、「日本語学習者」という用語を使う際は、本稿で扱っているような文法の問題を学ぼうとする人を想定している。
- 2) 蒙・中井（2020、p.116）の原文では「どうか。あのう、1日だけ、ど、休んでいただけませんか。」となっていたが、読みやすさのために「1日だけ、ど」を「1日だけ」に改変した。
- 3) 蒲谷・川口・坂本（1993）では、「相手レベル」と「用件レベル」が加算されて、依頼行為における「丁寧さ」が決まるとされているが、その「丁寧さ」は具体的な個々の表現ではなく、談話の流れ、すなわち「切り出し」があって、「相手の反応の確認」をし、「依頼」に進むといった展開のパターンを決めると考えられている。そして、具体的な個々の表現の丁寧度は基本的に相手レベルによって決まると述べられている（p.59）。蒲谷・川口・坂本（1998）でも、「用件レベル自体は『敬語』の程度とは直接関係がありません（p.139）」と述べられている。ここでの「敬語」とは動作の主体や動作に関係する人物を高めたり、高めなかったりする「敬語的性質」を持ったものと定義されている。
- 4) 蒲谷（2007）で最も丁寧な構造とは〈「行動」＝「自分」、
「決定権」＝「相手」、
「利益・恩恵」＝「自分」〉であり、許可求め表現はこの構造をとる。そして、依頼表現の構造は「行動」＝「相手」である点だけ許可求め表現と異なっているのだが、「シテモラエマスカ」という形式を使うことによって、「行動」が「自分」（自分がしてもらうこと）に切り替えられると蒲谷（2007）では考えている。つまり、その行動を自分がしてもらう、すなわちその行動によって自分が恩恵を受けると捉え直した表現は「行動」＝「自分」という構造をとるために丁寧な表現になるという原理を蒲谷（2007）は提唱している。その原理に従えば、「サセテモラッテモイイデスカ」は、自分の行動である「スル」を相手の行動である「サセル」にし、さらに「サセテモラッテ」にすることで、「行動」＝「自分」、
「利益・恩恵」＝「自分」という構造を強調して

いるということになる。

- 5) 辻岡 (2020) では出身地別の人数を示しているが、文化庁 (2008) の調査結果から許可求め表現の使用に目立った地域差はないと辻岡 (2019) で結論付けているため、本稿では割愛した。
- 6) 蒲谷・川口・坂本 (1993) では「用件の当然性の高さ」という用語は使っておらず、「用件レベル」を [-1] [0] [+1] [+2] の4段階に設定しているが、本稿では、用件レベルをできるだけ細かく、且つ具体的に設定するため、「当然性の高さ」の値として8~0の9段階を設定した。

参考文献

- 王辰寧 (2016) 「中国語を母語とする日本語学習者の使役文の誤用分析——作文コーパスをデータとして——」『熊本大学社会文化研究』第14号, pp.77-91.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1993) 「依頼表現方略の分析と記述——待遇表現教育への応用に向けて——」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』第5号, pp.52-69.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』大修館書店.
- 蒲谷宏 (2007) 『『丁寧さ』の原理に基づく『許可求め型表現』に関する考察』『国語学研究と資料』第30号, pp.37-46.
- 迫田久美子・蘇鷹・張佩霞 (2017a) 「中国人日本語学習者の『念押し』表現に見る母語の影響：I-JASのロールプレイにおける依頼表現に基づいて」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』第2巻, pp.212-215.
- 迫田久美子・蘇鷹・張佩霞 (2017b) 「中国語母語話者のロールプレイに見られる依頼表現——日本語学習者の『念押し』表現への言語転移可能性——」『日中言語研究と日本語教育』第10号, pp.50-63.
- 辻岡咲子 (2019) 「依頼場面における許可求め表現の使用の実態」『國文學』第103巻, pp.468-455.
- 辻岡咲子 (2020) 「疎の関係の人物に使用される依頼場面での許可求め表現に関する調査」『國文學』第104巻, pp.548-534.
- 文化庁 (2008) 「平成19年度国語に関する世論調査の結果について」https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/h19/
- 蒙韞・中井陽子 (2020) 「中国人社員と日本人上司による許可求めのロールプレイ会話の分析：会話参加者の行動と意識から探る外国人材育成のヒント」『国立国語研究所論集』第19号, pp.109-126.

スペイン語の再音節化についての パイロットスタディ

高 澤 美由紀

Resyllabifications in Spanish

— A Pilot Study —

Miyuki Takasawa

Abstract

In this paper, as a pilot experiment, the author analyzes the spoken features of text read aloud by a native speaker of Spanish, and examines the sound environment and frequency of synaloepha/syneresis that causes resyllabification, which is inferred to affect the rhythm of Spanish. As a result, syneresis was not observed, but synaloepha was very likely to occur, and a tendency was observed to occur more easily with a combination of non-stressed words and stressed words. Furthermore, the author deduces that synaloepha affects the syllable-timed rhythm, which is the rhythm of the Spanish language.

1. 序

スペイン語と日本語は両言語ともに5母音からなり、開音節言語であり、さらにリズムの観点から見てもスペイン語は音節拍リズム (syllable-timed rhythm¹⁾、日本語はその下位範疇であるモーラ拍リズム (mora-timed rhythm²⁾) に分類されるため、日本人スペイン語学習者にとってスペイン語の発音は馴染みやすいと考えられる傾向があり、第2外国語としてスペイン語を学習する際、発音指導に重きを置く例はあまり見られないのが現状である。中島さやか等(2011)では、「日本の教科書では、発音を教科

書の最初のみで扱うため、単語レベルでの練習が大半で、音のつながり (un hombre は「ウン オンブレ」ではなく、「ウノンブレ」のように発音する³⁾、など) を意識的に練習する問題がない。また、強勢語と無強勢語の区別に触れている教科書もほとんどなく、多くの日本人学生にとって苦手な l と r の区別と巻き舌に特化した練習問題や、イントネーションの練習問題も非常に少ない⁴⁾と言及されている。

一方で、Civit (2019) では、日本語母語話者へのスペイン語音声教育において、単語間の繋がりを意識させ、日本語の発話において生起することのない再音節化の現象を留意させることが必要である等、ネイティブ教員の視点による日本人スペイン語学習者の問題点が挙げられている。さらに、Hara (1990) においては、日本語母語話者がスペイン語を発音する際に、無強勢語、例えば、mi や nuestro などの所有形容詞前置形や接続詞 que などに強勢を置く傾向があるという韻律的な問題点が指摘されている。

つまり、日本人スペイン語学習者にとって、馴染みのない個々の音の発音やアクセント規則を学んだ上で、単語と単語の繋がりを意識すること⁵⁾は、音節拍リズムであるスペイン語のリズムの習得にとって必要なことであると考えられる。さらに、高澤 (2020) では、スペイン語の歌を分析することにより、スペイン語のリズムと日本語のリズムが異なる 1 番大きな要因は、母音融合であることが示唆された。この母音融合には、母音で終わる語に母音で始まる語が後続するときにその 2 つの母音が融合して同一音節の一部となる語間母音融合 (synaloepha)、そして、語の内部において、規範に従えば母音分立 (hiatus) を形成するはずの 2 つの母音が二重母音になり、同一音節の一部となる語内母音融合 (syneresis) の 2 つがあり、これらの現象も再音節化を引き起こすものである。また、スペイン語の口語ではこの語内母音融合 (母音縮約) が頻繁に生起することが山田 (1995 : 8) で指摘されている。これらの現象は、発話速度や発話スタイルによって生起することがあるとされ、Navarro Tomás (1996 : 66-72, 150-169) においては個々の単語内や単語間におけるこれらの現象の詳細な記述が見られる

が、実際にネイティブ教員のテキストの朗読においてどの程度の頻度で生起するかなどの研究はこれまであまり見られない。

以上のことを踏まえ、本稿では、パイロット実験として、スペイン語母語話者教員1名の朗読音声进行分析し、スペイン語のリズムに影響を及ぼすと推論される再音節化の中でも、特に母音融合が生起する音声環境と生起頻度、そしてそれがスペイン語のリズムに与える影響について観察する。

2. 手順

2.1 音声資料

音声資料として、2014年に東京都内の大学のスタジオにおいて、イベリア半島出身のスペイン語母語話者教員（当時30代男性1名）にスペインの Peralt Montagut Ediciones の絵本シリーズの1冊である『赤ずきんちゃん』（*LA CAPERUCITA ROJA*）を標準的な速度で朗読してもらい、PCMレコーダー（ローランド社製 R-26）とステレオマイクロホン（オーディオテクニカ社製 AT9943）を使用して録音した。録音した音声59発話⁶⁾から、中立的発話を分析対象とするため、感情を込めて発話された会話部分に相当する発話を除いた計29発話を抽出した。

2.2 分析方法

2.1で抽出した29発話について、音声分析ソフト Praat (version 6.1.52) を用い、音声波形、スペクトログラム、fo 曲線を表示することにより、再音節化された音節を含む、発話においてひと続きに発音される単位である音調群 (phonic group)⁷⁾ 全体に含まれる音節数と持続時間、再音節化された音節の持続時間を測定した。2つ以上の母音連続が母音分立としてそれぞれ別々の音節に属するのか、母音融合により同一音節に属するのかについての判断は、Quilis (1988: 181) や RAE and ASALE (2011: 336-337) に倣い、スペクトログラムの目視によって行った。Quilis および RAE and ASALE によると、二重母音においては、第一要素の母音から第二要

素の母音へゆっくりと段階的に移行し、例えば第一要素が狭母音、第二要素が広母音となる上昇二重母音では、第一要素の定常部の持続時間が短いに対し、母音分立においては、第二要素母音への移行が急であり、連続する母音のそれぞれの定常部の持続時間は二重母音と比較して長い。また、2つの連続する母音の音の強さを比較した場合、母音分立においてよりも二重母音において同程度に示されるという言及に基づいて行った。

3. 結果と考察

3.1 再音節化を引き起こす4種の音環境

再音節化は、語内母音融合や語間母音融合が生起する場合、子音で終わる語に母音で始まる語が後続する場合、そして語末の子音と同一の子音で始まる語が後続する場合の4つに分類される。表1は、2.1で準備した音声資料である29発話について、再音節化を引き起こした音声現象の生起数をまとめたものである。

まず、今回の資料の中で語内母音融合が生起しうる音環境は、以下の3つの音調群内のイタリックで示した部分であるが、実際には母音分立として生起したことが観察された。

101 le hab**ía** confeccionado

154 al **oír** el alboroto

159 volver**ía** a hablar con un lobo

上記101の音調群のスペクトログラムを示した図1において、母音分立として○で囲んだ部分を観察すると、[i]と[a]のどちらの母音もともに定常部が長く、音の強さも同程度であり、2.2で母音分立の音響的特徴として挙げた特徴に一致し、['Bi]と[a]という音節に分けることができる。上記の音調群101と159の太字のイタリック体にした母音連鎖は、本来弱母音であるiにアクセント符号を付すことにより強母音化されることを示し、母音分立となるが、Navarro Tomás (1996: 164)は、íaという母音連鎖に関して、発話速度が速く、くだけた話し方の場合、さらに、文の中では

とんど強調されない位置に生起する場合には語内母音融合で発音されることがあると言及している。今回用いた資料は朗読音声であり、極端にくだけた発話スタイルではないので、母音分立として生起したのは当然の結果と考えられる。さらに、今回用いた資料に含まれる語には、reencuentro などのように、encuentro という母音で始まる語に母音で終わる接頭辞 re- がついたような語が含まれなかったことも語内母音融合のケースが生起しなかった原因であると考えられる。

次に、語間母音融合が生起しうる音環境は 51 ケースあり、その内の 94 %にあたる 48 ケースで実際に生起した。語間母音融合が生起しなかった 3 つの音調群は以下のとおりである。

103 hizo **u**nos deliciosos pasteles

140 Cuando Caperucita **e**ntro

153 Y dicho **e**sto

これらの音調群において、太字のイタリック体で示した母音連鎖は、3 つのケース全てにおいて、強勢語の語末と強勢語の語頭に位置するものである。さらに、103 と 153 の語頭の音節にはアクセントがあり、スペクトログラムを観察した場合、それぞれの音調群において、母音連鎖を示す 2 つの母音は、定常部が長く、音の強さに差が見られる。一方で、表 1 に示した語間母音融合を生起した音調群において、母音連鎖が強勢語の語末と強勢語の語頭に生起するケースは 48 ケース中 10 ケース、21%に過ぎず、これら 10 ケースの内、その母音自体にアクセントがあるケースは以下の 4 ケースである。

110 dónde **e**ba

101 Erase **u**na vez

131 respondi**ó** **u**na voz extraña y ronca

154 pasaba por allí **u**n cazador

音調群 110 と 101 の太字のイタリック体にした母音連鎖は、後続語の語頭にのみアクセントのあるケースであり、131 と 154 の太字のイタリック体

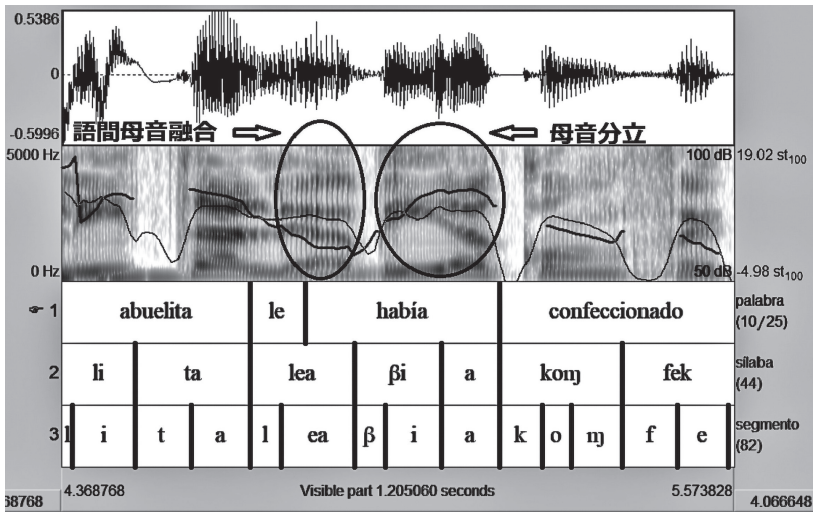


図1 語間母音融合と母音分立の例

にした母音連鎖は、先行語の末尾と後続語の語頭両方にアクセントがあるケースである。この内、アクセントのある母音は110では /i/、101では /u/ であり、131では /o/ と /u/、154では /i/ と /u/ である。つまり、全て狭母音、もしくは半狭母音の場合であった。それゆえ、二重母音のように発音されやすい音環境であると推測できる。その他の母音融合が生じた環境は、強勢語 + 無強勢語と無強勢語 + 強勢語の組み合わせが33ケース、無強勢語 + 無強勢語は4ケース、強勢語 + 無強勢語 + 強勢語は1ケースとなり、生じた語間母音融合のそれぞれ69%と8%、2%を占める。この結果は、語と語を繋げて発音する際に、無強勢語と強勢語をグループ化していくので、当然の結果と考えられる。

また、子音で終わる語に母音で始まる語が後続した場合は1つの音調群の中においては、必ず再音節化が生じた。これは、スペイン語が開音節言語であり、日本語ほどではないが、開音節化傾向を持つために生じる音声現象である。同様に、los sábadosのように、子音 /s/ で終わる語に同じ /s/ で始まる語が後続した場合、/s/ は1つの子音のように発音される

表 1 再音節化を引き起こした音声現象の種類
(強勢音節の母音にアクセント符号を付している)

語内母音融合		語間母音融合		語末子音+語頭母音		語末子音+語頭子音	
文字列	生起数	文字列	生起数	文字列	生起数	文字列	生起数
		aa	11	lo	1	ll	14
		aaha	1	ne	2		
		a(h)e	2	un	1		
		ay	1	ra	1		
		(h)ea	5	lal	1		
		ee	3	las	1		
		ei	1	nár	1		
		eú	1	nher	1		
		eu	1	nun	1		
		ye	1	re	1		
		íoe	2	rel	3		
		íou	1	sár	1		
		iu	1	zex	1		
		oa	3				
		óa	5				
		oe	4				
		óe	3				
		ua	2				
計	0		48		16		14

ことが中級の文法書である上田（2011：45）でも言及されているが、今回使用した音声資料では、el lobo という 2 つの語の繋がりにおいて、/l/ が 1 つの子音として発音されるケースのみであった。

3.2 再音節化された音節の持続時間

表 2 から表 4 は、母音融合、語末子音+語頭母音、および語末子音+語頭子音（同一子音）によって再音節化された対象音節の持続時間を 1) 再音節化される前の音調群に含まれる 1 音節の平均持続時間、2) 再音節化された後の音調群に含まれる 1 音節の平均持続時間と、それぞれ比較したものである。それぞれの表の数字において、再音節化前よりも再音節化後

表2 母音融合によって再音節化された音節の持続時間 (msec)

文節号	音文字	音文字全体	再音節化前の音節数	再音節化後の音節数	再音節化後の1音節の平均	再音節化後の1音節の平均 - 対象音節	再音節化後の1音節の平均 - 対象音節
127	a la anciana a buelta	1292	163	9	144	185	-19
129	toda contenta a la puerta	1779	119	9	198	222	-79
142	vio rara a su abuelita	1505	148	9	167	215	19
120	fue directamente a la casa de la a buelta	2502	125	16	156	179	31
122	dijo la a buelta	1124	167	7	161	167	-6
126	dijo la a buelta	1042	146	7	149	174	3
127	a la anciana abuelta	1292	266	9	144	185	-122
155	salí la a buelta	1271	151	7	182	212	31
158	La a buelta	759	193	5	152	190	-41
158	para a compañía: el té	1169	136	8	146	167	10
109	pensé en comerse a Caperucita R a la a ll mismo	3223	263	18	179	215	-84
159	volver a a hablar con un lobo	2031	281	11	185	226	-96
101	una h e r m o s a capa roja	1604	275	9	178	201	-97
109	porque cer ca e s t a b a n a n	1093	317	5	219	273	-98
131	respondió una voz extraña y r o n c a	2730	263	12	228	273	-36
120	fue directamente a la casa de la abuelita	2502	150	16	156	179	6
101	le h a b i a confeccionado	1459	189	9	162	182	-27
142	En cuanto Caperucita Roja se a c e r c o a la cama	2881	180	18	160	180	-20
153	el lobo se a b a l a n z o	1380	201	8	173	197	-29
109	pensó en comerse a Caperucita Roja a l l i m s m o	3223	217	18	179	215	-38
108	se e n c o n t r ó	1108	472	4	277	369	-195
140	el lobo se a c e n d i c ó	1470	318	7	210	245	-108
119	entreteniendo se e n recoger castañas	2514	251	13	193	210	-58
110	dónde h a	869	264	4	217	290	-47
101	Era se u n a vez	1056	228	6	176	211	-52
108	bajo la sombra d e u n gran árbol	2165	335	10	217	241	-119
118	Y e l lobo se marchó	1347	153	7	192	225	39

118	Y el lobo se marchó	1347	153	7	6	192	225	39	72
128	y se metió en su cama	1408	340	8	7	176	201	-164	-139
146	le respondió el lobo	1474	234	7	6	211	246	-23	17
131	respondió una voz extraña y ronca	2730	244	12	10	228	273	-17	29
154	pasaba por allí un cazador	1651	305	10	9	165	183	-140	-122
107	saltando alegremente	1478	155	8	7	185	211	30	56
104	dijo a Caperucita Roja	1474	207	10	9	147	164	-60	-43
155	y lo abrió por la mitad	1269	219	8	7	159	181	-60	-38
120	y llamó a la puerta	1205	279	7	6	172	201	-107	-78
142	En cuanto Caperucita Roja se acercó a la cama	2881	224	18	16	160	180	-64	-44
154	y salvó a Caperucita de las fauces del lobo	2868	276	16	15	179	191	-97	-85
155	El cazador mató al lobo	1582	259	9	8	176	198	-83	-61
157	se llevó a casa la piel del lobo	2517	310	13	12	194	210	-116	-100
127	En cuanto el lobo entró	1496	277	8	6	187	249	-90	-28
118	corriendo entre los árboles del bosque	2419	228	12	11	202	220	-26	-8
139	dijo el lobo	918	264	5	4	184	230	-80	-35
127	En cuanto el lobo entró	1496	176	8	6	187	249	11	73
109	pensó en comerse a Caperucita Roja allí mismo	3223	446	18	15	179	215	-267	-231
114	le preguntó el lobo	1270	189	7	6	181	212	-8	23
121	corrió el lobo con voz	1919	231	8	7	240	274	9	43
142	vio rara a su abuelita	1505	206	9	7	167	215	-39	9
101	a quién su abuelita	1129	258	7	6	161	188	-97	-70

表3 語末子音＋語頭母音によって再音節化された音節の持続時間 (msec)

文番号	音節群	音節群全体	対象音節	再音節化前の音節数	再音節化後の音節数	再音節化前の1音節の平均	再音節化後の1音節の平均	再音節化後の1音節の平均－対象音節
154	<i>af</i> oir el alboroto	1234	208	8	8	154	-54	-54
102	con <i>ella</i>	517	179	3	3	172	-7	-7
108	con <i>el</i> lobo	876	165	4	4	219	54	54
101	con <i>una</i> caperuza	1189	189	7	7	170	-19	-19
154	pasaba por <i>alli</i> un cazador	1651	90	10	9	183	75	93
154	al oir <i>el</i> alboroto	1234	214	8	8	154	-60	-60
120	<i>El</i> astuto lobo	1067	281	6	6	178	-103	-103
108	bajo la sombra de un <i>gran</i> árbol	2165	271	10	9	217	-55	-30
102	Estaba <i>tan</i> hermosa	1277	231	7	7	182	-49	-49
153	con <i>intención</i> de comer <i>sela</i>	1967	260	9	9	219	-41	-41
159	volvería a hablar con <i>un</i> lobo	2031	200	11	9	185	-15	26
154	al oir <i>el</i> alboroto	1234	119	4	4	309	190	190
107	por <i>el</i> bosque	766	184	8	8	96	-88	-88
158	para acompañar <i>el</i> té	1169	211	8	7	146	-55	-44
159	cuando caminará por <i>el</i> bosque	1645	183	10	10	165	-19	-19
118	corriendo entre <i>los</i> árboles del bosque	2419	234	12	11	202	-32	-14
131	respondió una voz <i>extraña</i> y rónica	2730	323	12	10	228	-96	-50

表 4 語末子音 + 語頭子音 (同一子音) によって再音節化された音節の持続時間 (msec)

文番号	音調群	音調群全体	対象音節	再音節化前の音節数	再音節化後の音節数	再音節化前の1音節の平均	再音節化後の1音節の平均	再音節化前の1音節の平均 - 対象音節	再音節化後の1音節の平均 - 対象音節
108	con <i>e//fobo</i>	876	344	4	4	219	219	-125	-125
109	<i>E//fobo</i>	593	348	3	3	198	198	-150	-150
114	<i>ie preguntó e//fobo</i>	1270	319	7	6	181	212	-138	-107
116	<i>E//fobo</i>	576	321	3	3	192	192	-129	-129
118	<i>Y e//fobo se marchó</i>	1347	321	7	6	192	225	-129	-97
124	<i>contestó e//fobo con voz</i>	1919	347	8	7	240	274	-107	-73
127	<i>En cuanto e//fobo entró</i>	1496	260	8	6	187	249	-73	-11
139	<i>dijo e//fobo</i>	918	282	5	4	184	230	-98	-53
140	<i>e//fobo se escondió</i>	1470	352	7	6	210	245	-142	-107
146	<i>ie respondió e//fobo</i>	1474	270	7	6	211	246	-59	-24
153	<i>e//fobo se abalanzó</i>	1380	405	8	7	173	197	-233	-208
154	<i>y salvó a Capercuica de las fauces de//fobo</i>	2868	307	16	15	179	191	-128	-116
155	<i>El cazador mató a//fobo</i>	1582	279	9	8	176	198	-103	-81
157	<i>se llevó a casa la fina piel de//fobo</i>	2517	273	13	12	194	210	-79	-63

に対象の音節の持続時間との差の絶対値が減少したものを太字イタリック体で示している。ただし、再音節化によって音調群の音節数が変化するのは、音節核音 (syllabic nucleus) であった複数の母音が母音融合によって縮約された語間母音融合の場合のみである。尚、表2の文番号は、母音融合の母音連続のタイプ順であり、表3の文番号は、再音節化後の音節タイプ順である。

まず、表2の語間母音融合の場合を見ると、48 ケース中 32 ケース、つまり、67%で再音節化によって1音節の平均持続時間に近づく結果となっている。1音節の平均持続時間に表2の一番上の文番号127から126までの6ケースと、155、158の2ケース、計8ケースの/a/と/a/が連鎖したタイプでは持続時間の差が大きくなる結果となっている。その他の持続時間の差が大きくなったケースは、文番号101の *una hermosa capa roja* という音調群においては、/a/と/e/という母音連続に再音節化によって、/n/と/r/という2つの子音が前後にくる子音+母音+子音という3つの音連鎖になったことが原因と推測される。

また、表3の語末子音+語頭母音によって再音節化された音節の場合は、母音融合のように母音の縮約が生起するわけではないので、原則として再音節化前後で音節数に変化はなく、つまり、1音節の平均持続時間が変化することはない。例えば、文番号154の音調群は語間母音融合を含まず、再音節化前は *alo.ír.el.al.bo.ro.to*、再音節化後は *alo.í.re.lal.bo.ro.to* という音節にそれぞれ分けて計測しているが、音節数に変化はない。しかしながら、文番号⁸⁾154、108、159、158、118、131の音調群には、語間母音融合が含まれるため、音節数が減少したために差が生じている。同様に、表4の *el lobo* という語の繋がりも、母音に影響は及ぼさないゆえに、語間母音融合を含まない文番号108、109、116以外で1音節の平均持続時間に変化が生じる結果となっている。

4. まとめと今後の課題

今回のパイロット実験では、3.1 で示したように、語内母音融合が生じられる音環境は3つの音調群に含まれていたが、実際に語内母音融合を観察することはできなかった。音声資料が朗読音声であり、中立的発話を分析対象とするために会話部分を削除したので、Navarro Tomás (1996 : 164) で言及されたようになかった発話スタイルの音声資料がなかったことが1つの要因であると考えられる。また、3.1 で述べたように、接頭辞 re- + 母音の reabrir, reedición, reordenación などの単語が含まれなかったことも要因と考えられる。一方で、同一子音連鎖については、innato などの他の同一子音連鎖についても、もっと観察する必要があると考えられる。

しかしながら、今回のパイロット実験では、語間母音融合は94%の生起率を示したことから、特にくだけた発話スタイルや早い速度での発話でなくとも、非常に生じやすい現象と考えられる。また、母音融合により、各音節の持続時間が調整され、スペイン語が音節拍リズムとされる要因を担っているのではないかと推論される結果となった。

本実験では、音声資料がスペイン語母語話者1人によるものであるため、個人的特徴に過ぎない可能性も皆無ではない。また、限られたパターンの語間母音融合のみの観察になったことと、どのような環境で生じやすいかという傾向については、無強勢語と強勢語の組み合わせにおいて生じやすいというのみの観察となったため、今後は、被験者を増やすとともに、様々な音連鎖の組み合わせについて観察していくこと、そして、日本人母語話者にとって馴染みのない語間母音融合がスペイン語のリズムに影響を与えているのであれば、スペイン語の音声教育において、どのように取り入れていくべきか検討するのも今後の課題である。

謝 辞

本研究は、文部省科学研究費補助金・基礎研究 (c) (一般)「日本人スペイン語学習者の韻律に見られる諸問題と音楽を利用した発音指導」(課

題番号 19K00865) を受けてなされたものの一部である。

研究の様々な段階で貴重なコメントを下さった木村琢也先生に心より感謝申し上げます。

注

- 1) Abercrombie (1967) によれば、言語のリズムには各音節が等時的に繰り返される音節拍リズムと強勢音節が等時間的に繰り返される強勢拍リズムの2種類がある。強勢拍リズムの言語には、英語やドイツ語が属する。
- 2) Beckman (1992) は、音節拍リズムの下位範疇である、モーラが等時的に繰り返されるモーラ拍リズムに日本語を分類している。1モーラは、短母音1つ、もしくは子音+短母音によって構成され、スペイン語の1音節に相当するが、撥音や促音、および長音や二重母音の後半部分など、スペイン語では音節の一部を構成する要素が日本語では1モーラとして独立した単位となる。
- 3) 寺崎 (2017: 74) において「同じ音群を構成する語と語は、語の内部の音節構造と同じ規則に従って前の語の尾部と次の語の頭部が同音節的な結合として発音されることがある。」と定義されるように、これは再音節化についての言及である。また、木村 (2015: 7) では、この現象について再音節区分 (resilabificación) という語を用い、「再音節区分が連続して起きると、日本人にとって発音・聴き取りが難しいケースが出現する。」と言及している。
- 4) 初学者を対象とした『響く音！スペイン語』(木村, 2019) は、音声教育に特化されたものではないが、スペイン語の正しいリズムを反映した歌によって学習者がスペイン語のリズムに親しめるように構成された、筆者が調べた限り、国内では唯一の初学者用のテキストである。
- 5) 上田 (2011: 45) では、語の連続の発音に関して、語尾の子音と同じ子音が語頭に生起する場合、1つの子音のように発音されることが指摘されている。
- 6) 今回の音声資料である録音した59発話に、101から159までの番号を割り当てた。本稿の「文番号」は、それぞれの発話に割り当てたこの番号に相当する。
- 7) RAE and ASALE (2011: 423) によれば、スペイン語において、音調群は8音節から構成されることが一般的であるとされる。本研究では、音調群を認定するためにfo曲線を参考にした。
- 8) 上記154と同じ文番号であるが、同じ文に含まれる別の音調群 pasaba por allí un cazador を示す。

参考資料

- Abercrombie, David (1967) *Elements of General Phonetics*. London: Oxford University Press.
- Beckman, Mary (1992) "Evidence for Speech Rhythms across Languages", *Speech Perception, Production and Linguistic Structure*, eds. By Yos'ichi Tohkura, Eric Vatikiotis-Bateson and Yoshinori Sagisaka, pp.457-463. Tokyo: Ohmsha.
- Civit Contra, Roger (2019) "Del Fonema a la Frase: Resilabificación en la Clase de Español Elemental", *Kwansei Gakuin University Humanities Review* 23, pp.205-223.
- Hara, Makoto (1990) "Método de enseñanza de la pronunciación española a los alumnos japoneses", *Actas del segundo congreso nacional de ASELE*, pp.371-379.
- 木村琢也 (2015) 「第1章 音声学・音韻論」高垣敏博監修『スペイン語学概論』pp.1-14, 東京：くろしお出版.
- 木村琢也 (2019) 『響く音！スペイン語』東京：朝日出版社.
- 中島さやか, 落合佐枝, 菅原昭江, 大森洋子 (2011) 「日本の大学における初級スペイン語教育のための教科書評価の枠組み（試案）と『Entre amigos』のコース：コミュニケーション能力獲得を目指した授業で」『カルチュラル』（明治学院大学教養教育センター紀要）, 5(1), pp.183-200.
- Navarro Tomás, Tomás (1996) *Manual de pronunciación española*, 26^a ed. Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- Quilis, Antonio (1988) *Fonética Acústica de la lengua española*, Madrid: Editorial Gredos.
- Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2011) *Nueva gramática de la lengua española. Fonética y fonología*, Barcelona: Espasa Libros, S.L.U.
- 寺崎英樹 (2017) 『発音・文字』東京：大学書林.
- 上田博人 (2011) 『スペイン語文法ハンドブック』東京：研究社.
- 山田善郎監修 (1995) 『中級スペイン文法』東京：白水社.

アンドレス・ベリョ
『カステイーリャ語文法』 日本語訳 (5)

土 屋 亮

Translation in Japanese of Andrés Bello's
Gramática de la lengua castellana: Part 5

Ryo Tsuchiya

Abstract

This is the fifth article in a multi-paper series in which the author translates select chapters and paragraphs of the *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos* (Grammar of the Castilian language for the Americans' use) written, originally in Spanish, by Andrés Bello (1781–1865), the Venezuelan humanist, into Japanese with notes. With regard to the philological importance of this work, please see the abstract of the fourth article of the series, published in Vol. 37, 2020 of this journal, and for the former three articles, please refer to the journal *Iberia*. For its details, please access: <https://id.ndl.go.jp/bib/000009188991>.

In this fifth article, the scope of the translation and analysis begins with the 122nd Paragraph of 'Chapter 5: Number of Nouns' and ends with 'Chapter 9: Apocope of Nouns'. The author translates the target text into Japanese and provides annotations and other notes for further exploration and discussion.

序

訳者は、1847年に世に出たアンドレス・ベリョ（Andrés Bello 1781–1865）の *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los ameri-*

canos (『アメリカ大陸の人々の使用に向けたカスティーリャ語文法』、以下『カスティーリャ語文法』)を日本語に訳出する作業を続けているが、本稿はその第5稿である。この第5稿では、原著の「第5章：名詞の数」の121節から「第9章：名詞の語尾脱落」までを訳出する。なお、我々が用いている『カスティーリャ語文法』の版の情報に関しては、本稿の註1を参照されたい。¹⁾また、本文中において、原文がやや分かりにくいと思われるときは、鉤括弧〔 〕に含まれる語句を、訳者の判断で補う。

[第5章：名詞の数]

122. 呼称名詞の中でも、次のようなものは元来複数形を欠く。*fisiología*(生理学)、*carpintería*(大工業)、*abogacía*(弁護士業)のように科学や芸術、職業を表すもの、*magnanimidad*(寛大)、*envidia*(嫉妬)、*cólera*(憤怒)、*horror*(恐怖)のように、美德や悪癖、特別な感情を表すもの、*juventud*(青年期)、*mocedad*(青年期)、*vejez*(老年期)のように人生における年齢・年代を表すものである。しかし、これらの語も意味が変われば複数形になりうる。たとえば、「不注意な行動」を指して *imprudencias* (*imprudencia*「不注意」複数形)と言い、「怒りの衝動」を指して *iras* (*ira*「怒り」複数形)と言う。また、「虚栄心が膨らみ満たされる事物」を指して *vanidades* (*vanidad*「虚栄」複数形)と言い、「恐怖心をもたらすもの」を *horrores* (*horror*「恐怖」複数形)と、「英雄シッドが青年時代になした偉業」を指して *las mocedades del Cid* (*mocedad*「青年期」複数形)と、凝った言い回しや表現のことを指して *metafísicas* (*metafísica*「形而上学」複数形)と言うのである。

123. 実在物を表す呼称名詞は、真の個物、すなわち、*árbol*(木)や *mesa*(机)のように分割するとそれでなくなってしまうものを意味する場合と、*agua*(水)や *vino*(ワイン)、*oro*(金)や *plata*(銀)のように、その特性

と名を常時保ったまま、無限に分割できるものを意味する場合とがある。前者の呼称名詞はほぼ常に複数形を有するが、後者は、様々な種や特質、その由来を示す場合にのみ複数形を有する。この意味において、*España produce excelentes vinos*（スペインでは上質なワインが作られる）や *en Inglaterra se fabrican buenos paños, las sederías de China*.（イングランドでは良質の布、つまり絹織物が織られる）とすることができる。また、これと同様に、いくつかの鉱山から取れる産物、市場に出回るこの品を指し示すために、*los azogues*（水銀）、*las platas*（銀）、*los cobres*（銅）とすることができる。それにもかかわらず、意味を変えないまま複数形を許容する、分割可能なもの²⁾を表す呼称名詞が多く存在する。それゆえ、*los aires de la Cordillera*（山脈の風）や *las aguas del Tajo*（タホ川の流れ）のように言うのである。

124. 形態を変えぬままカスティーリャ語に根付いたラテン語の名詞や句は、たとえば *exequátur*（領事認可状）、*veto*（拒否権）、*fiat*（同意）、*déficit*（欠損）、*álbum*（白板）のように複数形を欠いている³⁾。しかしながら、*avemarías*（アベマリアの言葉）、*gloriapatris*（グロリア）、*misereres*（ミゼレーレで始まる詩編）などのように「複数形で」言うのである。

125. *los Alpes*（アルプス山脈）、*los Andes*（アンデス山脈）のような山脈を表すもの、そして、*las Baleares*（バレアレス諸島）、*las Cíclades*（キクラデス諸島）、*las Azores*（アゾレス諸島）、*las Antillas*（アンティーリヤス諸島）のような諸島を表すいくつかの名詞は単数形を欠く。しかしながら、カスティーリャの詩人の中に「単数の」*el Alpe* を使用している例は見つかる。

126. 意味上の相違もないまま、*el Pirineo* や *los Pirineos*（ピレネー山脈）と言い、*la Alpujarra* または *las Alpujarras*（アルプハラ地区）⁴⁾と言う。ア

ルガルベという地名は、単数 *el Algarbe*、複数 *los Algarbes* でもよく、[アストゥリアスという地名を主語にするときの *ser* の活用は] *Asturias es* でも *las Asturias son* でもよい。地名の複数における用法の恣意的なものをすべて列挙すれば、かなり長くなるであろう。

127. また、単数を欠いている呼称名詞も存在する。最も顕著なものは以下の語である。

Aborígenes (原住民)

Adentros (内心)

Afines (同類)

Afuera (郊外)

Albricias (祝儀)

Alrededores (近郊)

Anales (年代記)

Andaderas (歩行器)、*creederas* (容易に信じること)、これ以外に動詞から派生し *-dera* で終わる語で、その動詞の動作や、それをなすための道具を意味するもの。

Andas (神輿)

Andurriales (田舎)

Angarillas (担架に似た運搬具)

Añicos (破片)

Aproches (攻撃準備)、*contraaproches* (対抗塹壕)

Arras (結納金)

Bienes (財産・遺産)

Calendas (1日)、*nonas* (7日⁵⁾)、*idus* (15日⁶⁾)

Calzas (タイツ)

Carnestolendas (謝肉祭)

Cercas (絵画の前景)、*lejos* (絵画の遠景)

- Comicios* (選挙)
Cortes (cuerpo legislativo) (裁判所)
Creces (成長の現れ)
Credenciales (信任状)
Dimisorias (受品許可状)
Efemérides (過去の同一日に起きた出来事の一覧)
Enaguas (ベチコート)
Enseres (家財道具)
Expensas o espensas (訴訟費用)
Esponsales (婚約)
Esposas (手錠)
Exequias (葬儀)
Fasces (束桿 [そっかん⁷⁾)
Fauces (咽喉)
Gafas (眼鏡)
Grillos (鉄の足枷)
Hemorroides (痔核)
Honras (葬儀)
Horas (聖務日課)
Ínfulas (自負)
Lares (家)
Largas (延期)
Letras (教養、文学、書状)
Maitines (朝課)、*laudes* (賛課)、*vísperas* (晩課)、*completas* (終禱)
Manes (死者の魂)
Mientes (思考)
Modales (行儀、マナー)
Nupcias (婚礼)

Pandectas (ローマ法のパンデクテン)

Parias (パリアス)

Partes (人の知性)

Penates (ペナテス神)

Pinzas (クリップ)

Preces (神への請願)

Tinieblas (闇)

Trébedes (五徳)

Veras (真実、本気)

Viveres (食糧)

Zelos (嫉妬)

128. *lejos*、*lejas* は複数でのみ使われる形容詞である。⁸⁾ 形容詞の中には、女性複数形の語尾において実詞化し、副詞的補語を構成するものがある。たとえば、*de veras* (本当に)、*de buenas a primeras* (突然、だしぬけに)、*por las buenas* (快く)、*a las primeras* (初対面で)、*a las claras* (公然と)、*a oscuras* (暗闇に)、*a secas* (～だけ)、*a escondidas* (隠れて)、*a hurtadillas* (密かに)、*a sabiendas* (知りながら、わざと)。⁹⁾ [*lejos*、*lejas* ではなく] この後者の例は、女性複数形のみが可能であり、上述の補語以外では用いられない。形容詞 *matemático* および *matemática* からは、複数形の実詞 *matemáticas* が派生し、これはこの学問 [= 数学] のいくつかある分野を集合的に意味する。しかし、たとえば、次のホペリャーノスの例のように、この語の単数形を同じ意味で用いるのは全く珍しくない。«No hay uno de nuestros primeros institutos que no haya producido hombres célebres en el estudio de la física y de la matemática 「我々の主たる機関の中で、物理学と数学の学究における著名な人物を輩出してこなかったようなものは、一つもない」»

129. *tenazas* (ペンチ) と *tijeras* (ハサミ) という語は、その基本的な意味において、単数を欠いているが、二次的な、そして比喩的な意味においてはそうではない。ゆえに、動物のハサミは *tenaza* と呼ばれるし、馬車や荷車の「ボディーを載せる桁となる」部分を *tijera* と呼ぶのである。そして、*hacer tenaza* (獲物を掴む)、*ser una buena tijera* (仕立てが上手である)¹⁰⁾ という言い回しが用いられる。また、意味の違いを伴わず、*bofe* と *bofes* が、*calzón* と *calzones* が、*funeral* と *funerales* が使用される。そして、詩人はときどき単数形の *tiniebla* (暗闇)¹¹⁾ という語を用いる。*pulmón* と *pulmones* (肺) についても、両方が言われるが、複数形はこの臓器全体を指示し、単数形はこれを構成する葉(よう)の一つを意味する。大雑把といえども、実詞の数に関して、カスティーリャ語のすべての特性をここで拾い上げるのは可能なことではない。

130. 単数を欠いている名詞の多くは、多数性の観念を明確に表している。たとえば *añicos* (破片)、*efemérides* (過去の同一日に起きた事象の一覧)、*lares* (家の守り神、家)、*penates* (家の守り神) がそうであるし、*cordilleras* (山脈) や *archipiélagos* (群島) といった名詞や、たとえば *bofes* (動物の肺臓)、*despabiladeras* (ろうそくの芯切りバサミ)、*tenazas* (ペンチ) のように、対となる部分からなる物を表す名詞もそうである。また、この観念がいまは知覚されないような多くの他の語も、元来はこの観念を持っていたということは信ずるに足ることであり、このことを *calendas* (古代ローマにおいて月の初めに徴収された金)¹²⁾ や *fauces* (元来は顎の骨)¹³⁾ という語に見ることができる。

131. 最後に、いくつかの地名において、複数であるかのように見えるもののや、元来の意味においては両方の数を持っていたが、現在では紛れもなく単数であるというものが存在する。たとえば、*Buenos Aires* (ブエノスアイレス)、*el Amazonas* (アマゾン川)、*el Manzanares* (マンサナーレス川)

のように。それゆえ、*Buenos Aires está a las orillas del río de la Plata*(ブエノスアイレスはラプラタ川の沿岸にある)や *Pastos es una ciudad de la Nueva Granada* (パストスはヌエバグラナダの都市である) のように言い、それぞれの文において複数である *están* や *son* を用いることはできない。数に関するその他の不規則な事例については、それらが現れる実詞や形容詞について扱う箇所に至ったところで、論じることしよう。

第6章 国や地方を意味する屈折

132. 人や物に対して用いられ、そのものの出生地や属する国を意味するいくつかの名詞において、実詞と形容詞の間で語尾の異なるものがある。たとえば、実詞の *godo* (ゴート人) に対し、形容詞は *gótico* である。また、実詞 *persa* (ペルシア人) に対し、形容詞は *persiano* と *pérsico* である。実詞 *escita* (スキタイ人) に対し形容詞 *escítico*、実詞 *celta* (ケルト人) に対し、形容詞 *céltico* といったぐあいである。実詞は人や言語に適用され、形容詞は事物に対して使用される。たとえば、*los persas fueron vencidos por Alejandro* (ペルシア人たちはアレクサンダー大王によって打ち負かされた)、*Zoroastro escribió en el antiguo persa, llamado Zend* (ザラスシュトラはゼンドと呼ばれる古ペルシア語で書いた)、*la vida errante de los escitas* (スキタイ人の放浪生活)、*el traje persiano* (ペルシア風のドレス)、*la lengua escítica* (スキタイの言語) のようにである。元来形容詞であるこれらの名詞の多くで起きていることとは異なり、¹⁵⁾ *francés*、*italiano*、*griego*、*turco* のように当該地方の人や言語を表すために実詞化するものもある。

133. まれに、同一の国や地方を意味するのに二つ以上の形容詞が存在する場合があるが、そのような場合であっても、見境なくでたらめに用いることができるわけではない。したがって、*árabe*、*arábigo*、*arabesco* という三つの形容詞のうち、初めのもの (*árabe*) がアラビアに固有のものを意味して、つねに実詞化する。したがって、その言語を指して *el árabe* あ

るいは *el arábigo* と言うことが可能である（とはいえ私には前者のほうが良いと思われる）が、この国のことを話している際、*los árabes* の代わりに *los arábigos* と言うのは受け入れられないだろう。しかし、通常の運用において最も制限を受けているのは *arabesco* である。なぜなら、これはほとんど美術の用語としてしか用いられないからである。地名を表す形容詞の中には、たとえば *inglés* の意味で用いられる *anglicano*（英国の、国教会の）や、*sevillano* の代わりとなる *hispalense*（セビリアの）のように、排他的に、あるいはふつう、教会に関することのみ適用されるものがある。また、*alcalaíno*（Alcalá de Henares アルカラ・デ・エナレスの）の代わりに用いられる *complutense* や、*madrileño*（マドリードの）の意味で用いられる *matritense* のように、大学や学術に関する形容として用いられるのが良いものもある。同様に、*el golfo pérsico*（ペルシア湾）とは言うが、*el golfo persiano* とは言わない。*latín*（ラテン語）、*romance*（ロマンス語）、*vascuence*（バスク語）のように、言語にのみ適用される実詞もある。ただし、*romance* という語は *lenguas romances*（ローマの言語、すなわちラテン語から派生した言語）に見られるように、形容詞化する。いにしえのスペインで生まれ育った者たちや、その主たる種族の一つの出自である者について、*iberos* と言うが、これを現代のスペイン人について当てはめるのは、純粋に詩的な使い方である。また、*ibérico* という語は常に形容詞として用い、*la península ibérica*（イベリア半島）、*las tribus ibéricas*（イベリアの諸民族）のように言う。*hispano* と *hispánico* は古いスペインにも現代のスペインにも適用できるが、特に詩歌においてそうである。しかし、後者は形容詞以外の機能は認めず、それは、最もふつうには前者に付与される機能でもあるが、一方で *español* は古い時代を指しても現代を指しても使用することができる。この *español* という語は散文において最もふつうの言い方であるが、だからといって韻文と相性が悪いということではない。また、この語は形容詞として用いられるのと同様に、実詞としても用いられる。

我々がこのような観察をすることで、慣用がこの種の名詞に与える特別

な語義が多様であること、そしてそれを検討する必要があることを示されよう。なぜ検討する必要があるかと言えば、各々の国に関する名詞を区別なく使用する¹⁶⁾のがある程度まで許されているのは、詩人のみだからである。

第7章 実詞の女性形語尾

134. 生物を意味する実詞は、女性・雌を表すためにしばしば語尾を変える。以下の例は、もっとも頻繁にみられる屈折を示している。

ciudadano, ciudadana (男性の市民、女性の市民)

señor, señora (紳士、夫人)

cantor, cantora (男性の歌手、女性の歌手)

marqués, marquesa (侯爵、侯爵夫人)

león, leona (雄のライオン、雌のライオン)

barón, baronesa (男爵、男爵夫人)

abad, abadesa (修道院長、女子修道院長)

alcalde, alcaldesa (男性の市長、女性の市長・市長の妻)

príncipe, princesa (王子、王女)

poeta, poetisa (男性の詩人、女性の詩人)

profeta, profetisa (男性の預言者、女性の預言者)

sacerdote, sacerdotisa (司祭、女性聖職者)

emperador, emperatriz (皇帝、女帝)

actor, actriz (俳優、女優)

cantor, cantatriz (男性の歌手、女性の歌手)

czar, czarina (皇帝・ツァーリ、皇后)

cantor, cantarina (男性の歌手、女性の歌手)

rey, reina (王、女王)

gallo, gallina (雄鶏、雌鶏)

135. 語末が以下のようなものは、通常、性変化をしない。*el patriota / la*

patriota (愛国者)、*el persa / la persa* (ペルシャ人)、*el escita / la escita* (スキタイ人)、*un n mida / una n mida* (ヌミディア人)¹⁷⁾ のように *a* で終わる語、*el m rtir / la m rtir* (殉教者)、*el virgen / la virgen* (童貞・処女) のように無強勢の子音で終わる語、そして、ふつうは、*int rprete* (通訳)、*caribe* (カリブ人)、*ateniense* (アテナイ人) のように *e* で終わる語も変化しない。また、*marroqu * (モロッコ人)、*guaran * (グアラニー人) のように強勢のある *i* で終わる語もそうである。しかしながら、*gigante / giganta* (巨人・大柄の人)、*elefante / elefanta* (ゾウ)、*pariente / parienta* (親戚) のように *ante* や *ente* で終わる語や、*alcahuete / alcahueta* (売春斡旋人)、*hotentote / hotentota* (コイコイ人)¹⁸⁾ のように *ete* や *ote* で終わるものは、性変化をする。

136. 家系を表す苗字は、男女両性のどちらにとっても、語尾を変化させることはない。それゆえ、「don Pablo Herrera (パブロ・エレーラ氏)」、
 «do a Juana Hurtado (ファナ・ウルタド氏)」、
 «do a Isabel Donoso (イサベル・ドノソ氏)»¹⁹⁾ のように言う。

137. 公的な職務や役職を意味する実詞においては、女性形語尾は、その職務を執行する者の妻を表すことが多い。たとえば、この意味で *presidenta* (社長・大統領の妻)、*regenta* (支配者・摂政の妻)、*almiranta* (提督の妻)²⁰⁾ という語が使用される。また、その職務が女性に与えられるものの場合、女性形語尾は、*reina* (女王・王妃)、*priora* (小修道院長)、*abadesa* (大修道院長) のように、上記の「妻」の意味に加えて当該役職者を、あるいはその役職者のみを意味する²¹⁾。しかし、時にこれが弁別されることがある *la regente* は「自身が支配する女性」であるが、*la regenta* は「支配者の妻」である。

138. *hijodalgo* (郷士) と *hijosdalgo* の女性形は、それぞれ *hijadalgo* と

hijasdalgo である。

139. (性を区別するのに形態を容易に変えられる語尾である、*-a* や *-o* で終わるものでさえそうだが) 実詞の中には、同一の語尾でもって両方の性に適用され、それゆえ、共性ないし通性実詞の類に属するものがある。たとえば、*juez* (判事)、*testigo* (目撃者) は共性実詞、²²⁾ *abeja* (ハチ)、*hormiga* (アリ)、*avestruz* (ダチョウ)、*pez* (魚)、*insecto* (昆虫)、*gusano* (ミミズのような細長い虫) は通性実詞²³⁾である。

140. *macho* と *hembra* のいずれかの実詞が同格で後続する通性実詞²⁴⁾については、その両方の実詞が異なる文法性である場合、それは両性実詞²⁵⁾の類に移っていると言えよう。たとえば、*la rana macho* と言う場合、この語句の中には二つの実詞がある。女性実詞である *rana* と男性の *macho* である。したがって、これを両性実詞として用いることができ、*la rana macho es más corpulenta o corpulento que la hembra* (オスのカエルはメスよりも体が大きい) のように、*corpulenta* と *corpulento* とも言うことができる。²⁶⁾ それにもかかわらず、通性実詞に先行する形容詞は常に文法性においてこの実詞と一致する。したがって、*el liebre macho* や *una gusano hembra* のように言うことはできない。²⁷⁾ とはいえ、ルイス・デ・グラナダ修道士の文章に見られる *la escorpión hembra* のように、²⁸⁾ この規範に反する例には事欠かない。

141. 最後に、両性を表す名詞が互いに特殊で、共通の語根を持たないいくつかの種類がある。たとえば、雄牛は *buey* や *toro* と言うが、雌牛は *vaca* と言い、ほかに *carnero* (羊) と *oveja* (雌羊)、*caballo* (雄馬) と *yegua* (雌馬) といった組み合わせがある。

142. 両性に対して二つの形式が存在する場合、我々は性別を無視して、

種全体を指すのに男性形を用いる。したがって、*hombre* (男性)、*autor* (男性の作家)、*poeta* (男性の詩人)、*león* (雄のライオン) といった語が、特段、女性や雌に関係しない場合について語る場合に適用される。たとえば、*«el hombre es el más digno estudio de los hombres* 「人間は、人類の最も価値のある研究〔対象〕である」、*«no se tolera la mediocridad en los poetas* 「詩人に見られる凡庸さは耐えられたものではない」、*«el león habita las regiones más ardientes del Asia y del África* 「ライオンはアジアとアフリカの最も暑い地域に住む」のようにである。しかし、この規則は普遍的とは言えない。というのも、*paloma* (雌の鳩→鳩)、*gallina* (雌の鶏→鶏)、*oveja* (雌の羊→羊) のように、まれに種全体を指すのに女性形が好まれる場合もあるからである。この方策以外では、男女両性のペアに言及する際、男女両方の形式を並列するというやり方がもっともよく見られる。たとえば、*el presidente y la presidenta* ([組織などの] 男性の長と女性の長)、*el regidor y la regidora* (男性の市会議員と女性の市会議員) といった例がそうである。ただ、父と母を指して *los padres* といい、国王と王妃を指して *los reyes* と言う。また、父方母方両系の祖父母を指して *los abuelos paternos o maternos* と、夫と妻を指して *los esposos* と言うのである。³⁰⁾ このテーマについては、他の多くの考察がなされうるだろうが、これまでに挙げた例は、かなり変異があって気まぐれともいえる用法の研究を、いくらか容易にしてくれるであろう。

第8章 形容詞の女性形語尾

形容詞の女性形語尾は、以下のような規則に従い、男性形から作られる。

143. [第1の規則] *o* を除き、すべての母音は不変である。たとえば、*un árbol indígena* (ある土地固有の木)、*una planta indígena* (ある土地固有の植物)、*un hombre ilustre* (著名な男性)、*una mujer ilustre* (著名な女性)、*un leve soplo* (微かな風)、*una aura leve* (微かな風)、*trato baladí* (重要で

はない交友)、*conducta baladí*(取るに足りない振る舞い)、*pañó verdegay*(ライトグリーン³¹⁾の布巾)、*tela verdegay*(ライトグリーン³¹⁾の布)、*pueblo hindú*(ヒンドウーの民)、*lengua hindú*(ヒンディー語)のように。

144. [第2の規則] 同様に、子音で終わるものもまた不変である。例として *cuerpo gentil*(優美な肉体)、*figura gentil*(優美な姿)、*hombre ruin*(品性下劣な男)、*mujer ruin*(品性下劣な女³¹⁾)、*hecho singular*(特異な事実)、*hazaña singular*(類まれな偉業)、*un caballero cortés*(礼儀正しい紳士)、*una dama cortés*(礼儀正しい婦人)、*el estado feliz*(幸福な状態)、*la suerte feliz*(幸運)などが挙げられよう。

145. [第3の規則] *o* で終わっているものは、*lindo*、*linda*(美しい)、*atrevido*、*atrevida*(大胆な)のように、この *o* を *a* に変える。

なお、例外には以下のようなものがある。

146. [第1の例外] *an*、*on*、*or* で終わる形容詞は語末に *a* を添加する。たとえば *holgazán*、*holgazana*(怠惰な)、*juguetón*、*juguetona*(ふざけるのが好きな)、*traidor*、*traidora*(裏切り者の)がこれに該当しよう。しかし、以下の語は例外であり、不変である。*mayor*(より大きい)、*menor*(より小さい)、*mejor*(より良い)、*peor*(より悪い)、*superior*(より上等の)、*inferior*(より下等の)、*exterior*(外部の)、*interior*(内部の)、*anterior*(以前の)、*posterior*(以後の)、*citerior*(こちら側の)、*ulterior*(向こう側の)の各語。ただし、*superior* は、共同体や公社の長である女性を意味する実詞のとき、*a* を添加する³²⁾。

147. [第2の例外] *-ete* で終わる縮小辞、*-ote* で終わる増大辞は、*regordete*、*regordeta*(小太りの)、*feote*、*feota*(ひどく醜い)のように、語末の *-e* を *-a* に変える。

148. [第3の例外] 国や地方を意味する形容詞は頻繁に実詞化するが、これらは女性形語尾を備えている実詞を模倣し、女性形を構成する。*español*、*española*(スペイン人男性・女性)、*danés*、*danesa*(デンマーク人男性・女性)、*andaluz*、*andaluza*(アンダルシア地方出身の男性・女性)のように。したがって、これらの名詞を形容詞として用いる場合であっても、*la lengua española*(スペインの言語、スペイン語)、*las modas francesas*(フランスの流行)、*la gracia andaluza*(アンダルシア風の優美)、*la fisonomía hostentota*(コイコイ族の人相)、*la industria catalana*(カタルーニャの産業)、*las playas mallorquinas*(マヨルカの海岸)のように言うのである。

第9章 名詞の語尾脱落

149. 単語の中には、場合に応じて、縮約を起こし物的構造〔形態〕を変化させるものがある。その縮約は2とおりの可能性があり、これを区別するのはそれほど重要なことではない。そうでなければ、多くの文法家たちがこれらを様々な異なる名前で呼ぶことはないであろう。

150. 縮約によって、語末の一音以上の音が消失する場合、これを語尾脱落(apócope)と呼ぶ。一方で、その縮約により、語末にない音が縮まっている場合や、または、*l*の音を*ll*にするように、不完全な音(un sonido menos lleno)が他の音に置き換わったり、無強勢の母音が、強勢のある同じ音に置き換わったりする場合、この現象によって語が語中音消失している(sincoparse)という。

語尾脱落を起こすのは、以下のような実詞である。

151. [第1] 固有名詞 *Jesús* が *Cristo* に後続される場合。ただし、その場合 *Jesucristo* のように一語として書かれるのが常である。

152. [第2] スペイン語圏の歴史的人物の固有名のいくつかが、父親の名 (*patronímico*) から派生した呼び名によって後続される場合。その姓は、*González* (Gonzalo の息子)、*Rodríguez* o *Ruiz* (Rodrigo の息子)、*Álvarez* (Álvaro の息子)、*Martínez* (Martín の息子)、*Ordóñez* (Ordoño の息子)、*Peláez* o *Páez* (Pelayo の息子)、*Vermúdez* (Vermudo の息子)、*Sánchez* (Sancho の息子)、*Díaz* (Diego の息子)、*López* (Lope の息子) などのように、元の固有名によって指示される人物の息子である特徴を意味するものである。これらの呼び名の意味は昔は確かにそのようなものであったが、現代では受け継がれる姓である。固有の名と上記の父姓によって歴史的人物が指示される場合、前者「固有の名」が語尾脱落を許す語であれば、通常その脱落を被る。したがって、*Alvar Fáñez* (Álvaro ではなく)、*Fernán González* (Fernando ではなく)、*Per Anzúrez* (Pedro ではなく)、*Ruy Díaz* (Ruiz ではなく) となる。しかし、父姓が省略される場合、この語尾脱落は起きない。それゆえ、[単独の] *Fernán* や *Hernán* はカステーリャ伯爵 *Fernán González* ³³⁾ と、*Hernán Pérez del Pulgar* ³⁴⁾ を指示するためのみに使われるのであって、それ以外では誤った表現となるだろう。*Ruy de Vivar* や *Alvar de Toledo* というのも同様に誤っている。

153. 語尾脱落を起こす形容詞には、以下のものがある。

- 1 類：*uno* (1つの)、*alguno* (何らかの)、*ninguno* (何の～もない) は語尾脱落によって、それぞれ *un*、*algún*、*ningún* となる。
- 2 類：*bueno* (良い)、*malo* (悪い) は語尾脱落によって、それぞれ *buen*、*mal* となる。
- 3 類：*primero* (最初の)、*tercero* (3番目の)、*postrero* (最後の) は語尾脱落によって、それぞれ *primer*、*tercer*、*postrer* となる。
- 4 類：*grande* (大きい) は語尾脱落によって、*gran* となる。
- 5 類：*santo* (聖なる) は語尾脱落によって、*san* となる。

154. 上記の形容詞の語尾脱落は、単数においてのみ可能であり、当該の形容詞が実詞に先行している必要がある。[実詞に先行していない] 以下のような語列においては、完全形を正確に用いなければならない。*hom-bre alguno*（[否定の文脈で] 何人も～ない）、*el primero de julio*（7月1日）、*el capítulo tercero*（第3章）のように。たとえば、*entre los salones de palacio no hay ninguno que no esté ruinoso*.（宮殿の広間であれば、ボロボロになっているものなど一つもない）となる。したがって、*un célebre poeta*（著名な詩人）、*un poeta de los más famosos*（最も有名な類の詩人）、*uno de los más famosos poetas*（最も有名な詩人のうちの一人³⁵⁾）と言う。

155. *buen*、*mal*、*gran*、*san* の形態は実詞の直前に来なければならない。たとえば、*buen caballero*（良き紳士）、*mal pago*（悪い支払い）、*gran fiesta*（素晴らしい祝祭）、*San Antonio*（聖アントニオ）、*el apóstol San Pedro*（使徒聖ペテロ）のようにである。したがって、たとえば [*mal* や *gran* が実詞の直前に来ていないため] *mal*, *inícuo*, *inexcusable proceder*（悪く、不正で許しがたいふるまい）や *gran opíparo banquete*（素晴らしい豪華な饗宴）のように言うことはできないであろう。これら以外の、語尾脱落を起こす形容詞は、*algún desagradable contratiempo*（ある不快な事件）、*el primer infausto acontecimiento*（最初の不幸な出来事）のように、他の形容詞が〔後続する名詞との〕あいだに割って入るのを許容する。しかしながら、次の例の *primero* のように、形容詞に接続詞が後続する場合には、語尾脱落は起きない。*el primero y más importante capítulo*（第1の、そして最も重要な章）。

156. 上述の形容詞は、*primero*、*postrero*、*grande* を除き、女性においては語尾脱落を起こさないため、*una buena gente*（善人）、*una mala conducta*（悪いふるまい）、*la Santa Virgen*（聖母）、*Santa Catalina de Sena*（シエナの聖カテリーナ³⁶⁾）のように言うが、それにもかかわらず、強勢のある

母音の a で始まる女性名詞の前では *un* を用いることが可能で、*un alma* (精神)、*un águila* (ワシ)、*un arpa* (ハープ) のように言う。この現象は、特に詩歌においては *algún* と *ningún* にも広がり、その詩歌では *un hora* のようにも表現されることがよくある。³⁷⁾

157. 語尾の脱落が可能である場合に、いつでもそれを利用しなければならないという訳ではない。[男性単数形の] *un*、*algún*、*ningún*、*buen*、*mal* の語尾脱落は必須である一方、*primero* の語尾脱落は、男性形の語尾では *el primer capítulo* (第一章) のように必須であるが、女性形においては、あまり使用はされないものの、*la primera victoria* (初勝利) または *la primer victoria* のように語尾の脱落は任意である。*tercero* と *postrero* については両性において語尾の脱落は任意であるが、最も一般的なのは男性形では *el tercer día* (第三日) のように語尾を脱落させ、女性形では *la postrera palabra* (最後の言葉) のように語尾を脱落させない形式である。³⁸⁾
grande は、母音の前ではふつう *grande edificio* (大きな建物) のように語尾脱落を起こさずにそのまま *grande* と言い、子音の前では *gran templo* (大寺院) のように語尾脱落を起こす。³⁹⁾

158. 文法家の中には、母音 [で始まる語] の前において物理的な意味で *gran* という形式を用い、子音 [で始まる語] の前において精神的・知的な意味で *grande* を用いるのだという例外を打ち立てる者もある。たとえば *un gran acopio de mercaderías* (大量の商品)、*un grande pensamiento* (高尚な考え) のように。だが、このような区別は現実の運用によって確認されていない。この例外を否定するためには、きわめてありふれている *un gran príncipe* (一人の偉大なる王子)、*el gran señor* (医大なる氏)、*el gran visir* ([トルコの] 首相)、*el Gran Capitán* (大將軍)、*el gran maestro* (騎士修道会総長) などの用例を示すだけで充分である。子音 [で始まる語] の前における *grande* は、どのような意味においても強制的であるという

のが、おそらくより正確であろう。たとえば、*una grande casa* (大きな家)、*una grande función* (重要な役割)、*un grande sacrificio* (大きな犠牲) のように。語というものに、その語が含む意味の拡張を与えることは、強調から自然と出てくる結果であると思われる。そして、まさしくそれゆえに、語の音と強勢が強調され、その語への注意を向けさせるのである。

159. *san* という語は男性の固有名詞に先行するため、*un santo anacoreta* (隠修者) や *el santo Patrón de las Españas* (スペイン諸国の庇護聖人) においては、語尾脱落が起きることはない。また、*san* という語を用いて、カトリック教会が新約聖書に従って聖人として認めた人物たち以外の者を指し示すことはない。したがって、我々は *San Pedro* (聖ペドロ) や *San Pablo* (聖パブロ) と同じようには、*San Job* と言うことはなく、*el Santo Job* (聖人ヨブ) のように言う。とはいえ、*San Elías profeta* (預言者エリヤ) のような例外がいくつかある。また、*Domingo* (ドミンゴ)、*Tomás* ないし *Tomé* (トマスないしトメ)、*Toribio* (トリビオ) の3つの名前の前では、つねに *santo* と言う。しかし、小アンティル諸島の島の一つは、*San Tomás* (セントトーマス島)⁴⁰⁾ である。一方で、*Santiago* (聖ヤコブ) のように、この名で指示される人物が何者であれ、名前と尊称が不可分となったものがある。以上で示した例以外の語尾脱落の現象については、これに従う名詞について語る機会が巡ってきたら、言及することにしよう。⁴²⁾

(未了)

参考文献

RAE y ASALE (2014) *Diccionario de la lengua española 23ª edición*, Espasa, Madrid.

拙稿 (2007) 「アンドレス・ベリヨ『カスティーリャ語文法』日本語訳 (1)」*IBERIA* 8, pp.31-44, 神戸市外国語大学大学院イスパニア語学・文学研究会。

拙稿 (2009) 「アンドレス・ベリヨ『カスティーリャ語文法』日本語訳 (2)」*IBERIA* 9, pp.97-117, 神戸市外国語大学大学院イスパニア語学・文学研究会。

拙稿 (2010) 「アンドレス・ベリヨ『カスティーリャ語文法』日本語訳 (3)」 *IBERIA* 10, pp.142-162、神戸市外国語大学大学院イスパニア語学・文学研究会。

拙稿 (2020) 「アンドレス・ベリヨ『カスティーリャ語文法』日本語訳 (4)」『総合学術研究』37, pp.53-71、亜細亜大学総合学術文化学会。

注

- 1) 我々が *Edaf* 版と呼ぶのは、Bello, Andrés (1984) *Gramática de la lengua castellana*, EDAF, Madrid であり、pdf 版は Fundación Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes が <http://www.cervantesvirtual.com/servlet/SirveObras/04694925499104944157857/index.htm> で提供している版である。拙訳の (1) からこの二つの版を見ている。
- 2) 「分割可能なものを表す呼称名詞」とはこの上段で言っている「水」や「ワイン」、「金」「銀」といった名詞を指す。
- 3) *veto* は「拒否権を発動する行為」という意味では複数形で用いることが可能である。また、*álbum* はラテン語では「白色」「白板」を意味したが、現代スペイン語では「アルバム」であり、これもやはり複数形が存在する (*álbums/álbumes*)。
- 4) *La Alpujarra* (*Las Alpujarras*) はスペインのアンダルシア州東部の地域。コロンビアにも同名の都市があるが、単数形と複数形で揺れが見られるのは、前者の地域名である。
- 5) 正確には、古代ローマにおける暦で3月、5月、7月、10月の7日、また、それ以外の月の5日を指す。
- 6) やはり古代ローマにおける3月、5月、7月、10月の15日、また、それ以外の月の13日を指す。
- 7) ローマで権威の象徴として用いられた、斧に棒の束を縛り付けたもの。そのラテン語読みから「ファスケス」とも呼ぶ。
- 8) *lejos* という語を形容詞として扱うのは、現代スペイン語の文法記述の観点から言えば、端的に言って誤っている。本書の注釈者である Rufino José Cuervo もこの箇所に注を付けている。Cuervo は “*Lejos y cerca* construidos con un verbo se allegan en el sentido a un adjetivo empleado como predicado: «El lugar queda lejos, cerca»: distante, cercano. De aquí pasan a emplearse por el adjetivo en otras construcciones: «Llegó a un lugar cerca de París, no lejos del Sena»” と述べ、副詞である *lejos* が形容詞として解釈されうる構文が存在すること、また、形態論上、確かにこの語が形容詞として用いられていると分析するしかない *lejas tierras* という表現の存在を指摘している。

- 9) Gaspar Melchor Jovellanos (1744-1811) はスペインの作家、法律家。スペイン王立アカデミーの会員でもあった。
- 10) Cuervo の註で、ここの不定冠詞は不要であると指摘されている。
- 11) 通常は複数形で用いられることが多い。
- 12) 現代では、古代ローマの暦における朔日そのものを指す。
- 13) 現代では「口の内奥」の意で用いられる。
- 14) *Pastos* ではなく *Pasto* であると、Cuervo の註にある。
- 15) 形容詞としては「フランスの、フランス人・語の」、実詞としては「フランス人・語」を意味する。それ以外の語も同様である。
- 16) やや分かりにくいのが、詩人のみが言葉の意味をずらして用いることができるという考え方がある。
- 17) 紀元前3世紀ごろからアフリカ北部、現在のアルジェリアの辺りに存在した王国。紀元後にローマによって属州化される。
- 18) 以前は文字どおり「ホッテントット (人)」と呼ばれていた民族を指す。
- 19) Pablo が男性であるからといって、Herrera という苗字を Herrero とはしない、Isabel が女性であるからといって、Donoso という苗字を Donosa とはしない、という意味であらう。
- 20) この『カスティーリャ語文法』の出版から170年が経過し女性の社会進出が進んだ結果、これらの語が「～の妻」の意味で用いられることはきわめて少なくなった。-te の語尾のまま女性名詞として用いるか、-ta とするかで使用実態の揺れはあるものの、いずれも「当該職務を遂行する女性」を意味する。
- 21) RAE y ASALE (2014) で各語を確認すると、reina には「女王」のほかに「王の妻・王妃」の意味はあるが、priora と abadesa にそれぞれ「小修道院長の妻」「大修道院長の妻」の意はない。
- 22) 「共性実詞」は原文では '(sustantivos) comunes' である。共性実詞においては、形態は共通であるものの、文法性は区別される。すなわち、これらの実詞に定冠詞を付すならば、el juez/la juez (jueza という形も可能)、el testigo/la testigo となる。
- 23) 「通性実詞」は原文では '(sustantivos) epicenos' である。通性実詞においては、その語の指示対象の雌雄にかかわらず、特定の文法性でその語を運用する。「アリ」で言えば、雄のアリを指そうが、雌のアリを指そうが、la hormiga である。
- 24) *macho* や *hembra* は現在では形容詞として記述されるのが常であるが、ここで言っている「両方の実詞」とは、先行する通性実詞と、後続する *macho* あるいは *hembra* を指す。

- 25) 「両性実詞」は原文では ‘los (sustantivos) ambiguos’ であり、直訳すれば「曖昧な性の実詞」ということになる。
- 26) *la rana macho* の場合、*la rana* は女性実詞であるが、*macho* 「雄の」があるため、これが指す現実のカエルは雄である。これのいずれに一致させるかによって、形容詞 *corpulento* の形態が変わるといふ。
- 27) 「通性実詞に先行する形容詞」の例として、冠詞を用いた例が登場しているが、Bello は冠詞類を形容詞の下位区分としている。*liebre* は女性実詞であり、*gusano* は男性実詞であるから、それぞれ *la liebre macho*、*un gusano hembra* が正しい。
- 28) ルイス・デ・グラナダ修道士 (1504-1588) は、スペイン人ドミニコ会士の作家。*escorpión* は男性実詞であるから、*el escorpión hembra* とするのが規範に沿う形式である。
- 29) ここは原文では ‘los nombres peculiares…’ となっているが、Bello 自身の用語法では nombres (名詞) ではなく sustantivos (実詞) とすべきところである。繰り返しになるが、「実詞」が現代の通常用語法で言う名詞にあたり、「名詞」は実詞と形容詞の上位概念である。
- 30) *los padres* は「父」*padre* の、*los reyes* は「国王」*rey* の、*los abuelos paternos o maternos* における *abuelos* は「祖父」*abuelo* の、*los esposos* は「夫」*esposo* の、それぞれの複数形に男性複数形の定冠詞が付いたものである。
- 31) *mujer ruin* の例だが、我々が参照している pdf 版には載っていない一方で、Edaf 版には載っている。論旨から考えてもここでは女性名詞と共に用いられる必要があるので、載っている版に従い、含めておく。
- 32) 通例、宗教上の共同体、修道院の長を意味する。
- 33) Fernán González (c. 910-970) はブルゴス生まれのカスティーリャ伯。後の時代の武勲詩に登場し、知られる。
- 34) Hernán Pérez del Pulgar [y García Osorio] (1451-1531) はカスティーリャ王国の騎士。レコンキスタの完成につながるグラナダの戦いにおいて功名を立てたという。
- 35) ‘no hay ninguno que…’ や ‘uno de los más famosos poetas’ の例における *ninguno* や *uno* は実詞に先行しておらず、形容詞としては機能していない。現代の用語法で言うならば、「代名詞」としての用法である。
- 36) 「*primero*、*postrero*、*grande* を除き」とあるが、これでは、これら3語すべてが女性名詞の前であっても語尾脱落を起こす、と解釈できることになる。しかし、これは現代スペイン語の記述に反し、この3語の中で女性名詞の前で語尾脱落を起こすのは *grande* のみであることに注意されたい。

- 37) ここには Cuervo による次のような註がある。Las expresiones *en buen hora*, *en mal hora*, ocurren con frecuencia en Cervantes y otros; pero también se dice *en buena hora*, *en mala hora*. (セルバンテスなどには *en buen hora* や *en mal hora* といった言い回しも頻繁にみられるが、それぞれ *en buena hora* や *en mala hora* のようにも言う)。現代スペイン語では、この後者が規範的には正しい形である。
- 38) 現代のスペイン語において、*la primer victoria* のように、単数の女性名詞の前で *primera* ではなく *primer* の形態を用いるのは、正しいとはみなされない。*tercero* や *postrero* の現代における慣用についても同様である。
- 39) 現代の慣用では、後続する名詞が母音で始まるか否かは関係なく、男女ともに単数名詞の前で *grande* は *gran* となる。
- 40) アメリカ領ヴァージン諸島の島で、英語で Saint Thomas と呼ばれる。*San Tomás* に見られる変則的な強勢について、注釈者の Cuervo は、この英語の名の崩れたものであるとしている。
- 41) 「聖人の名であろうと、世俗の人間の名であろうと」という意味であると思われる。
- 42) 我々が使用している pdf 版では…*cuando se ofrezca hablar de los nombres que están sujeto a ellas* となっており、関係詞節中の *sujeto* が男性単数形になっている。このようになっている原因は不明であるが、先行詞が *los nombres* であるから男性複数形が用いられるはずである。Edaf 版では、*sujetos* と正しく書かれている。

亜細亜大学「総合学術文化学会」規程

第1条（名称・所在）本学会は、「亜細亜大学『総合学術文化学会』」と称し、事務局を亜細亜大学内に置く。

第2条（目的）本学会は、言語、情報、文化、体育、教育に関する学問の研究を行い、もって会員相互の研究活動に資するとともに、学術・文化の発展に寄与することを目的とする。

第3条（事業）本学会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

(1) 学会誌『亜細亜大学 学術文化紀要』の刊行

(2) その他

第4条（会員）本学会の会員は、本学会の趣旨に賛同する亜細亜大学専任教員とする。

第5条（構成）本学会は、次の者をもって構成する。

(1) 会 長 1 名 (2) 副会長 1 名 (3) 会 員

第6条（総会・会長・副会長）

(1) 本学会は、年次会員総会を開催し、会長、副会長、編集委員（6名）を互選する。

(2) 会長は、本学会を総括し、代表する。

(3) 会長は、年次会員総会および臨時会員総会を招集する。

(4) 副会長は、会長を補佐し、総務をつかさどる。

第7条（編集委員会・編集委員長）

(1) 編集委員は、編集委員会を構成し、委員長を互選する。

(2) 編集委員長は、編集委員会を総括し、代表する。

(3) 編集委員長は、編集委員会を招集する。

第8条（任期）会長、副会長ならびに編集委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

第9条（会計）

（1）本学会の運営は、大学の補助金による。

（2）年度会計報告は、会長が年次会員総会において行う。

第10条（細則）本規程の施行に関する細則は別に定める。

第11条（改正）本規程の改正は、会員総会出席者の過半数の同意を得て行う。

第12条（施行）本規程は、平成14年4月1日から施行する。

亜細亜大学『学術文化紀要』刊行規程

(目的および名称)

1. 「亜細亜大学『総合学術文化学会』」会員（以下「会員」という）の研究成果を発表し、学術・文化の発展に寄与することを目的として、研究誌『学術文化紀要』（以下「本誌」という）を刊行する。
2. 上記研究成果とは、論文・研究ノート・書評ならびに資料等をいう。

(刊行)

3. 本誌の刊行は年2回とし、7月と1月に刊行する。

(投稿資格)

4. 本誌に研究成果を投稿する資格を有する者は、会員、非常勤講師（共通科目担当）、ならびに学外研究者・教育者とする。
5. 非常勤講師の場合は、会員の推薦を必要とし、編集委員会の議を経て、投稿を認める。
6. 学外研究者・教育者の場合は、会員との共同執筆の場合に限り、投稿資格を有するものとする。

(発行者)

7. 本誌の発行者は、「亜細亜大学『総合学術文化学会』」とする。

(投稿および掲載)

8. 本誌への投稿および掲載は、次のとおりとする。

(1) 和文投稿原稿の分量は、次のとおりとする。

論文：400字詰め原稿用紙40枚以内

研究ノート・書評・資料等：同上20枚以内

(2) 和文以外の言語による投稿の分量は、和文に準ずるものとする。

- (3) 投稿論文原稿については、本誌の質の維持・向上のため、査読審査を行うものとする。

査読の実施に関しては、別に定める「査読審査制度内規」によるものとする。

- (4) 原稿には、英文、その他の言語による題名およびローマ字表記による執筆者氏名を付記するものとする。
- (5) 原稿（書評、資料等を除く）には、英文、その他の言語による要旨 200 語程度を付するものとする。
- (6) 投稿論文原稿は、査読審査終了分から、順次、掲載可能最新号に掲載するものとする。
- (7) 資料原稿については、資料および本誌に掲載することの学問的意義を示す投稿者の意見を資料前文として記載するものとする。
- (8) 掲載原稿のゲラ校正は、原稿執筆者が行う。
- (9) 本誌に掲載された研究成果については、その抜き刷り 30 部を原稿執筆者に提供する。
- 30 部以上を希望する場合は、超過分の経費を原稿執筆者が負担する。
- (10) 投稿原稿の返却は行わない。
- (11) 本誌に掲載された研究成果についての質疑については、原稿執筆者において応ずるものとする。
- (12) 投稿原稿は、本誌の目的に照らして、編集委員の過半数が不適格と認めた場合には掲載しないものとする。

(原稿料)

9. 本誌掲載原稿の原稿料は支給しない。

(学術リポジトリ)

10. 本誌に掲載された学術論文等は、「亜細亜大学学術リポジトリ」へ登録し、公開するものとする。ただし、執筆者から、辞退の申し出があった学術論文等については、これを行わない。

(規程の改正)

11. 本規程の改正は、編集委員会の過半数の同意を得て行うものとする。

(実施)

12. 本規程は、平成 14 年 4 月 1 日より実施する。

平成 22 年 4 月改定

平成 23 年 11 月改定

平成 28 年 7 月改定

亜細亜大学『学術文化紀要』投稿要領

総合学術文化学会紀要編集委員会

1. 本誌に研究成果を投稿する資格を有する者は、会員、非常勤講師（共通科目担当）、ならびに学外研究者・教育者とする。非常勤講師の場合は、会員の推薦を必要とし、編集委員会の議を経て、投稿を認める。学外研究者・教育者の場合は、会員との共同執筆の場合に限り、投稿資格を有するものとする。
2. 投稿内容は、言語、情報、文化、体育、教育に関する論文・研究ノート・書評ならびに資料等とし、完結した未発表のものに限る。
3. 投稿論文原稿については、本誌の質の維持・向上のため、査読審査を行う。
4. 資料原稿については、資料および本誌に掲載することの学問的意義を示す投稿者の意見を資料前文（1000 字程度）として記載する。
5. 原稿の掲載可否および掲載の時期は、編集委員会において決定する。
6. 投稿された原稿は返却しない。
7. 原稿は電子機器で作成するものとし、原則として和文原稿は A4 判用紙に横書きで、全角 40 字× 38 行、和文以外の言語による原稿は A4 判用紙に横書き、ダブルスペースで作成する。
8. 投稿の際は原稿 2 部と電子媒体（CDROM、USB メモリ等）を提出する。論文投稿の場合は、査読用のため 2 部の原稿のうち 1 部は著者名を削除すること。
9. 原稿の表題のページには論文・研究ノート・書評および資料等の区分を明記する。
10. 原稿の訂正が求められた場合、訂正済みの原稿 1 部とその電子媒体を提出する。ただし、訂正が軽微な場合は、原稿とその電子媒体を再提出

せず、校正の際に必要な訂正を行ってもよい。

11. 投稿者には抜き刷り 30 部を無料提供する。31 部以上希望する場合は追加分を投稿者の負担として増刷することができる。希望者は投稿時に追加部数を表題のページに朱記すること。
12. 投稿原稿の分量は原則として、論文の場合、A4 判用紙（横書きで全角 40 字×38 行）で 12 枚以内（図表、抄録、注などを含める）、研究ノートの場合、A4 判用紙（横書きで全角 40 字×38 行）で 6 枚以内（図表、抄録、注などを含める）、書評・資料等の場合、A4 判用紙（横書きで全角 40 字×38 行）で 6 枚以内（図表、注などを含める）とする。和文以外の言語による原稿の分量は上記和文原稿の場合に準ずる。
13. 原稿は白黒印刷されることを前提に作成する。学術的にカラー印刷が必要な場合は、カラー印刷の可否、印刷費用の負担等について編集委員会と協議を行う。
14. 欄外脚注は用いず、末尾注とする。
15. 挿図や写真（ポジに限る）は直接印刷できるような鮮明なものとする。
16. 原稿には、英文、その他の言語による題名およびローマ字表記による執筆者氏名を付記する。
17. 論文原稿と研究ノート原稿には、英文、その他の言語による 200 語程度の要旨を添える。日本語・英語以外の言語による原稿には、日本語あるいは英語による 1200 字程度の要約添付をお願いする。
18. 投稿原稿は、編集委員長に提出する。

平成 14 年 4 月制定

平成 15 年 12 月改定

平成 20 年 10 月改定

平成 21 年 10 月改定

平成 22 年 4 月改定

平成 25 年 6 月改定

平成 28 年 7 月改定

平成 30 年 6 月改定

亜細亜大学 総合学術文化学会会員名簿

(2021 年 3 月 所属学部 五十音順)

学会会長：関口 勝

同副会長：松本 賢信

経営学部

浅野 麗
板垣 文彦
大山 岩根
小川 直之
オコーナー, ウィリアム
尾上 典子
鎌田 遵
小池 求
齊藤 洋
鹿内 菜穂
清水 淳
関口 勝
原 仁司
堀 玄
三門 準

経済学部

一山 稔之
大森 克徳
奥井 智之
金 廷珉
杉渕 忠基
立尾 真士
土屋 亮
長浜 尚史
藤村 希
松林幸一郎
吉田 律

法学部

池田 明子
稲本 唯史
今津 敏晃
菊池 久一
佐藤 知乃
高澤美由紀
長田 秀一
堀内 昌一
松本 賢信
三浦 朋子
矢嶋美都子
八谷 舞

国際関係学部

青山 治世
安形 輝
池亀 直子
大野 亮司
金 賢貞
小竹 直子
ターバーフィールド, ピーター
田部井圭子
千波 玲子
東浦 拓郎
ブルックス, ミキオ

都市創造学部

石田 幸生

執筆者紹介（執筆順）

石 塚 隆 男 経営学部准教授（経営学）
堀 玄 経営学部教授（データサイエンス）
奥 井 智 之 経済学部教授（社会学）
小 竹 直 子 国際関係学部准教授（日本語学、日本語教育学）
高 澤 美由紀 法学部准教授（音声学、スペイン語教育）
土 屋 亮 経済学部講師（スペイン語学）

編集委員（五十音順 ○印委員長）

安 形 輝 国際関係学部教授
今 津 敏 晃 法学部准教授
鹿 内 菜 穂 経営学部講師
関 口 勝 経営学部教授
ブルックス, ミキオ 国際関係学部准教授
○松 本 賢 信 法学部教授

亜細亜大学学術文化紀要 第39号（2021）

ISSN 2436-9411（オンライン）

2022 年 1 月 31 日 発行

編集者 亜細亜大学総合学術文化学会

発行者 亜細亜大学総合学術文化学会

製作者 株式会社 南窓社

発行所 〒180-8629 東京都武蔵野市境 5 丁目 8 番 ☎(0422) 54-3111 亜細亜大学

